

---

# 魔と生きる国

示右

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔と生きる国

### 【Zコード】

Z6632P

### 【作者名】

示右

### 【あらすじ】

魔物ではない、魔族とともに生きる国、ミカド国。

召喚の儀、それが特に美形の姫様とくれば、勇者や英雄が呼ばれるのが世の常。

しかしその召喚は事故で失敗し、外見や能力が一般人と変わらない1人の男が現れた。

しかもちょっとお腹も出ている。

間違つて呼ばれたが帰れない。それならばそれなりに生きていくしかないまい。

ダイスケの異世界での生活が始まる。

なお、登場人物に真女神転生からの引用がありますが、話の展開は  
オリジナル色が強くなっています。その点ご了承ください。

## 第1話 プロローグ

カポーンなんて形容詞、最近聞かなくなつたなあ。  
などと思いつつ湯舟につかる。

「今日も今日とて頑張りました。畜生あの上司、俺がいやだと言わない、いや言えないと思って無茶な仕事振りやがって。断れない性格は自分でも嫌いだ。今の所何とかできているからいいものの」

「ここ数年彼女もいない身である一人暮らしの樹<sup>じゆき</sup> 大介<sup>だいすけ</sup>も独り言が多いようだ。弟はすでに遠方で家庭を持つている。

35にもなつて独り身とは周りの田もなかなか堪える。30を越えてから晩酌のビールで少しお腹が出てきたのも気になつてきていためふとお腹に田をやってみる。

「あれ……？」

透明な湯の中に見えるはずの自分の四肢が見えない。湯の下にさらになぜか水面が見える。

「なんだこれ？……うわっ！」

……落ちた。落ちていくその刹那、水面の上に見えるきょとんとした自分の顔がやけに印象深かった……。

「うわーん！」

風呂から風呂へ落ちた。変な言い回しだがそれが一番しつくりする。

「うおおー！」

もう数年も水に潜るよいことをしてきていない頭がパニックを起こす。

それでもたかが数十センチの深さではおぼれたりせず顔を出すことができ、深い呼吸とともに心も落ち着いてくる。

落ちる直前に下に見えた水面がお湯でよかつた。冷水だつたらさぞかしパニックだつただろう。などと思い周りを見渡してみる。

「どこだここー!?」

広い…。どこかの温泉みたいだ。

石造りの天井や壁がなんともいえない雰囲気をかもし出している。そして視界に入らしき影が見えた。

「うおー!? だれっ?! ……あ、すみません」

別に自分が悪いわけでもないのに反射的に謝罪の言葉が出てしま

う。

「あの？」

反応の無い人影にせらりと声をかけてみる。相手もあわてていたのか、落ちてきたひょうしに出た盛大な湯気が収まる頃反応があつた。

はつとする美人だつた。自分が裸であることも忘れ、つい見とれてしまつ。

20代位だろうか、日本的な顔に緑の髪というのも不思議だつたが、それが彼女の魅力を際立たせていくかのようだ。

だが、いまいち今の日本の雰囲気にそぐわない感じもしたので、反応のあつたその女性にもう一度声をかけてみることにする。その周りにも男女数名いるようだが、反応が無いように見える。とつさに手につかんだままだつたタオルを腰に巻き、口を開く。

それに俺はファンタジーが大好きだ。自分が経験できるのならばここは年の功でこんがらかりだしている頭を押さえ、紳士的にいくべきだ。

将来のためにも。

「あの、すみません。日本語分かりますか?...えつと、Can you speak Japanese?」

「あ、はい、言つていることは分かります。二ホンゴとこののと、その後の言葉はよく分かりませんけど。」

よかつた。日本語で話しているのに日本語という語句の意味が通

じない」とに疑問を持つたが、少なくとも会話はできやうだ。

「よかつた。で、」「は？」ですか？」

「」「は魔と生きる国、ミカド国城です。あなたはどこの町から召喚に感じてくださったのですか？」

「召喚？ 応じたわけではないのですが、自分が先ほどまでいたのは日本の長野県です」

「ニホン？ ナガノケン？ そのような地名はウイルス国にも無いはずですが。それに召喚に応じていないのでしたらなぜこいつ…？」

あれ？ かみ合つてない…。

「自分の知識ではミカド国やウイルス国といった地名は存在してませんでした。召喚という意味は分かりかねますが、落ちてきたとうのが正しいと思います」

「そんなはずはありません。あなた様は私の夫として召還に感じてくれたはずです。そうでなくてはあなた様がここにいる理由が説明できません。わが友ティーター・アガが伺つたはず」

「いえ、会つておりません。どういう方なんですか、その妖精の有力者みたいな人は？」

と、その女性の足元に小さな女の子が現れる。

「ティーター・アガがうしたのですか！？」

「その子がティターニアさん…？」

どう見ても某仲魔と会話契約合体させていくRPGの妖精種最高キャラだ。

現代社会に存在したのか？俺が知らないだけだったのか？いや外でこんな話をしたら頭があれだと思われてしまう。

しかし世界中で自分以外は皆知っていることだとしたら……。

などと少し変な方向に考えが行きだすが、その女の子と美人の回答で思考の無限ループから抜け出すことができた。

「姫、申し訳ありません。飛び間際に何かの気配にぶつかってこの方の世界に飛ばされたようです。この方の世界、魔力がゼロの世界でした。よつて体の構成物の半分以上を使い、魔力に変えて信号を姫の下に送ることで精一杯だったのです」

この人姫だつたのか、あまりぐだけた話し方をしなくてよかつた。それに確かに自分の周りで魔力とか本気で言つてたらどう思われるか……。

「そうでしたか、ティターニアからの魔力信号に危機の色が見えたので急いで呼び戻したのです」

「じゃあ、どうして自分まで…？」

つい口をはさんでしまった。しかたない、自分のことだ、切実である。

ティターニアと呼ばれた少女が、見かけに似合わない申し訳なさそうな表情で言つ。

「世界に魔力が無いため私自身の存在を固められず、ただの魔力と

なつて拡散、消滅しかけた所、あなたの魔力に引き寄せられ重なつてしまつたゆえに一緒にこちらに来てしまつたものと

「そうですか。今は消滅しなかつたことを喜ぶことにしましょ。落ちてくる時にあちらの自分も見えたので、あちらの自分も何とか元氣でしょ。…元氣ですよね…？」

少女に聞いてみた。

「姫のとつたの行動は召喚といつよりも私の魔力をたどり、体の成分でもある魔力の塊をこちらにたぐり寄せるものでした。ですからあなたの魔力がこちらに来て形創つていると思います。あちらで魔力を利用し生きていたのであれば不自由になつてしまふかもせん」

「そうですか。まあ、魔力なんてあちらでは御伽噺に近いものがありましたから大丈夫でしょう。ちなみになぜ自分は自我があるのでしょう？」

「そこまでは…。すみません。素質があつたとしか

多少理解できた。魔力の無い世界だつた現代の自分の魔力部分のみ飛ばされたと。まあ自我についても魔力で思考とかしているわけではないし、元の自分も今までどおりだらう。

じゃあ、こちらの俺はどうしたらいいのだろう。  
と、そうだ、その前に聞いておかねばいけないことがあつたんだ。

「ちょっと聞きたいんですが…？」

姫と呼ばれた美人さんとティターニアと呼ばれた少女が同時にうなずくのを見て、なんとなく仲のいい姉妹みたいだと和む。

「えっと、自分のことは大介だいすけと呼んで下さい。で姫は先ほど夫と言つてましたが、召還とはどんなものなんですか？」

姫がはにかみながら答える。

「ミカド国の婚姻にまつわる方法として、自らの魔力を用いた召喚により、自らにもつとも相性のよい人を選ぶことができます」

「容姿とか性格とかは？」

「それも含めての相性なのです。」

それはそれは。うらやましいなあ。

「そして普段ですと友魔が伺いをたて、まあ大抵は召喚は相手にとつても相性がいいことになるのでめったなことでは断りませんが、相手の了承を得た上で自らの元に相手の友魔が召喚され契約するのです。今回先ほどもティターニアが言ったとおり何かの妨害を受けたこと、友魔ではない大介さんが現れるというより落ちてきたことで禁忌にあたる行為があつたと思われます」

またそれは無粋な。

「ユウマというのはティターニアさんみたいな人のことですか？禁忌というのは？」

「ええ。魔族の友です。魔力の質と量にあわせ、生まれた時に契約がなされていると聞きます。禁為というのは例えば、自分との相性がよくても見栄や自己満足のためにより見かけのいい者や地位のある者を狙い召喚に割り込むことです」

「どこのでもいるんですね、そういう人。」

「ええ、ただ召喚の時間に会わせる必要もありますし、王族に割り込む人間は限られますからじきに分かるでしょう。ダイスケさんは申し訳なくおもいますが。」

「いえいえ、元の自分も大丈夫そうですし、他の人にはできない経験ができるそうで楽しみな部分もありますよ？衣食住さえなんとかなれば」

来てしまったものは仕方ない。そしてもし元の世界に戻れるとしても魔力の無い世界では今の自分がどうなるか分からない。ここはひとつあまり危険なことはしないように週りしていくしかないだろう。

「ダイスケさんの今後や禁忌のことなどりあえずお母様に相談するしかありません」

「自分はどうしたらいいのでしょうか。」

「申し訳ありませんが同席していただきたいのです。服はここに。私も少し恥ずかしいですし」

いつの間にか服を持った女性が傍にいた。

「あ、ありがとうございます。」

少し薄暗い所でよかつた。内容はともかく、久しぶりに美人さんと楽しい時間を過ごせた。何年ぶりだろう。

ただ、腰タオルのみつてのはさすがに場にそぐわないと内心がつかりしていた。気づかなかつた自分が恨めしい……。

借りた服は基平というか浴衣のようなものだった。

顔はともかく外国人風な人々に浴衣を差し出されるのはかなり違和感があつたが、郷に入れば郷に従えということもあり、慣れるしかなさそうだ。周りはシャツとズボン姿であるだけに余計浮いてしまう。

さて、このお姫様、ユリカ様というそうだ。外国人風な人に…以下略。

友魔のティターニアさんは妖精族の中でもかなり上位らしい。例の召喚を邪魔した人の友魔もかなりの上位なんだろう。普通は下位の友魔では干渉すらできないらしい。一般的に友魔のランクを知るのは本人だけであり、ランク自体も普通の人は気にもとめないようだ。まあ生まれ付いての友人、親友といつていいだろう相手をランクつけるような人間は好かれないのだろう。大人になり友魔が離れてしまった人も中にはいるようだ。しかしその禁忌のことも含め、こうも色々自分に話してしまっていいのだろうか。姫の後ろには従者さんのような人もいるのに。聞いてみたら、この従者さんたち、友魔がそれなりに力が強いこと、従者さんの本人の魔力の質などで、生まれ付いて友魔と視角や聴覚を共有しているため、友魔が情報を遮断してしまうと本人には伝わらないらしい。友魔も姫のティタニアさんの配下や友人らしく、ティターニアさんひいては姫の足元を掏うことを考えることはないそうだ。目や耳が少し不自由なことを考えると友魔も利点だけでは無いのかとつてみると、それ以上に危機察知や言葉に出ない相手の感情等が分かる事があるのでそれ以上に利のあることらしい。友魔も従者さんもお互い助け合い惹かれあつているのでいいのだ、と力説されてしまった。

そしてふと気が付くと、ティターニアさんは少女ではなくなつていた。この世界の魔力と姫自身の魔力により力が戻つたらしい。世界の魔力で自身の構成を、友魔として姫からの魔力でより高度な存在へとあがつてゐるらしい。姫より背が高くなつたように見えたが、よく見るとふわりと浮きながら姫の隣を移動していた。

セーラー服を着て立っている部屋の前に着いた。客間と聞いた。

小奇麗な扉を開けると、見た感じ中世的な洋室だった。浴衣の自分がさらに浮く気がする。

高層ビルの窓の外には、物語の中に入る。

従者さんは中に入らず、外から扉を閉めたようだ。そこでテリブルの向こう側、ソファの隣に立つ人物に気がつく。事前に王妃と聞いていたので、失礼にあたらないといいなと思いつつ自己紹介を兼ねながら頭を下げる。姫とよく似た顔立ちの女性は笑みをたたえながら鷹揚にうなずくとソファにすすめてくれる。ありがたく座らせていただきと、テーブルの向かいのソファの空いた片方に座つた姫がいきなり結構な勢いで話し始めた。多少くだけた言い方をするのは親子だからか。

100

一息ついたのだろう、従者さんがお茶を持ってきた。結構ないい男だ。ちょっとじろじろ見てしまつたかと反省していると王妃から声

がかかった。

「ダイスケさんと言いましたわね、わたくしは王妃のツバキと申します。此度はユリカとティタニアを身を挺して助けていただいたそつで。感謝の言葉もありません。」

ユリカ姫もソファの隣に浮かんでこるティタニアさんも頭を下げる。

「いえ、とんでもありません。事実自分が何かをしたというわけではありませんし。」

「それに今後を考えるともう少し深い話をしなくてはなりませんね。あ、オベロンお茶ありがとう。」

「オベロン…さん？ですか？またすごい名前が…。妖精王じやなかつたつけ？従者さんではなくて友魔だったわけか。」

「オベロンからの伝えで、王と皇太子、さらに彼らの友魔からの了承が出ましたのでお話します。この間には防音魔法がかかっているので安心してください。」

「あ、入る時に感じた空氣の膜のようなものですか？」

「そうです。それが感じ取れるようならなお好都合です。ダイスケさん、あなたには姫専属魔導師としてついてもらいます。」

「専属魔導師ですか。どんなことをするんでしょうか？」

「それを含めこれからお話します。個人的には姫の伴侶としての立

場もあつたんですが、友魔が現在いないこと、それから王や皇太子、彼らの友魔が泣きそうになつたらしくて。妥協してこの地位となりました。そして魔導師とは魔術師の上の職にあたり、より複雑な古代文字を使い人々を守る存在となります。」

古代文字？知らないけど大丈夫なんだろうか、化けの皮はげたりしないといいけど。そんな考えが顔に出ていたのか友魔が感じ取ったのか王妃が続ける。

「あなたがティタニアやオベロンに感じている感情、それをわたくしはオベロンから感じることができますが、あなたにはかれらについての知識があるように見受けられます。」

ゲームからですとはいえない雰囲気でちよつと困る。

それからと王妃が続けつつ傍らから紙と筆を出す。紙に火、風、水と拙い漢字を書き出した。違和感があるのは左手で文字を書き、書き順もばらばら、拳句に漢字の中の横線は右から左へ書いていたためだろ？。

「こちらから、火、風、水と書いてあります。これが古代文字です。召喚の間であなたが言つた二ホンゴという言葉、あの場を監視していたオベロンがどこかで聞いたことがあるということだったので、急ぎ古文書を調べたのです。自分たちの話している言葉の呼び方などこの言葉しか使っていない以上ありませんし。そして見つけたのがこれです。」

古ぼけた本だ。表紙にかろうじて読めるひらがなが書いてある。

「えでわかるにほん！」

ああ、「絵でわかる日本語」か。

外国人旅行者向けか幼児向けの絵とひらがなのみで書いてある辞書風のものだ。しかし古い。

「これは原本です。中身は理解できるものだけを抜き出して現在の教育に使っております。」

壊れないように丁寧に中を見てみる。確かに日本語覚えたての人向けかも。本の最後の方、出版の日付を探しながら問う。

「子供向けの本ですか。あ、この最後の日付はいつじろかわかりますか？」

「教育が子供のみとは限りません。普段生活する分なら古代文字は必要ありませんもの。そしてその日付は今から約5000年前の物と考えられております。」

「5000年前…。」

それ以上言葉が出ない。

異世界だとずっとと思っていた。日付が西暦2030年だったのも驚きだが、5000年も前とは。2030年とはもし自分がいたら50代になる。今の自分の感覚で未来の印刷物を5000年前のものとして見ると、いう猛烈な違和感を感じた。5000年の間に何があったのだろう。人は減り、魔力と自然と魔族と魔物あふれるこの地球に何が原因でなったのだろう…。

恐ろしくもあり、面白そうでもある。幸い古代文字と呼ばれる漢字もわかることだし、また調べることができるかもしれない。

ここにいる自分が災害等に見舞われたわけではないので結構簡単に、歴史を読む感じで落ち着いてしまった。

「5000年といいますと、田が昇り、また朝に田が昇るまでを一日としてそれを365回繰り返したもので1年、さらにそれを5000回、でよろしいですか？」

「ええ、そのとおりです。研究の結果4年ほどに一度は366日と計算するようですが。」

「ひるひ年もひやんあるのか。

「今この国の中で使う文書はどういったものなんですか？」

聞いて見ると王妃は紙にひらがなを書き出した。やはり書き順や線を引く向きが逆だったりと見ていておかしい。が、本人もいたつてまじめなんだし黙つておこうと考えた。

「わたくしたちは「う」た文字で育つてきました。古文書の中にはもつと複雑な古代文字もあるのですが読み解かれたものは先ほどの文字の他、まだごく少数なのが実情です。そして今、ダイスケさんとお話ししている、王家の研究者なみの話が出てきます。専属、監視、職などの言葉はまだ一般的の者は理解できない言葉なのです。」

「ああ、中途半端で大人のようでもあり子供のようでもある言葉使いはそのせいか。

「古代文字については理解しました。自分に何かできるかわかりませんが何かの手助けができたら幸いです。」

理解したも何も、普段使っていたのだ。パソコン等の影響で、漢字がすぐに出でこないかもしないが、古文書といわれるものの中に

辞書でもあればどうとでもなるだろ？。辞書がない場合は多少困る。漢字は読めてもかけないことが多いあるからだ。だからあまり期待させないようにしておこつ。王族でもひらがなレベルが普通らしいから王妃もそんなに期待していない感じもするし。

そしてふとこの国の歴史について聞いて見た。どうもこの5000年の間になにか起き、大人がいなくなつた。そのときに魔族と呼ばれる者たちが魔力とともに現れて意思疎通ができた子供たちを守つた。当然話はできても漢字は書けないだろうし、多少のかしこまつた言葉遣いは魔族と呼ばれる者たちとの生活の中で徐々に浸透したものらしい。

そしてその後、魔力放出と詠唱、武器による人々の集まつたウイルス国と、魔族と意思疎通ができる、魔力と抜群の相性で魔法の礎となつた古代文字にて魔法が使える人々が集まつたミカド国を作り上げたという。

それからは案外お互いうまくやつていたようだが、あるときできた赤い月によって狂う人間や魔族がはじめ、魔物と化したという。国同士の戦争はないが、本能のみの野獸と化した魔物は現在も結構危険なものであるようだ。

姫や姫の従者、侍女さん方は守りの魔法特化であり友魔もやはり守りに長けたものが多いらしいので専属魔導師にちょうどいいようだ。

それからオベロンさんや、ティターニアさんが言うには自分の魔力はそういう守護や火や水、風といった色というか特化の特性はなく、どうも原始魔力に近い、傍について気持ちのいいものらしい。自分が持つて生まれただけの能力ではあるがほめられるとうれしい。

そういう魔力特性もあり友魔からの友好的感情を姫も王妃も感じたようでミカド国の歴史講義も和氣藹々とした雰囲気で進んだ。それからついでに知ったんだが、王族以外に苗字は持たず、苗字を指すものは役職か住んでいる地区らしい。

美人に囲まれて楽しい時間を過ごしている。従者侍女など専属系のお仕事の人は王族であろうとほとんど家族同然に扱われるらしく、お互いだいぶくだけた話し方になってきていた。従者が主の地位をかさに立てる犯罪もあるにはあるらしいのだが、そういう人を見抜く眼を持つことも主としての格なのだという。それはなかなか地位のある人にとつても難しいことなのだそうだ。

だが、格どうこうよりも、美人2人と美形の妖精にかわいらしく「よろしくね。」

などと言われようものなら「こちらこそ」と、問答無用で口に出しても不思議ではない。いや、美人のお伺いには逆らえないだろう、実のことな。

ついでに先ほど自分の部屋になるだろう所へ案内してもらつた。先ほどの浴衣のようなものは現代で言う所のバスローブのようなものらしい。出してもらつた服はありきたりなシャツとズボンだった。

と、扉の向こうからバタバタと走る音がしてきた。どうもこの防音魔法、中から外に防音し、外の音は聞こえるという優れものらしい。これは魔法が使えるようになりたいかも。

バタン！

扉が開くとダンディーな紳士とイケ面な青年が息を切らせて入ってきた。2人はオベロンとティタニアの差し出したお茶を勢いよく飲み干し一息ついた。二人は異口同音に

「「大丈夫だつたか！？」心配したぞ！」」

ユリカさんは微笑んでうなずく。

「「そうか、よかつた。」」

一人暮らしの長かった自分には益と正月しかなかなか泊めなかつた家族団らんだ。王族とはいえ、厳しいだけではないのだと思わされる。いや、王族で人々を守らねばならないからこそより家族を大事にするのかもしれない。

そんなことを考えつつふと何かを感じて扉に目をやる。何かでかいものがいる。しかも2頭！

それらはのそりと部屋に入ってきた。ぶつぶつ言いながら。

「主、王族たるもの常に威儀を持たねばならぬよ。」

「そもそも廊下を走るなどもっての他。姫の無事は先に伝えてあつたのだから。」

最初に声を発したのは所々から銀色の炎が揺らめいている大きな虎。次は蒼いたてがみをもつライオンにも似た狼。

「もしかしして白虎とケルベロス…？」

2頭が一いつ丸を向く。不思議なことに恐怖はなくとも神聖な感じだった。

「いかにも、我は白虎。隣はケルベロス。我は王、ケルベロスは皇子の友魔として共に歩むものである。」

「樹 大介です。」

ティターニアやオベロンの妖精族の人当たりのよさそうな感じと違ひ、2頭とも威厳がある。どちらがいいとか悪いというわけではない。性格もあるだろう。

「そうか、姫や王妃と誼をむすんだからには我らも友となろう。今後ともよろしく。」

途中からいきなりくだけた言い方になつたのはケルベロス。実際に見ると感慨深いセリフと共に口の端を上げる。白虎も隣でうなずいている。

受け入れられたつてことでよいのかな。ありがたいことではある。きっかけはティターニアやオベロン、原始魔力に似た自分の魔力のおかげもあるだらうけど、こんな関係を壊さないよう仲良くしてくれたらと思う。

セツヒンシヒーいるうちこ、ツバキ王妃に促された王と皇太子がこちらに向かい声をかける。

「コリカを助けていただいたと聞いた。感謝する。余がミカド国王、サンカイである。」

「同じく皇太子シンと申します。姉の」と、ありがとハビヤゼいました。」

字面ではわかり難いが、満面の笑みをたたえていて、とてもフレンドリーだ。よほど家族を大切にしているんだろう。姫の婚話がなくなったことで安堵しているものもあるだろうけど。

「いえ、たいしたことは。」

「そんなことはないぞ、ダイスケよ。ミカド国の人間は友であり、全ての幼子は我が子である。魔物や作物不足、病気などで亡くす命もある中で、自分と血のつながった家族以外を助けてやるためにそれだけの力がいるのだ。」

「そうですか…。体ひとつでこちらに落ちてきたのですが、こちらこそコリカ様とツバキ様、それに友魔方にも少なからずよくして頂いて本当にありがとうございます。」

王は笑みを深めつつ家族を見渡した後、口を開く。

「そりが、コリカもおてんばだと思っていたがなかなか…。視界の端に頬を膨らませたコリカさんが見えた。

「まあ、余もシンも家族と思い気楽にして欲しい。余は仕事のせい

かこのよつな物言いしかできぬのが心苦しいが。公の場以外では様をつけのもできればなくして欲しいものだ。家族で様付けはないだろう。「

「ありがとうございます。サンカイさん。シンさんもよろしくお願ひします。」

「ハリハリハリダイスケさん!」

「じゃあそれそろお皿にしましょ。」

と、ツバキさんが言つ。みんなぞろぞろと扉から出て廊下を歩いていく。食堂に向かうようだ。道中とりとめのない話をしていく。ふと魔法の話も出て、午後にはシン君が見てくれるそうだ。何か自分が身立てることができるきっかけでもつかめたらいいなど考える。

通された食堂は20人ほどが入れるであろう、少し城には似合わないと感じるこじんまりとした所だった。聞けば城に住み込む人々、王族を含めた人たち専用とのことで納得する。国王一家が入ってきたことで中にいた人々も姿勢を正す。いくら家族同然とはいえ、きちんとけじめはついているようだ。

王が所定の座に着く。話はすでに通つているらしく自分の席もあつた。こつそり見渡して見れば召喚の折に近くにいたコリカさんの従者の方々も見受けられる。

「さて、食事の前に一言ある。知らなかつたものもいるだろうが、

「つそりとユリカが召喚を行つた。」

一斉に食堂がどよめく。中には早とちりしてこちらを殺氣のこもつた田でにらんでくる男もいる。召喚と言えば婚姻であるためだ。まあ、愛情の裏返しなのだろう。

「だが、どこで知られたのか妨害にあい、ティターニアを失いかねない所だった。」

とたんに皆の顔色が悪くなる。

「だが、ここにいるダイスケが妨害により飛ばされたティターニアを見つけ守り助け、なんとかティターニアは無事だった。」

皆が安堵のため息をもらす。

「そこでダイスケには今しばらくここにとどまつてもらい、ユリカ専属魔導師としてつとめてもらうことになった。」

何人かがピクリと反応する。察するに王城の魔導師だろう。他の人と違い友魔がいないように見える。先ほど聞いた話では生まれついて友魔がない人もおり、そういう人は総じて魔力が高い傾向にあるらしい。魔力が高いということは色々な方法で魔法を試すのに都合がいいようだ。魔法耐性も高く失敗、暴発しても怪我をしにくいんだとか。

「召喚の妨害を行つた人間は禁忌に触れるため、なんとしても連れなくてはならん。何か心当たりのある者は知らせてほしい。」

全員が決意をこめた視線を王に送る。家族同然というのはあながち間違えではないらしい。

「では食事にしよう。いただきます！」

「」「」「「いただきます！」「」「」

なんというか子供発祥文化ということをどこかで否定していた思ひがきれいに霧散した感じだつた。この国の人々は無垢なる故に魔族とも心を通わし、無垢なる故に他人でも家族たることができるんだろう。家族ですらいさかいを起こすさんだ人もいた自分の元の世界に少し悲しさを感じると共に、このきれいな世界を守るために、あるかどうかも分からぬちっぽけな自分の力をどう使っていったらしいのか、しつかり考えていかなくてはいけないと思つた。

### 第3話 お昼と午後 必要最低限

昼食は大家族の団欒を見て「ううだつた。シン君は多少好き嫌いがあるらしく、周りから、

「シン坊や、これもちゃんと食べないと。」

といわれ、人参やピーマンなどをお皿に盛られている。

ヨリカさんは20代になってダイエットでもしているのかさつきからサラダしかつづいていない。結局、

「お嬢、野菜ばかりじゃ胸は大きくならないよー！」  
などといわれ牛乳のようなものを「ククク」と飲んでいる。

自分も配膳物に少しづつ手をつけてみる。

「ご飯、米だ。玄米っぽい。味噌汁、味噌が廃れてなくてよかつた。  
子供文化でどうやって再現したんだろう。それに醤油も。何か外国人向けに作る方法が書いた資料でもあったのだろうか。

ツバキさんに聞いて見るとどうもそちらしい。調味料は他にも塩、砂糖など、基本的なものはあるみたいだ。唯一牛乳に見えたものは豆乳だったっぽい。これで食事にはそんなに困らないですむと内心安堵する。酒は気になるが、味噌や醤油があるならそれなりに期待できるのではないかとも思う。そして心身ともに元気に生きていくうえでおいしい食事というのを重要だ。

もしかしたら一般人の食事はもつと味気ないのかもしだれないが。ユリカさんに聞いて見るとそうでもないらしい。砂糖をふんだんに使

つたお菓子など、城から出た折の楽しみにもしているそうだ。そして食事に不満がなくなつてくるとひとつ気になることが見えてきた。

箸の使い方になつていないので。

これは気になる。自分が日本食の完璧な作法を知っているかと問わればそれは知らないとしかいえないだろう。だが彼らはあまりにお粗末過ぎた。握り箸はおろか左右で一本ずつ箸をもち食事をしていたりするのだ。こ

れはだめだ。王や王妃はかろうじて箸としての体裁を保つているが、ユリカさんやシン君などは幼稚園児の食事風景とかわらない。もしかしたら口うるさいと思われるかもしれない。しかしきれいに装飾の施された箸がいかにもかわいそうだろう。

意を決して王に言つてみる。

「王…、ちょっと…ですか？」

「なんだ？かしこまつて。」

「王妃様方もです。言いにくいことですが、箸の使い方になつておりません！」

「そうか？気にしたことにはなかつたが。」

「そうです！せっかく美しく作られた箸もそういう使い方ではないでしょ！」正しい持ち方はこうです！」

左手を掲げる。そう、自分は左利きなのだ。興奮しているのかだんだんと口調がかしこまらなくなつてゆく。

「俺は左利きなので左手ですが、鉛筆を持つよつこい一本を持った後、人差し指の付け根にもう一本を置き薬指でささえ、親指と人差し指と中指で持つた1本を動かし食べ物をつかむんです！」

内心ではピカ一ツと左手にスポットライトが当たつているイメージだ。だが王が茶々を入れる

「Hンピツとは何だ？」

そうか、鉛筆は存在しないのか。ちょっとがつかりしつつ、前にツバキさんが古代語を書いて見せてくれたことを思い出す。

「筆のことですかいません。」

そうか、とか、ふむ、と言つたことばがあちこちから聞こえ、皆手元で箸と格闘している。

さすが純粋な人たちだ、瞬く間にそれなりになつてゆく。ヨリカさんやシン君などは若いためかすでに違和感のない使い方をしている。オベロンやティヤーニアをはじめとする人型の友魔も練習しているようでどこかほほえましい。というか友魔の食事はどうなつているんだろう。

すでにきれいな持ち方になつていてるシン君に聞いてみたところ、主との魔力のつながりさえあれば別に食事は必要ないらしい。魔力が世界を作っているここでは友魔でないものは食事が必要になるが、木の実などで十分まかなえるらしい。ただ魔物は欲望のため他者を

虐げ、その時の苦痛や恐怖などの感情を喰らい生きていくとの事。魔物とは魔族にとつても相容れない存在のようだ。

ひと悶着あつた、といふか起こしたが、楽しい時間だつた。

昼食を終え、サンカイさんを除く3人が運動場のような場所に集まつた。サンカイさんはまだ政務から離れられないらしい。ここに来て初めての屋外だ。城の向こうに見える、頂上すら全く目視できないほど高い山が目に付く。フジサンといふそうだ。

いやいや、富士山はあんなに高くないから。それに自分の記憶の中にある富士山と違い、裾野がほとんどない。山というより塔のようだ。また調べたいことが増えたと感じつつ、ついて来たツバキさんとコリカさんを見る。

ツバキさんもユリカさんも守りや回復系魔法を使う人たちだ。一般的魔術に近い攻撃や、状態変化系の魔法とは難度が格段に違うらしく、後回しとした。もし通常の魔法すら使えなかつたら、上位のものを勉強しても使えないということになるし。しかしながらここにいるかと問われれば、シン君がどれだけ上達したか見学のためらしい。

シン君の額に一筋の汗が流れる。

「では、ダイスケ兄ちゃんは魔力があることは分かっているので実際の使い方から説明するよ。」

昼食時に結構話ができたせいで呼び方がダイスケ兄ちゃんにかわっていた。箸のレクチャーをしたのもよかつたのかもしれない。姉であるコリカさんになにかを教わる時では少しでもできないとすぐにゲンコツが飛んでくる、とユリカさんに聞こえないようにぼやいていた。ティターニアとケルベロスは苦笑していたが。

「えっと、指先から魔力をだして丸を描き、その中に古代文字を書く、そしてその丸を魔法を打ちたい方向に向かって突く。おわー」 終わり。といいたかったのだろうその瞬間、ツバキさんとコリカさんから壮絶な視線が届きシン君を黙らせる。確かにわかるんだけどちょっと端折りすぎている気がする。

「シン、あなたねえ…。」

「もう一度老師のところにいれないとダメかしら。」

ユリカさんとツバキさんもガツカリ感全開で感想を言う。特にツバキさんの老師うんぬんのセリフはシン君も堪えたようだ。母親と姉妹の口喧嘩が始まりそうな勢いだ。

「まあまあ、ではシン君、ちょっとやってみてもうつていいかな?」 建設的でない3人のやり取りに割り込みつつ言つてゐる。

「…わかった!じゃあやつてみるね!」

2対1の絶望的な勝負に臨まねばならない状況がなくなつたきつかけに飛びつき、元気に答へ、左手人差し指から魔力を放出する。見えないかもと思つたが、現在落ちてきた後魔力体となつてゐるせい

か魔力の動きが見える。

シン君は魔力で15センチくらいの丸を描く。丸を描いた後、いつたん魔力放出を止め、丸の中心附近に火の文字を描く。：なんというかやはり書き順や文字の形が適當すぎる。左手だからだろうか。ちょっと氣になる。

その後ちらりとこちらを見、確認をしたのだろう後に丸を拳で貫いた。

ボツ

1メートルくらいの火が出た。

「へえ、シンにしてはなかなかやるじゃない。」

ユリカさんから賞賛の声が上がる。普段のシン君は成功率が半々程度らしい。シン君はうれしそうにしていたが、傍らでケルベロスが10メートルに届きそうな炎を出すのを見せ付けられてしゅんとしていた。確かに戦いでは1メートルの火ではどうにもならないだろう。

俺はいくつか手順などの確認をしたかったので訊ねてみる。

「丸を描いた後と古代文字を書くまでの間は魔力は止めないといけないの？」

シン君はうなずく。つなげてしまつと古代文字の認識がうまくいかないらしい。一筆書きがあまり文字に見えないと同じだろうか。

「丸や文字を書くときの魔力量を変えると何か変わる？」

威力が変わるかと聞いたら首を傾げられたので言い方をやさしくしてみた。変わらないらしい。いかに早く書くかが戦いで求められるようだ。

「では丸の大きさは？」

これが結構な問題で、自分自身に内包する魔力量より小さい分にはかまわないらしいが、限界近いと気を失うほど疲れ、それを越えると発動しないらしい。連発するなら小さめ、一気に決めるなら大きめ。ただ大きい分には多少描く時間もかかる。そしてそれに付随するもうひとつ注意点として、円を打ち抜く格好を保つている間は放出し続けるということ。自分の魔力量もそれなりに体で覚えていかないと、結局気絶なんてこともあるようだ。

「じゃあ俺は魔力を出したり止めたりすることができるか試してみるね。」

シン君にとつてはある意味最初の自分の生徒だろう、田をきらきらせながら見守ってくれている。ツバキさんやユリカさんは興味深げだ。ユリカさんに仕事は?と聞いたら政治はお父様に任せてくれればいいのよとあっけらかんに言つてくれた。友魔もいるんだし、よほどのことがない限り女性は口出ししない方向らしい。その分シン君は皇太子として将来のための勉強に結構忙しいらしいが。

さて、魔力のオンオフを練習してみる。オンオフ自体は難しいことではなかつたが、魔方陣、単に丸に漢字を書いたものをそう呼ぶのであればだが、それを描くための理想的な魔力量を把握するのは少

し時間がかかった。

「多過ぎですか！」

「今度は少な過ぎますわよ。」

などと特に魔法の系統と発現方法が違うであろう女性陣からのお声が多い。どうしたものか。

さてそれでも何とか及第点をもらい、実際に試してみる。

やはり15センチくらいの円にしてみると、後で半分や倍のものも試してみないといけないだろう。

そして右手で円を描く。中には書き順も形も正しく火と書いてみて、さて発動と思いながら3人を見るとなぜか怪訝な表情だ。まあ後で聞けばいいかと思い拳で円を打ち抜く。

ボウツッ！

3メートルくらいの火が出た。初めてにしてはなかなかじゃないかと思いつながら3人を見るとなぜか固まっている。

「あれ？」

思わず首をかしげ聞いてしまう。

「ダイスケさんっ！なにをしたんですか！？」

ツバキさんのすごい表情に内心後ずさりしつつも質問に答える。

「特に何も…。」

「そんなはずはありません！火の文字での大きな丸の魔法で  
あんな火が出るはずがありません！」

「どうやらすじごとらしい。ならば少し気になつたことと、シン君  
のやり方と違ひが出たことを説明してみる。

「ええと、左手で文字を書くことは悪くはないのですが、もともと  
日本語、いえ古代語は右手で書くことを基本としています。文章も  
右からが多いですね？」

ツバキさんは何かを考えながら答える。

「解読できた古文書は右から左へと書いたものがほとんどです。わ  
たくしも手紙などはそう書きます。ただ墨の乾くのが遅いので左手  
で文字を書くのです。書きながらこすりつてしまつるのは困つてしまつ  
ので。」

なるほど、ひらがなしか読めないなら横書きのものはとつつきにく  
いだろう。自然とひらがなの多い詩などの右から縦書きのものが多  
く解読できたのかもしれない。鉛筆も知らなかつたことだし、墨が  
手につかないように文字を書くなら左手の方が楽なのかもしれない。  
すると自然と漢字やひらがなの横棒の書き方は力の入れ具合から考  
えても右から左へとなるだろう。ならば左手であろうが魔力なら手  
は汚れないし、ちゃんとした書き順を教えた上でシン君に試しても  
らおう。ちょっとシン君と相談する。

「ねえシン君、火の文字だけど、いつも風にかいてもう一度やつ  
てみてもらえる？」

「すごく書きにくいけど何か違うのかな？形も何か違うし。」

「それも含めて試してみたいんだ。同じなら同じでいいし。」

「ん、わかった。やってみる。」

頭の上にいくつか疑問符を浮かべながらであったが先ほどと同じようになに魔方陣を描くシン君。多少形は崩れているようだが先ほどよりはよほどきれいだし書き順もあつていい。

「えいっ。」

「ボウッ！」

先ほどの俺よりも多少小さいが、それでも2メートルを越える火が円から伸びている。

「わあっ！」

「おおー！」

シン君が興奮した表情で俺を見、俺は微笑みで答える。母娘は固まっている。友魔はシン君の急成長に目を瞠っている。特にケルベロスは自分のことのようにこゝれしそうに見えている。

「わかつてきたよ、シン君。少し魔法の質が見えてきたみたいだ。じゃあ少し試したいことができたからちょっと離れていてね。」

シン君、先ほどの些細な情報での自らの魔法の急激な成長を一番感じ取ったのか大して離れていない所で興味深々だ。なんとか立ち直った母娘もじつと見つめている。友魔は言わずもがな。

「よし、では火の系統で3つほど試すよ。」

円を描く。大きさは先ほどと変わらず。炎と書いてみる。そして打ち抜く。

「ゴウー！」

さつき見たケルベロスの炎並みだ。10メートル位の炎が出た。

「じゃあ、次。」

すでにユリカさんも興味深々だ。ツバキさんは今後や政治に絡めて考えているのだろう、少し難しい顔をして眺めている。

円を描ぐ。今回は火炎だ。打ち抜く。

ゴー―――！

長い！いや炎の長さでなく放射時間が。てっきり火が大きくなるかと思ったが時間とは。打ち抜いている時間以外に魔法発動時間が変わるとのことはちょっと面白いかもしれない。

「では最後。」  
すでに3人とも興味深々だ。年長者になるほど興味を抱かせるためにより大きな事実が必要なのが見ていて面白い。  
円を描ぐ。焰と書いてみる。打ち抜く。

ドンッ！

火の玉がえらい勢いで飛んでいった。向こうの石壁で止まり数秒燃え続けた後消えた。これは確認しておくべきことがひとつ増えた。そう、連射が効くのかどうかだ。

「『めん、もう一回。』

円を描く、焰と書く、円を打ち抜いたままにしてみる。

「 デンツ !

同じように火の玉が飛んでいき石壁を焦がして消える。あれ、てつ  
きり連射だと思つたのにと思つた直後に、

「 デンツ !

2発目が飛んでいった。3発目まで見て、じつやら燃え切るまで  
はきちんと魔力を消費していく、それが無くなないと次弾が出な  
い仕組みのようだ。水や氷相手なら炎が消えるまでの時間は短いだ  
けでし、有効的かもしぬないと感じつつ3人を振り返る。

「 「すゞ」…。」

ツバキさんとユリカさんの反応だ。シン君と言えば、

「ダイスケ兄ちゃん！僕にも教えてよー！」

まあ気持ちはわかるけど。ただ、抑える所はきちんと抑えておく必  
要がある。

「シン君、ツバキさんやユリカさんも。これは確かに強力です。俺  
に言わせればほんの些細な知識が簡単に今まで以上に強いものに変  
化してしまう。最低でも一般の方たちがこの力を守る技を身につけ  
るまではこの力を広めるわけにはいきません。

ただの火なら多少強くなつてもやけど程度で済むかも知れませんが、  
それ以外は命にかかわってしまいます。ですのでただの俺の興味か  
らこんなことをしてしまいましたが、しばらくは内緒でお願いしま

す。」

シン君ですら「いくら若いといつても王族だ。」これが防御策もないまま広まつた場合の最悪の状態は想像がついたようだ。人が人を殺めてしまふことがより多くなつてしまふだらう。3人とも少し硬い表情でうなずいた。

「まあ、いい方向に考えましょうよ。これだけ攻撃魔法が強くなるなら、守りや回復の魔法もよりよくなるかもしません。そうすれば魔物相手で亡くなる人も怪我をする人も減るでしょうし、そう悪いわけではないと。」

「そうね。力を借りるわよ、ダイスケ君。」

「よろしくお願ひします、ダイスケさん。早速明日からは私の回復魔法を勉強しましょう！」

「姉ちゃん、僕も！」

「シンは他にも勉強があるでしょ！」

「姉ちゃん、さつきは」「んな顔してびっくりしてたくせに……。」  
ぼそつ

「何ですって？」ぽかりっ

「イテツ。よくもやつたなあ！」

「こらつ！あなたたちつ！」

「はあ～い、『めんなさい。』」

きやいきやいとはしゃぐ姉弟を見て和みつつ、自分がこの世界でできそうなことがあることを実感しながらゆっくりと日が暮れていった。

## 第4話　酒と団欒

辺りも薄暗くなり、城の通路を仕事で行きかう人々もランプのようなものを手に持ち移動している。基本この国の人々は暗くなれば眠る生活のようだ。

もちろん夜勤の門番や城下町の一角の夜の町や酒場のようになにか仕事時という人もいるという。またこの地に慣れてきた食事どころや酒場めぐりもしてみたいなあ。

そしてお昼時と同じ食堂に着いた。これから夜勤であろうか装備を整えた兵士と彼らの友魔が、朝ごはんと言うのも語弊があるが食事中だった。王もすでに軽い食事を始めており、そんな兵士たちに激励の言葉をかけている。

「あ、サンカイさん。お疲れ様です。」

「うむ。魔法はどうだったのだ？白虎からは怪我等もなくそれなりにつまくいったとしか聞いておらんのだ。」

「一般的の町の皆や魔族の方たちに安全が確保できるようになれば本格的に力を入れるつもりです。」

「そうか、見てみたかった気もするのう。普段はこんなに忙しくないんだが、コリカの件が解決しないことにはなんともない。」

ユリカさんの顔が一瞬翳るが、ツバキさんとシン君の気遣わしげな視線と言葉を受けて多少落ち着いたようだ。

「そうですか。頑張つてくださいとしか言えない」という歯がゆさを感じますが頑張つてください。ユリカさんもティターニアも無事だったんですけど俺も魔法なんてすごいものが使えるようなりました。

この世界もなかなかいいところだと思っていますから気にしないでください。」

ユリカさんも明らかにホッとしていた。どうも俺の心配をしてくれたようだ。ありがたいことです。

「さて、立つたままのもなんだし、お夕飯にしましょ。」

ツバキさんが明るい声で促してくれた。席に着く。夕飯は昼食とは違い、全員一緒に訳ではないようだ。バイキング形式で夕飯くらいは好きなものを好きなだけということみたいだ。今日も一日生きて過ごせたことを喜び、明日も頑張ろうということらしい。

ふと食事を取りにいく傍ら、ガタイのいい二イちゃんの集まりのようなどころに目がいく。魔力を魔法の練習により感じ取れるようになったので魔力が高いのが見て取れる、席について軽くつまみながらユリカさんに聞くと、

「彼らは魔導師です。友魔をつれていないでしょう。」

「なんで体格いいんだろう?」

「友魔に助けてもらうことができませんからね。その分魔力が高いのは当然として、友魔のいない人は幼少より運動能力も高いのです。」

「差別とかいじめはないの?」

「友魔がそんなことは許しませんから。魔族にとつても友魔なしでこの世界を生きていける魔導師に興味を持つらしいのです。」

「古文書とは別、私たちの祖先の記録によりますと、召喚が始まるより前、人型の魔族と子を成せる人がいたそうです。そうして魔族の血も人の血もだんだんと混ざり合つていったそうです。私の緑の髪も風の系統の魔族属性を帯びているためだと考えられています。」

「へえ、じゃあ、ツバキさんとユリカさんは風の緑髪ってわけなん

だ。サンカイさんとシン君の紫髪はどんな系統なんだろ？」

「紫の髪はなぜか王家にしか出ない色らしく、歴代の王は紫の髪だったと聞いてます。」

ああ、日本の神聖色が紫だったこともあるからその影響もあるかも。続けて聞いてみる。

「風系だからツバキさんもユリカさんも友魔が妖精族なの？」

「自分の魔族系統と友魔の種族はあまり関係ないようです。事実侍女の友魔に妖精族でない方もいますし。わたしの友魔がティタニアであるのは母様の友魔がオベロンであることが関係しているみたいですね。それに友魔も人と子を成せる種族の方がより相性が良いのか人型が多いです。父様とシンの白虎とケルベロスはかなり珍しいみたいですね。」

「そうなんだ。ところで魔導師さんは皆赤い髪だね。」

「はい、赤い髪は人の中でもより魔族に近いと出るようです。親から子というわけでもないようです。ただ魔族にしてみれば、昔の魔族と人の子と重なるようで、とても友好的なようですね。」

「それで魔力や運動能力が高いのか。そういえば人や魔族って寿命は？」

「人の外見は20歳ほどまで成長し、後は何事もなければ200年ほどで寿命がきます。」

「すごいな。魔族の血かな。自分のところでは60過ぎたらもう老人の域に入つていたよ。魔族は？」

「外見は生まれたときから変わらず、魔力や力に応じ、数十年から数百年生きた後土に帰るそうです。その後眠りにて魔力を溜め、また変わらぬ姿で現れるとティタニアやオベロンに聞きました。」

「もし召喚でティタニアが消えてしまっていたらどうなつていたんだろう。……あ、ごめん。」

ユリカさんの表情から聞いてはいけなかつたかと思つたが、つい口から出てしまつた。言つた直後に後悔した。これは独り言の癖も直

していかないといけない。

「大丈夫です。ティター二ニアも無事でしたから。」  
ティター二ニアもうなずいて答える。

「ダイスケのおかげ。今生きているんだから気にしちゃダメよ。でももしあそこで消えてしまっていたら、ユリカの生きている間に戻つてくことができたかは微妙ね。そしてダイスケの世界で消えてしまったとしたら、こちらで復活することはかなわなかつたでしょうね。」

「うわ、結構ぎりぎりだったんですね。お互い今元気でよかつたですねえ。」

「そうね、ダイスケの魔力のおかげで助かったわ。それからさつきがついたんだけど、ダイスケから香る魔力の質は私たちの父たる存在の魔力に似ているわ。」

オベロンや白虎、ケルベロスといった王族の友魔のほか、侍女たちの友魔もピクリと反応する。

「ほんの近くにいないとわからないかすかなものだけど。父様の匂いがする。」

少し離れているが自分の腕の匂いをかいでみる。風呂から落ちてきてまだ一日たつていない。臭くはないはずだけど…。

と、気がつくとまわりにわらわらと友魔が集まつてきていた。侍女さんたちの友魔は白虎、ケルベロスから少し離れているが怖いのだろうか。まあナジャやネコマタ、リリムといった中級では仕方ないのかもしれない。でも俺が中級とか言つてはいけないか。みんな家族なんだし。

… じつは常識に合わせて反省することが多いな。

そんなことを考へてみると白虎やケルベロスが俺の両太ももにあごを乗せて口を開じてゐる。オベロンも俺の肩に手を乗せてゐる。リリムは翼で浮きながら俺の頭を抱いてゐるし、腰の辺りに両側からくつついてゐるのはナジャとネコマタか。ちょいメタボを気にしてるので腹回りに手を回されると少し恥ずかしい。ま、子供っぽい外見に合わせ、子供のことだからとあまり気にしない方向でいくことにする。

みんななんとなくほんわかしてゐる。俺には友魔はいないし、まだ友魔の感情を読むことはできないけれど、イメージとして縁側で口向ぼっこをしている感じだ。

「つむ、父の傍らでゆづくと穢やかに暮らしていたことを想い出す。」

「ええ、父がいるようです。」

白虎が言い、オベロンが追従する。

「父とはどなたなんですか？」

誰ともなく聞いてみた。

「とーさまはおつきいんだよー。」

「とても暖かいんです。」

ナジャとリリムだ。

「ひざの上でお昼寝するのは最高にや。」

椅子に座つた状態で太ももの上に大きな2頭の頭があるものだから

ひざに乗れないネ」マタはちょっと残念そうだ。

「ここまで口を開いていなかつたケルベロスがゆつくりと話し出す。  
「我が一番一緒にいて、世界を共に回つたのだ。力の弱い同属や友の魔族を守るため、邪竜や幽鬼、魔王と戦つた。終わりの見えない戦いではあつたが、父のため、友のために戦つのは悪くなかった。」

とたんに白虎とオベロン、ティターニアも口を挟む。

「何を言つておるのだケルベロス、お前なぞいつも父の後ろで震えておつたではないか。」

「それに白虎や私、ティターニアやラクシュミ、聖龍もいたではないですか。」

「ケルベロスがいつも一番怪我してたよね、無茶するから。私やラクシュミも困つてたんだよ？」

ついつい笑いが出る。ケルベロスが抗議的な視線を向けてくるが、笑いの衝動がなかなか收まらない。

ケルベロスは咳払いをしてさらに話す。

「父はみんなの言うとおり、暖かく大きくやさしい太陽のよつな方だつた。とある理由ではつきりと名を言へることはできないが、我らの父だつたのだ。」

「すごい人だつたんだね。今はどこに？」

聞いてみるとオベロンが口を開く。

「私がこの中では一番再構成の眠りにつくのが遅かつたので少しだけ知っています。」

窓の外を指差しさうに続ける。

「窓の外、月が2つ見えるでしょう、半分ほどの小さな方が赤い月です。赤い月で狂つてしまふ同属や友はその過程での月がだんだんと赤くなつて見えてくるそうなのです。魔族は完全に変化する直前か死の間際の思念によつて、人は日記などによつてわかつてきたことです。完全に自我をなくし魔物に墮ちると田も赤く染まります。そして父はその月の影響が無視できなくなり、魔族、人の区別なく友や配下が狂つていくことにも心を痛め、彼ら全ての父として原因と対策を調べるためにどこかにこもつたと聞きました。本当に詳しい話はフジサンに居を構え、父の後、魔族を束ねる聖龍をはじめとするの竜族に聞かないとわからないでしょうが。」

「へえ、竜があ。一度見てみたいなあ。」

いずれ行く機会もあるといいな。まだまだ自分を守る術すらできていなかからだいぶ先のことになるだろうけど。友魔たちとふんわりとした空間を作り、当時の笑い話などでほのぼのしてみる。先ほど自分たちが会話に上がり聞き耳を立てていた魔導師衆も、突然始まつた当事者による歴史談義に耳を傾けていた。古語研究なら歴史にも造詣が深いのだう。

と、そんな友魔との団欒に乱入してきた影が2つ。

「ちょっと…ティタニア、いつもはあたしにお小言ばかりなのになんなの、その幸せそうな顔は！」

「そうだよ、ケルベロス…いつもはおつかないくせにほにゃほにゃしちゃってさ！」

見るとユリカさんとシン君が浮氣現場を見つけた伴侶のよつた形相でにらんでいる。よくよくあたりを見てみれば、友魔の相方さんは苦笑しているか少しくやしそうな顔をしている。自分の友魔を取ら

れた感じがして、嫉妬してるんだろうか。

ユリカさんも地が出ているのかいつも以上に幼い感じがする。2人とも俺の感覚ではそれなりに大人に近く見えるのだが、どうもまだ子供のような感じがする。

苦笑しつつ少し俺と距離を取る友魔たちに安堵と少しのさみしさをない交ぜにした感情が浮かんでくることに不思議な感じを受けつつ、さらに爆発しかけない2人をなだめにかかる。

「ちょ、ちょっとユリカさんもシン君も。もう長いこと会っていい大事な人に似たものを持つている人に会つたらそれは昔を思い出しても仕方ないじゃない、ね。」

「でも～…。」

ユリカさんとシン君がぶーたれる。

「えっと、オベロン、その父さんと別れたのはどのくらい前?」「約2000年、正確には2067年です。その間に私が再構成の睡眠に入ったのは2回。再構成時に夢を見ることがあるのですが、目が覚めたときに父がいなかつたことにとても落胆したことを今でも覚えています。」

オベロンが間髪いれず答える。それを受けたうになだめにかかる。

「ほら、父さんがどこかに言つてしまつて、2000年もさみしい思いをしてるんだから。ちょっとは大目に見てあげてよ。」

2人は、

「うん…。」

あまり納得できないようだ。と、そこにサンカイさんから一言入る。食事は終え、何か小さなコップを持ち、何か飲んでいる。も、もしかして、酒か? 酒に目がない俺は「ピキーン!」とひらめ

きが走つた。サンカイさんの話を半分くらいしか聞いていなかつたのは内緒だ。

「2人とも、もう幼子ではないのだからあまり困らせてはいかんぞ。いくら友魔とはいえ、ただ自分と共にあゆんでもらおうなどと考えてはいかん。余たちに合わせてくれているが、友魔にも友魔の感情も記憶もあるのだ。シンも来年は大人の仲間に入り、ユリカも婚姻できる歳になつたのだ。そろそろ大人の付き合いも覚えるべきかもしれんぞ？」

「「はい。」」

2人は神妙にうなづく。そういえば正確な歳を知らないな。聞いてもいいのだろうか。

「あの、シン君とユリカさんつていいくつ？」

2人はそれぞれ答えた。

「僕は14歳だよ。」

「あたしは17になつたわ。16を過ぎたら召喚の資格が得られるの。」

驚いた。シン君でこそ最近の言動で中学生くらいのイメージが定着してしまつてゐるが俺の感覚で高校生くらいには見えるし、ユリカさんなど20代だとばかり思つていたのだ。

「ええっ？若っ！」

つい口をついてしまつた。なんかユリカさんの方から刺すような視線を感じる。だから独り言を口に出すなとさつき反省したばかりだろ、何やつてんだ、俺。

視線の強さを変えずユリカさんが聞いてくる。

「ダイスケさんはつ、あたしのこと、いくつだと、思つたんですかつ！？」

かなり怒つていて怖い…。言葉の途切れ途切れの合間にテーブルをたたくかの勢いでぶんぶん腕を振つてゐる。そのせいで余計幼く見えてしまうが、女性に歳の話は「法度である」とはどこの世界でも変わらないようだ。

「…すみません、20代だと…。つこでにシン君は17~8に見えました…。」

「あたしまだぴちぴちの10代ですっ！」

ぴちぴちなんて向こうでは死語だと思つたがさすがに口に出すわけにはいかない。つい周りを見渡してしまいツバキさんと田が合つた。笑顔だつたが田が笑つていなかつた。

向こうの世界を思い出す。当時27の女性と付き合つていた折、誕生日間近で「30までまた近くなる…。」などと言つていたが、それに対して「大丈夫、女性は25過ぎたら誕生日がなくなるから歳を取らなくなるんだよ。」と言つて一瞬うれしがられ、その後の「だから誕生日プレゼントもなしね。」と言つたらひっぱたかれたいやな思い出がよぎる…。歳は取りたくないけど誕生日プレゼントは必要とかかなり理不尽だと思つたものだ。

「じゃあダイスケ兄ちゃんは？」

「こちらは背伸びしたい年頃であつづらし氣をよくしたシン君が聞いてくる。

「35になりました…。」

まだヨリカさんの視線がおつかないままなのでぼそりと言つ。

「 「 「 「 「ええ――――つー?」 「 「 「

「え?..え?」

ものすいぐびりくつされた。つこでこまくし立てられる。とくに女性から。

「なぜ、そんなに若い外見なんですか?」

ユリカさんだ。

「ダイスケ君、是非秘訣を教えて頂戴!」

これはツバキさん。

「「ありえないですわ。」

そして侍女さん方。

その勢いに、

「必ず研究しますっ!そして必ずものこしますっ!……セイの魔導師さんと一緒に。」

部屋の一角で半分ニヤついていた魔導師さん方も巻き込む。俺同様女性陣から脅されてちょっと青い顔になつて口クロクうなずいていた。どつちみち古代文字などは彼らと共同研究にするつもりだし、いいよね。苦労はみんなで分け合わなくひや。幸せもね。

そして恨めしそうな視線を向けてくる魔導師たちも巻き込んでちょっと有意義な古代文字談義でもしよう。それならプログラマイゼロで見てくれるだろう。と、その前に、と。

「サンカイさん、それ、酒ですか?」

そうだ、この場所で一番気になつていたものだ。

「そうだ、ダイスケもやるか?」こでは30歳を越えないと酒は飲めないことになつておるのだが、ダイスケは30を越えておるよう

だしいいだろ？そこを見てみる色々あるぞ。余はこの米から作つたものが好きでな。」

「わたくしはブドウ酒が好きですよ。」

ツバキさんもいける口らしい。

「じゃ、お言葉にあまえて。」

酒の棚に行つてみると食堂のお姉さんが色々教えてくれる。日本酒、ワイン、麦焼酎、芋焼酎など結構ある。そのなかで一番目を引いたのが麦酒と言わたものだ。お姉さんのしゅわしゅわといふ表現でピンときた。これはビールだと！

早速それを大き目のコップに注いでもらい席に戻り一口。

「ぬるい…。だが深い…。」

ビールというよりホールなんだろうか。ビールとホールの違いなど知らないので適當だ。だが味わい深くてうまい。サンカイさんが飲み仲間を見つけたからかうれしそうに話しかけてくる。

「ほう、麦酒が好みか。まあ若い男に人気があるな。女性にはその苦さが少し敬遠されるようだが。」

「とてもおいしいです、…ただ、言つていいのか…。」

ここでの所発言での失敗を重ねてしまつたため少し躊躇する。

「かまわん、言つてみる。」

「それなら…。これだけうまい、麦酒ですか、飲んだのは初めてですが、もう少し冷やして風呂上りにぐいっといければもっとうまいかなと。」

とたんにまわりから「『クッ』と喉をなす音が聞こえる。サンカイさんも、

「ほう。確かにうまそうだ。瓶を泉にて冷やして明日あたり試して

みよう。」

乗り気だった。酒をただ飲むだけでなく楽しむ人に悪い人はいない。サンカイさんは残った酒をくいっと飲み干すと、

「これで明日の楽しみもできた。民のための政治とわかつてているが肩がこるのはどうしようもない。政治をないがしろにするわけではないが。明日の麦酒、楽しみにしているぞ。」

と前半はは俺にこつそりと、後半は食堂のお姉さんに向けて声をかけ、白虎と共に出て行つた。

「まだ少し仕事があるのよ。」

ツバキさんが言ひ。飲んで仕事していいのかとも思ったが、城下の有力者と話をするのに酒が出、話の内容によつては酒もまずくなるそののでここで少しでも楽しい酒を。といふことらしい。うん、よくわかる。

さてと…、早速2杯目の麦酒をもらひシン君を連れて魔導師の方たちの席に近づく。俺が近づくとさつきの件での恨めしそうな目を向けてくるが、文句を言われる前にこちらから話題を振つてみる。

「古代文字について少し相談があるだけどいい?」

怪訝な表情をしていた3人だが、年の功か結構な壮年に見える男性が表情を引き締め答えた。

「酒が入つてもかまわぬ程度なのか?」

それに答える。

「多少は聞いているでしょう、俺はかなり遠い所から飛ばされてきました、もう帰られないほど。いえ、そんな顔をしていただかな  
くとも大丈夫ですよ。」

やはり根はいい人たちだ、気遣わしげな表情を浮かべている。そして続ける。

「今日、シン君の火の魔法が、かなり成長しました。な、シン君？」  
「うん、これくらいだったのがこんなになつたんだ！」  
手を広げアピールしている。

「そんなことが…。」

壮年の男性が驚いている。シン君は得意氣だ。

「間違いありませんわ、老師。」

ツバキさんが援護してくれる。この壮年の男性がシン君の魔法の師匠なのか。そりやあシン君も得意氣になるのもわかる。

「ではその秘密を教えていただけと…？」

きつめだがなかなか整った顔立ちをしているが、大きすぎる丸めがねでなんとなく残念な印象を受ける青年が聞いてくる。

「それはありがたいですね。ここ数年は少し行き詰った感じもありましたし…。」

丸顔のおっとりした青年は笑顔で言っていた。

「やつぱり一人で出来る事にも限界がありますし。ただ、人々に対する防御策ができるまではあまり外に触れないようにお願いしたいのです。」

やはり問題点は提示しておかないとね。

壮年の男性は納得したように頷くと、

「もつともですな。わかりました。ですが、その前に我らの紹介を。わしばジンと申すものです。」

「私はエン。」

これは丸めがね君だ。

「僕はフウです。」

「こちらは丸顔おつとり君。」

友魔のいない魔導師、みんな赤髪なので髪の色等で覚えられないが、わかりやすい特徴でよかつた。こちらも自己紹介しておぐ。

「ダイスケです。よろしくお願ひします。」

「じゃあ、早速聞かせてほしい。」

エンさんがせかす、結構せつかちなのかこの人は。

「その前に火の系統以外で使用している古代文字を教えてください。」

火以外は知らないからなあ。

わかったと言いつつジンさんが傍らから紙と筆を出す。やっぱり研究者つてどんな時でも大概筆記用具持つてるんだなと変に感心してしまう。

そして紙に描かれたのは水と風。結局火を含めたこの3文字しかまだ効果を発現できていないらしい。

シン君が何か言いたそうに口を開こうとしているが、ちらりとケルベロスに目をやればケルベロスは頷いてシン君を諭してくれる。先ほど俺が火の魔法を色々試したことを言いたかったのだろう。こういうとき人とながつている友魔はありがたい。口をふさいだり、小声で言わなくてすむ。あまりかんぐられたくないし。

文字もわかったことだし、紙と筆を借りて文字を大きめに書き数字を入れる。数字はアラビア数字だ。大人がいた頃、漢数字よりも先

に子供に教えていたようだ。後の算数のためにアラビア数字の方がやりやすかつたのだろう。

そして文字と共に入れたのは書き順だ。シン君はまだ幼い為に文字の形もいまいちだったが、さすがは魔導師、文字の形はこれと/or>て違和感はなかった。

「これだけです。」

紙を返す。

「その数字は書き順といいます。文字を書く順序です。こんな程度かと思われたもしそれませんが、実際シン君にとても効果が出ました。一度研究して欲しいんです。」

「うむ、わかった。明日から研究してみよう。」

さすがにジンさんだ。些細な変化でもツボにはまればすぐこのことをよくわかっている。

「ええ、お願ひします。ただ、さつきシン君が言いましたように効果が飛躍的に上がるかもしれません。普段の実験の3倍の距離、広さで行ってください。」

「それほどか?」

「すごいわよ、きっと驚くわ!」

今度の援護はユリカさんだ。

「ユリカさんもああ言つてることですし、安全だけは注意してください。」

「わかった。」

ジンさんと共にヒンさんもフウさんも真剣な顔で頷く。

「うむ、今日はよい日であった。姫やティターニア殿も無事であつたし、魔法発展の機会も得ることができた。また近いにつけて話し合いの場を持つてもらえるか?」

ジンさんは立ち上がりながら囁く。俺も立ち上がりながら、

「「ひから」や。明日はコリカさんから回復魔法を教わる」ことになりますので助言をいただけるとありがたいです。」  
軽く会釈する。

ジンさんはそれを受けた、

「ならばサクラもつれてこよう。回復系なら彼女が一番だ。」

視界の端でコリカさんがちょっとといやそうな顔をする。数時間前シン君がツバキさんに老師のところにもう一度入れると言われた時の顔によく似ていたのが可笑しい。

「そうですか、それではまた明日にでも。」

3人に声をかける。ジンさんは背中越しに手を上げ、ヒンさんとフウさんは軽く会釈をして出て行った。た、これならプライマイヤロになつたかな。

ふと見るとシン君は眠そうだ。ツバキさんが「お風呂に入らないと。」とややしく声をかけている。シン君も「ん~…。」と言ごながらのそりと立ち上がる。コリカさんがシン君に、

「ダイスケさんをお風呂に案内してあげて。その後はお部屋にも。」  
さつきのすじい剣幕のお子様モードから少しおでんばお嬢様モードに戻ったようだ。朝のことを考えるに、せらにメックキははげやすいがおしとやかお姫様モードがあるんだろう。シン君にも最初に会つたころのようすに皇太子モードがあるようだし。大人ならまだしも、子供の頃からこれとは王族もなかなか大変なのだろうなと思つ。この新しくできた、妹や弟のような2人も守つていけたならせらに、

いと思った。

ふらふらしているシン君を半ば背中に乗せ、俺を案内してくれるのはほとんどケルベロスがしてくれた。フジサンの籠、温泉も出ると言つことで、ここの人々は風呂には困らないらしい。さすがに個人の風呂を持つ人はおらず、大衆浴場形式だ。

そして風呂につくと、ひらがなでおとこ、おんなと書かれた2つの入り口があった。男の方に入り、服を入れる場所なども教わる。中に入れば結構な広さでゆっくり浸かれそうだ。おけもある。

ただ問題は石鹼に類するものがないのだ。体をお湯で流し、布で汚れを拭い、またお湯で体を流す。これだけだ。

ふ～む、美容第一弾は石鹼からかな。作り方わからんけど。

まあ向こうの世界と違ひ空気はきれいだし、この程度でも困つてないのかもしないな。一緒に入ってきたシン君の護衛さんはシン君に聞こえないよう小声で、向こう世界で言う垢すりみたいなものがたり、きれいな女性が色々気持ちよくしてくれると少し扱いが危険な情報も教えてくれた。ふむふむ、覚えておこう。

風呂をあがり、結局眠ってしまったシン君をケルベロスの背に乗せ、風呂から部屋までの道順を案内してもらつ。ケルベロスとシン君の護衛さんにもお礼を言つてまた明日、と別れる。ちょうど水差しがあつたので水を1杯いただいてからベッドに入る。

「色々ありすぎだったなあ。でも元の世界の俺には悪いけど面白そうだ。俺にもできそうなことがあるようだし。今日も今日とて頑張

りました。明日もがんばろ……う……。  
「  
独り言すら最後まで言えずに眠りについたのだった。

## 第5話　社会の勉強

パタパタパタ……、ノノノン、…ノノシ ノノシ、…ノンノー、ノン…  
ドンドンド「ドロチャカポ」チャカポロ・ジャーナン！

「んー？」

さすがに音が気になり軽く目を開ける。

幼児のお遊戯の音乐会のようだ、寝ぼけているんだろう。きっと。  
いくらなんでもノックの音でジャーンーはないだろう。ちやかぼこ  
ちやかぼこ。

そのうち「ダイスケ——」などと聞こえてくる。

ようやく目が覚めて、頭が冴えてくると、自分がどこにいるか思い  
出した。ちやかぼこ。

「はーーー！」

とりあえず返事をしてベッドから起きる。外の人も返事が聞こえた  
のだろう、バタンと扉を開けバタバタと入ってくる。

ナジャとリームとネコマタだ。昨日の一件から仲良くなってくれてい  
る。

彼女らの父のような人と似た魔力を含んでいるらしい俺のことを最  
初は父、父と言っていたが、父親になつた経験などないし、子供な  
んて盆と正月に会う甥と姪か、友人同僚の子供くらいだ。

正直父は勘弁して欲しいと言うと、それならとティタニアを真似  
て「ダイスケ」と呼ぶよくなつてくれた。おじちゃんとか言われ  
ないだけいいだろう、うん。

「ダイスケ、ご飯だよーーみんな集まってるよーー！」

リリムがまくし立てる。昨日は俺の感覚で一日働いた後の夜の風呂から朝の風呂へ落ち、さうに一日過ごしたのだ。色々ありすぎたので時差ぼけのよつな」と起きなかつたが、多少寝過ごしても仕方のないといふだと思ひ。

けれど朝食も皆一緒にことならば急がなくてはと部屋を後にする。着替えの場所もわからないし、仕方ない。

食堂に近づくとなにやら話し声が聞こえる。主にコリカさんとコリカさんの侍女さんでもめているようだ。  
とこうよりコリカさんが黙々をこね、侍女さんとティターニアが抑えようとしているらしい。

「あたしが呼んだようなものだから、あたしがお世話をするのー！それが筋つてもんでしょ！」

コリカさん筋とか難しい言葉をよく知っているなあ。お子様モードなの。

昨日歳を聞いて、自分の半分ほどの年齢だと知つてから、扱いといつか感情が完全に妹に対するそれになつていて。

侍女さんの一人が声を出す。

「姫様、筋云々はかまいませんが、きちんと姫らしくして欲しいのです。」

正攻法で抑えられなくなつたのかな？ 握め手っぽく痛い所をついておとなしくせよとする侍女さん。

リリムが、「あれはわたしの主でカリンよ。姫の教育もしているの。」とそれをやってきた。なるほど教育係としては言わざるを得ない、言わなくてはならないことだらうなあ。

もう一人の侍女さんはナジャの主でセイさんといつた。自分たちが姫を抑えている間に俺を起こしてきて欲しいとお願いされらしい。ネコマタの主はシン君の護衛のガクさんという。まあ、実際はケルベロスもいることだし護衛など必要ないそうだが、ガクさんもシン君の教育係を兼ねていてるらしい。

昨晩の風呂であんな情報を教えてくれた人が教育係とかどうなんだろと一瞬思つたが、決める所さえきちんとしているのなら大丈夫なんだろう。四六時中お堅い人では子供には好かれにくいしね。

まああまり侍女さんを困らせるのもなんだし、挨拶しながら食堂に入つていく。

「おはようございます。遅くなつてすみません。」

「あ……。ダイスケさん。おはようございますわ。」

無理にお嬢様モードに戻そうとしたんだろうか、うまくいっていない。ほほえましいが。

サンカイさんが声をかけてくれる。

「うむ、おはよう。よくねむれたかね。」

「ありがとうございます。おかげでぐっすりでした。」

「昨日ダイスケがこちらに来た折、ダイスケのところでは夜だったのだろう?まだ寝ていてもよかつたんだが、コリカがな……。」

ツバキさんも、

「わたくしも起こすのはもう少し後でも良いと思つたんですが、ユリカが……。」

と、半分からかいを含んだ表情で言つていた。

「このコリカさんと言えば、赤くなりながら

「……家族みたいな……だから……、今日は……約束が……。」

とかいまいち聞き取れなかつたがぼそぼそと何か言つていた。その

後もなにか理由のようなものを言つていたようだつたが聞き取れず、いつの間にか隣に来ていたシン君が小声で「姉ちゃん、何かの本を読んで、最初に裸を見た人と結婚するつて言い張つてたことがあってね。まだ召喚知らなかつたらしくて本氣でそう思つてた時があつたみたいなんだ。」と事情を説明してくれた。

耳聴く聞かれていたようでユリカさんにポカリとやられていた。

「いてッ！でも姉ちゃんにはまだ早すぎるんだって。大体父様や母様だって一緒になつたのは父様が80、母様がろ…。」

60のことか?じゃあ今はユリカさんの歳からしても…。しかしう見ても30代。サンカイさんは40代にしか見えないぞ…。  
そこまで考えてしまったとき、ツバキさんからものすごいフレッシュヤーがきた。これは地雷だ…。最大規模の。

見えないとこで盛大な冷や汗が出てきた。猛烈にヤバイと感じ、話題の変化を試みる。

ね  
?

フォローになつてゐるかわからないが一応入れてみる。

「ツバキさんはど」をどう見ても30代ですよ。お若くて美人です。  
サンカイさんがうらやましいです。」

やつぱり根は純粋な人たちだ、とつさの一言だったがツバキさんは  
気をよくしたようで俺の手を引き席まで連れて行つてくれた。  
オベロンが感心したような顔をしていたのが印象的だつた。

「「「「いたださまわ！」」」

途中コリカさんと

「結婚なんてこんな腹の出てきた歳の倍も離れているおっさんとじやなくともよからうに。」

「そんなことはありません、ティタニアにも好かれますし、お腹なんてシンの訓練を一緒にすればすぐですわ。歳だつてもう一〇年もたてば釣り合いが取れます！」などと自虐的かつ余計面倒な事になりそうな会話もあつたがつつがなく朝食も終わった。

朝食をいただきながら、いまだに鼻歌のひとつも出てきそうな感じのツバキさんにたずねてみる。

「そういうえば召喚というのは、友魔同士が契約すると聞きましたけど、友魔のいない人とかどうするんです？」

「皆が皆召喚するわけではないわ。お互いが好きな相手同士なら問題はないし、いくら相性が良くても遠い将来のことはわからないといふことは召喚も変わりないですもの。相性が良いとはいえ、友魔がいなかつたり、ウイルス国の人であつた場合は契約のやりようもないし。それに相手が幼子だったりしても問題でしょう？ 50才くらいになつて相手のいない人が召喚をおこなつてみると今のは一般的かしら。ちなみにサンカイは30の頃一度やつてみた所、わたくしが10才だったから一度あきらめたみたいね。ただ地位のある人は簡単に恋愛で結婚できない側面もあるから召喚というのは王族や有力者にはきちんと受け継がれているようね。面白い話では、ガクのように自分と友魔の性別が違う人がたまにいるのだけれど、結婚相手が見つからずに結局召喚をしてみたら自分の友魔だったといつたこともあつたそうよ。」

「そうなんですか。で、どうしてまた姫は17歳で召喚しようとしたんです？」

ユリカさんはなにか言いたげだったがそれより先にツバキさんが口を開く。

「好奇心なんでしょうね。ついこの間まではサンカイと結婚するなんて言つていましたし、本などの影響で少し夢見がちがところがあるようですわ。」

なるほど、17にしては少し幼い感じがするのは恋愛小説みたいなものの影響か。まあそれでもなければ倍も年の離れた自分に惹かれるとか普通は考えられないよね。

少しあいてからツバキさんが言つ。

「どんなことにも必ず利点と欠点があるわ。そして欠点だけを見えてその全てを否定してしまうことが赤い月、魔物への第1歩といわれてこるわ。」

さて、最初はどうなるかと思つたが、なんとか朝食も終わり、守り回復魔法の勉強と思つたが。  
少し問題が発生してしまった。  
回復系魔導師さんのサクラさんが忙しそぎるところらしいのだ。  
ユリカさんはどうしてもこうことで午前中は治療のお手伝いに行くことになった。

お手伝いというが、もともとユリカさんは病院の治療師で2日ばかりお休みをもらっていたらしいのだ。

サクラさんを含め回復魔法の講義をいただくには午前中はユリカさ

んの手伝いが必須というわけだった。

ユリカさんのお手伝いに行くときに見せた遠距離恋愛の恋人がまた帰ってしまうときのような顔を見て少し冷静な話し合いを早急にすべきだと思った。

とにかく午前中が空いてしまったわけだが、この国の地理等、社会的なことを知つておかなくてはならないということになり、シン君の勉強も兼ねてちょうどいいとばかりに社会の講義とあいなつた。自分としても色々聞きたいことがあったのでこちらからの質問形式とさせてもらった。ツバキさん、シン君、ジンさん、エンさん、フウさんといった面々だ。

講義の場に行きながら、ジンさんが昨日の魔法の改良結果を教えてくれた。昨日話をした後、どうしても待ちきれなくなり夜更かしして試してみたんだそうだ。結構な結果が上がったらしく、今日の回復系魔法も楽しみにしているところしそうに語っていた。

「この国の人囗、町や村の所在、通貨、それから魔物のこと教え  
て欲しいです。」

基本的なことを聞いてみる。

この国の人囗は約20万、ミカド城下に10万、西の海辺のミナト  
という町に7万、ミカド国領の真ん中あたりにあるイクサという町

に3万。城下の10万は主、友魔とも戦闘能力のあまり高くないものが多い。他の町で子供が生まれると城下で文字や簡単な算数の勉強を教わるために城下に来るようだ。その間戦闘能力のある者は城下の守備、力のある者は農業や工業、知のある者は教師といった職についたりする。大人であっても城下で勉強した後商人などになって他の町をまわったりするものもいるらしい。城の守備にしても、城と言うよりは農業従事者を不意に襲つてくる魔物から守る意味合いが強い。城は大丈夫かという質問にはケルベロスが『われらを倒せるものなど魔物にはおらぬ。』と言つていた。オベロンなどもうなずいていたからそのとおりなんだろう。

ミナトは漁業とウィルス国との貿易により生計を立てている人が多いそうだ。

イクサはいわゆる戦闘好きの者の町。ミカド国領の南は基本的に人や魔族の集落はなく、魔物が多いため実質イクサはミカド国を守る要の町として存在する。血気盛んなものたちを抑えるため賭け試合のようなものもあるらしい。そしてなぜか地下にて家畜の繁殖に成功しているという。『地下で…?』と不思議に思ったが、他の町もそのうちいく事ができ自分で確認できるだろう。

ちなみにミカド城の北のフジサンの中腹にアマの町というものがあり、これは魔族の集落のようだ。ミカド城との交流があるという。そこからさらに北にも大地はあるのだが、魔物が多く人や魔族はあまり近づかないらしい。

通貨はといえば、ミカド城、ミナト、イクサそれに鉱山があり、金や銀を産出する。それぞれの町の長が管理し通貨として使つてい

るようだ。ただ金は詠唱系魔法の威力を上げる消費型の媒体として、銀は対魔物の結界や魔よけに効果を發揮するらしく、ウィルス国やアマの町との品物の売買に利用されている。

最後に魔物について。魔物とは赤い月にて自我を失った人や魔族、動物の成れの果てだといつ。

もともと魔力と高い知性を持つ人や魔族はそれほど魔物にはならぬようだが、虫や動物はそれなりに多く畜産の動物も魔物化する。イクサの畜産も近くに武に覚えのある者が多いからこそ何とかやつていているようだ。

魔物単体もそれほど力の強いものはおらず群れを成すこともないため、注意するのは巨大化した蛇や、熊。それから毒を持ったものらしい。友魔がいるため1対1になることはほほないので、それなりに武に覚えがありちゃんとした装備ならそれほど苦戦はしないようだ。

魔物の絵付きの本は城地下に、実体験ならば城下町の守り手に聞けば詳しいことがわかるだろうと聞いた。これは図書館があるのか知らないけど図書館めぐりをしてみなくてはいけないだろ。歴史も詳しく知りたいし、文字の関係上辞書はどうしても必要になるはずだ。

魔物以外に人に脅威はないのか聞いてみた。犯罪や病気だ。

犯罪とは何だと逆に聞かれてしまったので、姫の召喚の際に邪魔したような人に害を与える行為だと説明した。

そういう人はそんなに間をおかず赤い月に惹かれてしまうらしい。

友魔も悪意に敏感なものが多いので酔っ払いの喧嘩ですらそんなに危ないことにはならないという。平和で結構なことだと思つ。

病気もいつそ毒草を食して毒に犯されるほうが多いという。まれに風邪をこじらせて亡くなる人もいるらしいが、熱と咳が全て風邪と

定義されてしまうここでは自分のいた現代のほとんどの病気は風邪になってしまっただろう。西洋的な手術等がなく、魔法のみの治療なら仕方ないことだ。

ここまでひとつ疑問が生まれた。

総人口20万、半数は他の町で町ごとの自治。人々はほとんど自給自足のようなこの国、城にもあまり人がいないように思える。自分がここに来てまだ2日なのに家族のよつた対応をされることにも聞きにくいのだけど、と聞いてみた。

「王の仕事とは何でしょう。」

さすがに王がいる意味とは聞けなかつた。王に関する質問だつたらか、それまで勉強の復習代わりにと周りの訂正やつっこみを受けつつ答えていたシン君ではなくツバキさんが答えてくれた。

「王といふ言い方 자체はウイルス国に対するものと言つた方が良いでしよう。ウイルス国王がいるからミカドも、と言つ意味合いしかありません。魔族にしても王とはオベロンたちが言う父という存在をさします。この城にしても人が作ったものではなく、魔族が古代の建物の上に作つたに過ぎません。地下の書物や遠い昔の品を守り、魔物や過酷な自然から当時は子供であつた人を守る城として作つたようなのです。国としてはサンカイ王と各町の長のかわりのものが大臣として、この城下の長もあわせて4人で話し合いながら決めています。本当の王がおられる以上、わたくしたちの呼び方も考えなくてはいけないんでしようけどいい案は浮かんでこないようね。この間もそんな会議で丸々3日も使っていましたわ。」

「なるほど。だいたいわかつてきました。細かいことはおいおいまたお聞きしますのでよろしくお願ひします。ちなみに魔族の方たちは古代文字を理解していらっしゃるのでしょうか？」

オベロンが答える。

「魔族はもともと言葉を発しなくてもお互いが理解できる。魔力で物に意思をこめることもできる。なので私たちには文字を書いて残すという行動が存在しない。ただ人と触れ合うため言葉を発しているに過ぎない。最近は手紙というものに興味を持つ魔族も増えてきたので文字はあるが、人のものを使つてこる。」

では、と『王』と『皇』という漢字を紙に書きながら、

「今、ふと思つたんですが、人の王は『王』、全ての父といつ方には『皇』としたらどうでしょうか。どちらも『お父』と読みますよ。文字になると『皇』の方が偉そに見えるでしょう。」

皆で紙を覗き込みながら、『ふむ』とか『ほつ』とか言つてこる。

ツバキさんが

「面白そうですね。サンカイにも言つてみましょう。」  
と言つていた。

ジンさんは

「他にも文字を見せてくれんかね。」

と言つてきたので、サンカイさん、ツバキさんやら人の名前、地名などや会話に出るだらつ覚えうる限りの漢字を意味を添えながら紙に書いてみた。

サンカイさんは山海、ツバキさんはまんま椿。シン君はどうやら森林から取つたらしく森、ジンさんは老師といつことで魔方陣の陣か。Hンさんとフウさんは得意魔法から炎と風。Hンさんにはその

古代文字はたぶん魔法として発動できるが昨日の火の実験よりさらに気をつけて欲しいと伝えた。フウさんは知っている漢字だったせいか少しがつかりだ。

ツバキさんはミカド国のみカドが帝という文字だったのを知り、ちよつと恐れ多いなどと言っていた。王妃がそんなことを言つていいのかとも思ったので、昔は皇ミカドがいたから帝国ミカドだつたんでは?と適当なことを言つてみたら納得してしまった。

久しぶりに漢字をたくさん書いた気がする。現代ではPCでタイプングだつたし。これは早急に辞書を見つけないと下手に間違つた文字を書きそうで怖い。

午後は回復系魔法ということでいくつか使えそうな文字を思い出そうとしてみる。

治、解毒、回復、はい。治癒が書けなかつた。まずいなあ。

本当に辞書が必須になりそつだ。できたら書き順の載つている漢和辞典。

結局時間の大半は古代文字教室になつてしまい、お昼にしようと一緒に來たユリカさんとサクラさんがそろつて残念そうな顔をしていた。



## 第6話 守りと回復の魔法（前書き）

怪我人の描写がでてきます。苦手な方はご注意ください。

## 第6話 守りと回復の魔法

お昼を終え、一行はサクラさんの研究室についた。ちなみにサクラさんは妙齢の女性だ。年は聞けない。それからシン君はサンカイさんに呼ばれてケルベロスと一緒に行つてしまつた。

黒板のようなものを使いサクラさんに説明してもらつ。

「攻撃系の魔法と基本は変わらないわ。ただ、攻撃系なら最初に描く円を筒や球にすることくらいしか違いはないわ。」

といいつつ手で魔力の立体を作り出す。

「この中の魔力の量で強さ、回復の早さが決まるわ。ただ単に魔力で塊を作るのが障壁と呼ばれる守りの魔法になるのね。作る際に自分が守りたい人を中心に入れた筒や球を作ることになるのよ。」

サクラさんの作った障壁をひとつと叩いてみる。

手で叩いたくらいでは障壁自体の強さはわからないがさわった感じではガラスのような硬質な感じがする。

続いて立体の縁というか表面、壁に当たるとここに『治』と魔力で書き込む。

「これで回復魔法もすべてよ。」

「回復系や守り系の古代文字がほかにあればおしえてください。」

「『治』の他には『解毒』ね。守りの障壁は張る強さに応じて風をしおぐ程度から防音、魔法障壁、物理障壁の順に強くなつていくわ。ただ注意することは魔法かけた人が眠つたり気を失つたりすると障壁は解けてしまうことね。銀を周りに配置しておけば2、3日は持つようになるけどね。他に質問はあるかしら?」

後は実際にやってみないとわからないだろう。

障壁が展開出来次第サクラさんの診療所にお手伝いに行くことを決

定させられてここで魔力障壁の練習と相成った。

まだ患者さんがいるからという理由でコリカさんはサクラさんに引きずりれていった。

ツバキさんとジンさんが先生となり教えてくれた。エンドウさんは自分ができたときの感じやきつかけなどを教えてくれた。

「最初は田を閉じてもいいけど魔力の広がりを確認する為にもあまり田を閉じない方がいいわ。」

「もつと均一に魔力を込めるんじゃ。」

「手のひらからふわっと広げる感じはどうですか？」

「そうですね。ふわっともわっと広げてぴしっと形にするんですね。」

「

……

正直エンドウさんとフウさんの言葉は理解できなかつたが、なんとかいびつどはあるものの魔力の立体を形成する事ができた。

じゃあ実際にやってみないとね。とのツバキさんの言葉に従いサクラさんの診療所に向かう。

城から出るのは初めてだったので正直市場やら酒場が気になつたが今は我慢と思いツバキさんとオベロンについていく。魔導師3人衆は午前中に聞いた『炎』の古代文字を早速試してみるとことで城

内練習場にむかっていった。

ツバキさんも気さくな人なので会話もしやすい。

「ユリカに好かれている様だけどうなの？ 実際？」

「こっちに来て2日ですからね。それどころではないというのが心情でしょうか。何かあったときに自分自身も守れないようではどうにもなりませんし。」

「ユリカもなにか切羽詰った感じもするのよね。ティターニアにそれとなく聞いてみるのも必要かもしません。」

「しかしあの年頃つて難しくないですか？」

「だからティターニアなのですよ。親にいえないことでも友魔なら言えるということもあるでしょうし。」

「なるほど～。わかつたらこっそり教えてください。」

「いいわ。あとこれを。」

もし帰りがユリカさんと一緒になるのなら何か買ってあげたりとお小遣いまでいただいてしまった。

「それよりもこっちの世界はどうかしら。」

「まだなんとも。城の人たちは皆純粋ですばらしいとは思いましたが。」

「ダイスケのいたところは違うのかしら？」

「あちらには魔族も魔物もないですからね。友魔を介して相手の感情がある程度分かる、ということがないので純粋ないい人が結局損をするということが多々ありましたね。するく口の回る人間や人をだましていい目を見るような人間が人を指導する側にすら多く存在することもありました。その点だけでもこちらにきてよかつたと思ふくらいです。」

「そうなの…。ウィルス国が少しそんな感じね。詠唱法にわたくしたちの知らない言葉を使ったりするのだけど、それに加えて赤い月

の影響が出にくい人種もあるわ。ウイルスと商売している人がずるがしこくてやりにくい人がいると愚痴を言っていたのを覚えてるわ。当時の書物にある魔導師が『私たちはこの国にとつてウイルスになる可能性がある。その者たちとともに新しい地で別れて暮らした方がいいと判断した。自虐をこめ国名はウイルスと名付け、この国に負けないようなすばらしい国を作る。』といったことが書かれてあつたわ。ウイルスとは何を意味しているかはわかつていなければ、当時年の方の子供が多く旅立つたと。』

ウイルスとは英語まで習いだした子達だったのだろうか。高校生、下手したら中学のあたりからずるがしこくなる子はいるだろうからその辺りの者と旅立つたんだろう。当時の様子を知る由もないがそんな所ではないだろうか。

「そうですか、明日あたりは書を見させてくれるとうれしいです。あ、その前に自分の身を守る方法が先ですかね。そうしないとこの国を旅できませんし。そういうえば鎧なんかに魔法で守りの力を『えたりできなんですか？」

「よく聞いてくれたわ！ わたくしが研究しているのが正にそれなによ。」

「ツバキさんがですか？ 王妃様なのに？」

「王妃だからよ。王族だからといって何もしなくとも食べていけるわけではないわ。城の裏には畠もあるし、狩もある。仕事ができるものはするのが当然でしょう？ 魔導師は特に自分の研究成果を教え、広めることが職だからここ何年も進展のないあの3人衆は内心ではかなり切羽詰つているんじゃないかしら。」

「やっぱり魔導師はそれなりの結果を出さないといけないって訳ですね。」

「ダイスケには期待してるわ。ジンさんあたりの研究がダイスケの

知識で何十年分も飛躍したと言っていたから。

「風呂のあの麦酒のために頑張ります。」

「ふふふ、よろしくね。」

ちょうどその時、『カンカンカン…』とどこかで鐘を乱打している音が聞こえてきた。

「この音なんですか？」

ツバキさんに聞いてみるも硬直してすぐには話にならないようだ。オベロンにも同じく聞いてみる。

「魔物が来たみたいです。特に1人では対応できないものが。」

「まずいんじゃないのそれ。」

「かなり。ただ襲われるという意味ではなく怪我の治療の関係で。『治療で？』」

「ええ、鐘が鳴る前に近くのものや襲われた本人が狼煙などの方法で救援を求めているはずです。そして人数が集まれば魔物を撃退することもそれほど難しいことではありません。あの鐘は重病者がいる場合に使用するものです。」

「じゃあ…。」

「ええ、何ができるかわかりませんが鐘の鳴る方向の門に向かうべきでしょ。」

急いで現場に向かう。門の傍の広場にはすでに結構な怪我人がいる。回復魔法の使えないものや幼い子も湯や消毒用の酒を運んだり患者の世話をなどしている。結構な速さで走ったにもかかわらずツバキさんは平気そうだ。羽で飛んでいたオベロンは言わずもがな。俺一人『ゼーゼー』とこれ以上ないくらい息を切らしている。運動などほとんどしていないから仕方ない。折角魔力体になつた異世界なのに

そういうところは融通を利かしてくれてもいいと思った。ゼーゼー。

サクラさんやユリカさんもすでに来ている。普段年相応の顔を見せるユリカさんがまじめな顔をして治療にあたっているのに年甲斐もなくドキッとしてしまう。今はそれ所じゃない、気を入れろ。

「なにか手伝うことは？」

サクラさんに声を掛ける。

「回復できる？」

「なんとか。」

「じゃ、手当りしだいできる限りお願ひ。」

「はい、できる範囲で。」

大怪我の人はお任せしてあまり生死にかかわらない程度の怪我を治していく。習つたことを試していようである意味申し訳ない。ただ、ここで分かつことで回復系魔法は、魔力量が足りないと時間掛けても回復せずに魔力の立方体が消える、魔力量が多いと完治後結局魔力が空中に分散してしまい自分が損をする。

治るのであれば後者の方がいいのは確実だが、怪我人が多い場合は自分の魔力量の関係上治せない人が出てしまう。慣れないとむずかしい。怪我人が必要であるという観点からすれば慣れるのが良いのかはわからないが。

治療をしながら聞いてみると、畠仕事中に熊と猪の魔物が出たそうだ。熊も猪も子連れだつたらしい。『魔物が子連れつて…』と正直思つたが本能で生きているやつらからしてみれば目に映る人は攻撃対象でしかなく、子育ての時期もあいまつてかなり凶暴に暴れまわつたらしい。普段なら障壁で攻撃が効かないとなると少しすれば飽きて森に帰つたりするそつだが、子育て時期だつたせいで友魔ともども魔力障壁用の魔力が尽きるまで、尽きても攻撃をやめなかつた

らしい。何とか救援を送ったが助けに行つた人も結構苦戦したようだ。以前城下町の怪我人用の鐘が鳴つたのが10年以上前と聞けば先ほどツバキさんが硬直していた意味もわかるうつというもの。

ティタニアやオベロンは城にいるため古代文字が使える。そのティタニアやオベロンはもちろんツバキさんまで回復にあたる状況が続いた。

彼女らの魔力がかなり減つてきた頃重病者が運ばれてきた。彼女らもまだ手一杯だ。

自分が向かうしかない。患者を見る、出血が半端じゃない。特に背中がひどい。背骨は何とか鎧で守られていたが、猪の突進でも受けたのか、背中にあいた傷からとめどなく血が流れてくる。

『くそっ！』現代のネット氾濫世界で時折見られるこういう系画像は平気だつてのに実際の怪我を目の当たりにしてひざが笑いだす。それでも何とか現在ある自分の中にある魔力のほぼ全てを使い魔力の立体をつくり上げることができた。

震える手で『治』と書き込む。

だめだ、傷がふさがるより出血の方が早い。まずい。

それを見る周りの人にも『これだけの傷では仕方ない』という雰囲気が漂いだす。彼の友魔は魔力枯渇の失神からは回復したもののが意識についていかないらしくぶるぶると震える手を必死に主に伸

ばしている。

『なんとかできないのかー昨日この国の人たちを守りたいと思つたのではなかつたか!』俺の心のどこかで叱責する声が聞こえる。同時に『俺みたいな一般人にできることなんてもうない。』と自分の心があきらめに似た声も聞こえる。

ふと自分でも良くわからない考えがよぎる。ツバキさんの先ほどの言葉、『ふふふ、よろしくね。』ティターーーアをはじめとした友魔達の『父に似た魔力を感じる。』そしてユリカさんの『お腹なんてシンの訓練を一緒にすればすぐですわ。歳だってもう10年もたてば釣り合いが取れます!』

特にユリカさんの言葉については俺自身も意味不明だったが、なんとか気力がわいてきた。

…これならどうだー立体魔力の『治』の前に『完』と入れてみる。  
『完治』だ。

だめだ、これは結果だ。結果完治するだけで速度が出るわけじゃない。

ならば…

『完治』の前に『瞬間』と入れてみた。

目も開けられないほどまぶしい光が魔力の立体を満たし、それが消えた時に先ほどまでとじめなく噴出していた血が止まつていことだけはかるうじて確認できたとき、俺は意識を失つた…。

「ダイスケ…」

やさしい声が聞こえた気がする。半分寝ていてもにやけてしまうくらいのやさしい呼びかけだ。こんな声をかけられるのはいつ以来だるべ。

が、

「…つづつ るさ～～ いつ！」

「無しだ…。かすかにどこかで聞こえる、わやかぼけちゃかぼけ」と  
いつBGMと共に意識が覚醒する。

「あっ、ダイスケ！おきた？だいじょぶ？げんき？」  
ドアップのリリムとナジャだ。

「ああ、うん。大丈夫。」

傍からユリカさんの声が聞こえる。

「なにカリリムとナジャがこうすれば起きるとか言ってそこらのもの  
をパコパコたたき出して。朝もこれで起きたよとかいて。」  
いや、起きたのはあなたの怒声です。とは言えずあいまいな返事を  
しておいた。

「大丈夫そしたら少し聞いていいか？」

サクラさんだ。

「はい、答えられる範囲なら。」

「倒れる前、あれは何をしたんだ？」

美人にすごまれるとかなり怖いんだと再認識。近い、顔が近い  
ですよサクラさん！

なんとか表面上平静を保ち、顔を引きながら答える。

「文字を足しました。というかあの人どうなったんです？」

さらに顔を近づけながらサクラさんがまくし立てる。

「無事だ、というか痛かった歯やら関節、肩こりまで治つたそうだ  
…どういうことだーなにをしたんだ！文字とはどれだーどんな文字  
だー」

近い近いマジ近い！』に誰もおらずサクラさんが恋人だつたらキスしてしまいそうだ。いや、だれかいても関係なくキスしてしまいそうなくらいマズイ。なんかいい香りもするし。ああ～…。

『ダイスケはなんとか煩惱を振り払つた！』どこかのレベルアップの音が聞こえてきそうな感じでサクラさんの肩に手を置き少し顔を離す。葛藤していた時の表情をユリカさんが見ていたのか、ユリカさんの突き刺すような視線に恐怖したのは内緒だ。

それでサクラさんも我に帰つたのか咳払いをしながら姿勢を正す。「で？」

まだこちらはドキドキだ。少しどもりながらも『瞬間』と『完治』とこう文字を使ったと説明する。

「『瞬間完治』か。それならば納得だ。攻撃系は威力を上げること、効果を上げることが求められるが、回復はいかに早く治すかということが求められているからな。これならば回復系はかなりの進歩をとげることになる。」

「書き順も今書いた通りですよ。といつかサクラさん、なんか男言葉になつてますけど？」

「これが地なんだ。下らん理由と些細な怪我でわざわざ私とユリカの回復魔法を受けようとする阿呆を怒鳴つているうちにこんな感じにな。気になるか？」

「いえ。サクラさんの魅力はそれ以上ですかね。……同じく美人のユリカさんもいるし俺も少しの怪我でも診療所に行きたいと思い

ますよ。」

ユリカさんの表情が「なんかしろ」的な表情を受けて少し言葉を変えて言うことに。サクラさんの表情は微妙だったが、とりあえずユリカさんの機嫌が直ったようだからいいか。

サクラさんはさらに言つ。

「もう少し検証してみないとわからんが、あの時ダイスケの作った魔力量以上に回復には魔力が必要だつたと思う。ただあの文字を入れた瞬間、傍にいた友魔はまた失神、周りにいた者も魔力が吸われた感じを受けたと言つていたから、あの文字はその後に続く文字の魔法を完成させるために周りからも魔力を吸収したと考えられる。もしそなへ回復魔法が使えない者でも傍にいることにより怪我人を助けられるということができるかもしないのだ。これはすごいことなのだよ。」

「そうなんですか、まあ役に立つてよかつたです。」

「ふふふ、あまりしでかしたこと理解できていかないのかな。最初はただ召喚の失敗で呼ばれた者をユリカの失敗を隠すために魔導師などとしたのかと思っていたが…。なかなか見所のある者のようなだな。」

「ありがとうございます。」

サクラさんの言葉にふくれつづらになつたユリカさんを片手にお礼を言う。

「ただ、自分自身はいまいち体を守る術がないので、ツバキさんとも相談してそういう防具が作れないか考えることも視野に入っていますよ。後は城の地下の古代文字の書物を調べることでしうが。」

「ほう。ならば私としては防具からお願いしたい所だな。怪我人が

減ることになれば私の研究に時間が取れる。ユリカもそれがいいだろ？ダイスケと一緒にいる時間がふえるぞ？」

さつきのふくれつづらもきつちりサクラさんにばれていたようだ。ユリカさんもしきりに『そうしましょつ。お手伝いしますー』などといつている。

「サクラさんと話し合つ時間も増えそうで楽しみですけど？」  
とたんにサクラさんとユリカさんの顔が真っ赤になる。理由は真逆だろうが。

あれ、サクラさんってあんまりすれてないのかな？下手なこと言つたかなあ。ユリカさんをからかうくらいだし、この位の女性なら案外冗句で流してくれそつだつたのに。

結局サクラさんは赤い顔のまま、

「おかげで今日は助かつたよ。普段はユリカと一緒にいるから。後はきちんと動けるようになつたら城までユリカと一緒に帰りな。」

と、それくわと出て行つた。

後はユリカさんの機嫌を戻すのに必死だつた。今後の食事は必ず隣で取ることを条件に許してくれた。なんか条件も子供っぽい。夜は一緒に寝るとかだつたらかなりまずい状況になるのは想像に難くなつた。助かつた。

なんとか体も元通りに動くようになり城まで帰る。

ふと手をつけないでみたら顔を真つ赤にして子供のよつなはしゃぎよ

うだ。まじめな話、なぜだらうと思つ。ツバキさんの言つたとおり、ティターニアとも話をしてみる必要があるのかもしない。

そのティターニアはふわふわ浮きながら俺の頭をその胸にかき抱いている状態なんだが。『この間はリリムにこの場所取られたから』らしい。ティターニアも顔の作りとしてもかなり美人の部類に入る。そんな人に抱きつかれて気持ちいいものもあるのだが、そこまで思いを寄せる、彼らが『父』と呼ばれる人にも会つてみなくてはいけないだろう。結局彼ら友魔が好意をよせるの俺の持つ『父』の魔力の色であり、俺ではないのだ。嫌われるよりよっぽどいいことではあるが、なんとなく虎の威を借りる狐のようで申し訳ない。

城への道すがらそんなことを考えつつ、時折顔を覗き込んでくるコリカさんに笑顔を向け、『この店はこれがおいしい。』『あの店はあれがオススメ』などと会話しながら歩く。

ティターニアも体を維持するための方法とは別に嗜好品として食事というものをすることもあるらしく会話に加わつてくる。

しかし酒好きの俺にとつては特に酒場の情報が聞きたいんだが。  
「酒場なんて行つちやダメですーその後女性の所で遊ぶのが田に見えますっ！」  
ひどいな。決め付けてはダメだと思つ。『じゃあ今度一緒に酒場に行く？酒じゃない飲み物だつてあるだろつじ。』と言えばつんと考へ込んでしまった。

「ツバキさんと防具が開発できれば回復魔法の人たちも少し余裕ができるんじゃないかな。そしたら町のことも色々教えてよ。」「仕方ないですねー。ならお母様と一緒に研究することを許してあげます！」

なんでユリカさんに許しを得ないといけないのだろう? …なんて質問は命が惜しければだれもしない。死後の世界に希望の持てる人間などいないのだからここはおとなしくうなずいておく。

『お酒のどこがいいんですか?』なんて質問にも『それは飲めるようになればわかる』としか言いようがない。自分の限界というか、適量さえ判断できるのであれば、酒は人類の友だ。

周りの店などをふらふらと見渡しながら歩いていると『がいこくや』なる店を見つけた。一般の人たちが使う文字はほとんどがひらがなという世界であるから『外国屋』なのだろうか。何を扱っているかよく知らないとユリカさんも言つたので、気になって覗いてみると陽気そうなおじさんが「いらっしゃい」と寄ってきたので聞いてみる。

「こ」の店は何を売つてゐるの?」

「これはこれは姫様もご一緒で。と、そつそつ、ウイルスでしか扱つてないものを置いているよ。生きていくうえで必要なものではないかもしぬないけど良かつたら見ていつてよ。」

『ふーん、そなんだ』と適当に相槌を打ちながら商品の説明を聞く。

ふと何かを紙で巻いた細い棒状のものが目に付く。10センチほどのそれを眺め、匂いなどかいである。

タバコじゃないかこれ!常習性は大麻以上といわれ大人は自己責任だが、子供には甚大な害が出るというアレ。

店の旦那も『ウイルスではこれに火をつけて煙を吸うんだと』。『しが』とかゆうとつたぞ。いまいち理解できない趣味だと思つたが面白そうかと思って仕入れてみた。向こうの人間はよくわからんなあ』などといいながら説明してくれた。

「よし、買おう。」

「あんちゃん、いいのかい？ 買つてくれるのはありがたいがよくわからんものだぞ？」

「ははは。」

よくわからんなら仕入れるなよそんなもの。でもタバコが使えるなら店の旦那に感謝かなあ。10本ほど頼む。ついでに一緒にあつたハツカだかミントだかの小さい結晶も購入。さらに面白いものがいか色々物色してみる。ほとんどはミカド国でも使うが過剰な装飾だつたりする方向の面白さの商品が多いようだ。

そして……。

なにかプラスチックのような材質で直径20センチほどのアルファベットのCに似た薄いわづかが目に留まる。

「旦那、これは？」

「知らん。」

なんで仕入れた……。

「何かの樹液に染料と宝石くずを混ぜて固めた物だが、何に使うかはわからん。面白そうだったから仕入れた。」  
面白そうならなんでもいいのかこの旦那は。

手に取つてみると多少弾力がある。いじくりまわしている間にも旦

那と会話する。

「この『じが』つていつの言葉だと『タバコ』になると思つよ。」

「『たばこ』ねえ。」

「他にタバコやこのわっかを扱つてる所はあるの？」

「城下町にやあないな。ミナトにあるかどうか。この町でもミナトでも下らんものをウイルスから買い付けるなどと言われとるわ。かみさんにももうあきられておるな。だがそういうものが好きでな。普段は煙をやつておるが何日かおきにこうして店のようなものをやつとる。やっぱり何人か面白いものが好きな人があつてな。たまに何か売れることがある。」

「そりか~。タバコはまた買うかもしれないからまた頼むよ。それからタバコは子供には絶対売らないようにしたほうがいいと思う。大人はまだいいが成長しきつていらない子供には害があるといわれているからね。」

「そういえば仕入れる時にもそんなことを言われたな。わかつたそうじよひ。」

「あとこのわっかだけど、これはたぶん『カチュー・シャ』。髪留めみたいなものだと思うよ。」

「『かちゅー・しゃ』ねえ。で、どうやって髪を結ぶんだ？」

「結ぶ？いや結ぶものじゃないよ。」

「しかし、たいがい髪の長い人は編んだり紐や織物の布でしばつたりしとするぞ？」

「言われてみればそうだねえ。あ、そうだユリカさんちょっと来て。」

「

ティターニアは飽きもせず俺にくつづいていて文句も出なさそうだったが、ユリカさんは飽きてきたのかまつてもられないから少し不機嫌そうだった。だが呼ばれたことで一気に機嫌が直ったようであれしそうに近づいてきた。

「ちょっとここに立つて。」

ユリカさんの後ろに回り首の所で髪をまとめてあつた紐を解く。商品はまずいかと思ったがまあ姫だしいかと勝手に考え傍にあつた櫛で髪をストレートに梳く。旦那に『商品を申し訳ない。』と形だけ謝つてみたが、旦那は商品に思わぬ付加価値がついたと逆に喜んでいた。

ユリカさんの正面に立ち、カチューシャをつけてあげてみる。痛いようならはずしてね、と言つてから旦那と2人一通り眺め、ユリカさんにも鏡で見てもうひつ。

「紫がかつた青と宝石のかけらの輝きがきれいな緑髪に映えていいね。」

純粋な賞賛の言葉が出る。旦那も隣でうんうんと頷いている。ユリカさんは

「何か恥ずかしいです。」ともじもじしている。

「他の人がやつていられないからねえ。最初はちょっと奇抜に見えるかもしれないけれど、似合つてるし大丈夫だよ。旦那、これまた仕入れに行つたらどう?姫様経由ではやるかもしれないよ?」

「そうだな、また仕入れてみよう。」

「それから他に使い方のよくわからないものがあつたらまた見せてよ。知らないだけでなにか猛烈にいいものもあるかもしれないし。」

「うむ、腕が鳴るな。」

じゃあようしきといいながら支払いを終え、いまだ恥ずかしそうなユリカさんを連れて城への帰途につく。

道中で物珍しそうな視線もあつたがおおむね好評だった。

城の皆も似合つていてると口々にほめていた。サンカイさんは最初にかなり落ち込んでいた風に見えたが、なんとか持ち直したようで目じりを下げる。

「ユリカ、ちょっとわたくしにも貸してもらえない？」

「私にも！」

「私も！」

「だめですっ。私の宝物なんですっ。」

ユリカさんは友魔を交えた女性陣にもみくちゃにされながらも力チユーシャを必死に守つていてるようだ。雰囲気からしてもまわりはからかっているだけと分かるが本人はいたつてまじめだ。

そんなほほえましい光景に和みつつも先ほどサンカイさんが見せていた表情が気になつたのでたずねてみた。

酒とつまみを前に聞く話ではない感じを受けたが杯を傾けつつ話を聞いた。

それは例の召喚の禁忌の顛末だった…

## 第6話 守りと回復の魔法（後書き）

まだ説明回から抜け出せません…。多少の戦いとほのぼの普段の生活をかけるのはいつになるのでしょうか…。

12の方をお気に入りに入れてくださいました。ありがとうございます。  
これからも精進いたします。

## 第7話 禁忌の顛末（前書き）

前回王が話し始めた所で切つてしまつたので急いで続き投稿です。  
少し暗い話です。

## 第7話 禁忌の顛末

サンカイさんは少量の酒でわずかに唇を潤らせ、ゆっくりと話し始めた…。

ミカド国には城下とミナトとイクサの町の長とは別に各代表が1人ずつ、王と合わせ4人で大きなことが決められる。

と言つてもミカド国民ほとんどが自給自足に近い生活をしているため、決めることなど一部作物の不作で食べていくのが厳しい者に援助したり、魔物の被害にあつた人や荒らされた畑をどうするかなど、平時であれば特に会議を開く必要もない程度のものだ。だが昨日のコリカ姫による召喚の儀を妨害した者に関しては再犯を防ぐため、最大限の早さで細心の注意を持つて解決しなくてはいけない事柄だった。

ことの起こりは昨日。

急がなくてはいけなかつたり深刻な議題がなくても月に一度は会議が開かれる。いつもならほんとだにないので結局優雅にお茶をしながらの世間話で終わってしまうのだが。今日もそうだった。以下の議題が『王』という表現を魔族の『王』と区別するためどうするかなどと言つた至つて平和なものだった。

3人の代表のうち、城下の代表が具合が悪いと欠席する以外は。

その代表の名はシユウ。友魔はインプ。主の具合が悪いということインプが代わりに会議というお茶会に参加した。

こういうこと自体は別に珍しくもなく、友魔もほとんど主と一緒にいるため話が通じないこともない。

王と白虎、ミナトの代表、クラさんと友魔のマツハ、イクサの代表、ユキさんと友魔のヴェスターとともに穏やかな時間を過ごしたのだった。

特に問題もない会議の後、ユリカ姫が召喚を行い誰かに妨害され、得体の知れない男が現れると報告を受け、勉強中だったシンを連れ部屋に急いだのだ。

その報告の直前、

「インプからほんの少し異質な魔力を感じる。」と白虎から言われたがその後のどたばたで忘れてしまったのだ。

翌日、なにかどうしても胸騒ぎのおさまらない白虎は王の執務中に一応の護衛をガクに任せシユウの家に向かつた。

彼らの『父』と魔物の討伐をしていたときにも、白虎の勘はかなりの高確率で危険を察知していた。そのせいもあり確かめてみようと思つたのだ。危険がなければ問題ない。もし何か危険なことが起こりそうな場合、放つておいたのでは危険を察知した意味がない。

町に降りるのは久しぶりだ。子供が怖れを見せずに駆け寄ってきた。

皆笑顔だ。

相変わらずこの世界の人々はいい。遙か昔、己は人間の畏怖する対象だったのだ。

子供をいやがりもせずにかまつてやりながらシユウの家の前に着く。やはり微妙におかしな魔力を感じる。

間違いではなかつた。間違いであつてほしいと切に願つていた。シユウは王の幼なじみだ。よつてインプとの関わりも長い。友をこの手にかけなくてはいけなくなるかもしけないことに、いくら人より何倍も強力な魔族とはいえ心が冷えた……。

なんとかそんな感情は表に出さずに子供をかまつている。が、子供とは敏感なもので。

「びやつこ～？だいじょ～ぶ～？」

かわいらしい女の子に問い合わせられた。

己もまだまだだな、とある意味獸ではあるが人なつっこい笑顔を作り『私は強いのでな。大丈夫だ。』と答えておいた。

子供をかまつていれば当然親も来る。

「白虎様」などと呼べば

「魔族と人は友なのだ。様などと呼ぶのではない。」

とかえつて余計に『様』をつけたくなるような威圧感を持つて言い返す。

これは普段も見かけるある意味人と魔族の親愛のやりとりだった。

町人からここ2～3日シユウの姿を見ていないと聞いた。  
妻や子を持たないシユウは、普段の買い物の時などインプと連れだつて歩いているのが常だったのだ。

『おかげであまりいたずらされない』と町人は苦笑いしていたが。白虎の勘に引っかかつたので聞いてみた。『いたずら』とは何のかと。インプがそんなことをしていたとは知らなかつたのだ。いかに最近城下にでていなかつたのかと、己の不明を恥じる。

どうもインプは惑わしの魔法だか術のようなものが使えるようになつたらしい。『声をかけたがそこにはいなかつた』とか『触れたはずだが手がすり抜けた』と言つた話を聞いた。ひどい人では腰をぬかして倒れ込み、体を痛めた人までいたそうだ。

これはまずい。

人をだましたり怪我をするまでからかってその後謝罪や治療をしない。「これは赤い月に惹かれたとみて間違いないだろう。」

王に相談することに決め、城に戻ることにした。

子供たちの名残惜しそうな視線と、『また遊んで』という声を背に挨拶がわりにしつぽを振らせながら城へと戻った。

ちょうど暁を終えたサンカイ王に町人の証言を伝え、己の考えを加える。

「魔物化か……。」

「是。末期かと。」

「禁忌は?」

「そこまではまだわからぬ……。」

「本人に会うしかないか。」

「さらに手を下す覚悟も。」

「白虎はどうだ。大丈夫か?」

「遙か昔より友だつものも数多くいた。覚悟はもうできており、そうしなくては力のないものを守ることはできぬと考える。我が我であるためにもここは放つておけぬ。」

「そうか。ではわしも覚悟を決めねばな。：行くか。」

「待たれよ。シンも連れていくべきだ。」

「シンにか？まだ子供だぞ？」

「ケルベロスのやつも必要になるかもしけぬし、シンも知らなくてはいけないことがあるはずであろう。最初が自分の友人であつたり

したならさりによくないことは明白だ。」

「… そうか、そり… かもしだんな。ではシンにガクを護衛につける。

』

2人は鬼気迫る表情で部屋を出る。

よくわかつていなシンを連れ、ガクを伴いシユウの家に向かう。シンは久しぶりの父親とのお出かけに少し浮かれているようだ。サンカイはこの後を考えると胸が痛む。

ガクはサンカイの表情でなにかを察し、ケルベロスとネコマタには白虎からのつながりで説明しておく。

シユウの家までもう少しといつて『カンカンカンカン…』と鐘が鳴った。

シンは身構え、サンカイに『行かなくていいの?』と聞く。

サンカイはこれでなにかあっても大げさにせずにするかもしないと内心安堵しつつシンに説明する。

『シユウが魔物になつたかもしだぬ。』と短くはあつたが。

シンはその言葉に逆にのけ者これずに関わらせてくれたんだと理解した。

そして邪魔をせずきちんと最後まで見守る」とが王子としての役目だとガクに聞かされた。

シユウの家の前だ。ひとつそりとしている。

サンカイがノックをする。インプが扉を開けた。

「これは王、わざわざお出にならなくてこちらからお伺いいたしましたの。」

「うむ。シユウを見舞おつと思つてな。」

サンカイは違和感を感じた。インプはどうしてこんな物言いをするのだろうと。

シユウとは幼なじみ、インプとも生まれたときからの付き合いだ。

『サンカイが王にならうと言葉遣いなんか変えられねえよ』などと

言つていたではないか。

「ネコマタッ！ 障壁！」

「ケルベロス！」

同時に声がかかつた。

ネコマタの障壁はサンカイを攻撃しようとしたインプの爪をぎりぎりはじいていた。そこにケルベロスがかみつく。

インプは腕をもがれようと家の奥の部屋へと向かつていった。ケルベロスにもがれた腕はきらきらと光の粒子をまとい消えていつ

た…。

インプの魔物化も確定した。

魔物には血液など存在しない。生命活動をやめた魔物は光の粒子となり消えるのだ。

白虎を先頭に奥の部屋に進む。

そこにはサンカイが見とれるほど見事な礼をとったショウがいた。

「王、いやサンカイ。来てくれてありがとうございます。友として最後の頼みだ。インプ共々我らを滅してほしい。もう時間がないのだ。我らは赤い月に……」

「あしゃあああああああー。」

最後まで黙つてしまできずインプとともに飛びかかってきた。

それをなんとかかわし対峙する。

ショウとサンカイ、インプと白虎。

ガクとネコマタはシンを含めた障壁を。

ケルベロスはいつでも加勢できる体勢をとっている。すぐに加勢しないのは友に決着をつけてほしいと、シユウやインプの消えかかっている理性が告げているためだ。

すでに覚悟のできている白虎とそうではないサンカイ。どちらがより動けるかなど自明の理だろう。

白虎は飛びかかりつつ氷の息を吐く。対象を凍らせた後の一撃は必殺だとわかっているからだ。遅れてサンカイもシユウに向け切りかかる。

が、インプは凍らないし攻撃も通らない。シユウもだ。町人の言っていた幻惑の術なんだろう。

ケルベロスにもしもの為にサンカイの守りを頼む。

そしてある程度広い室内ではあるが、己の勘と親友であるといえるインプの性格を鑑みてある一点に爪を立てる。面と向かって親友などと言つ筈はないが。

ぞぶり。

手応えがあった。

その刹那、シユウ共々幻影が消え、姿が見えるようになる。シユウに向かっていつたサンカイを後日にインプに目を向け問い合わせる。

「いつからだ？」

「一月ほどだ。」

「きつかけはわからぬか？」

「すまない。」

「やうか。誰かに伝えることはあるか？」

「シユウに。『楽しかった』と。」

「わかつた。安らかに眠れ、友よ。」

「ふふふ、おまえに友と呼ばれるとはな。また逢おう。」

「ああ。」

「…」

「…」

きらきらとかつて友だつたものが消えていく。  
最後に残つた虹色の小さな玉を器用にしまい、サンカイとつばぜり  
会こをしているシユウに皿を向ける。

サンカイはまだ心のどこかで迷つていた。

武ならシユウに負けはしない。だが少しの迷いが剣を鈍らせていた。

「サンカイ！なにをしておる…」

白虎の叱責に瞬く間に心を定め、シユウとのつばせり会こをはじき  
とばしきりかかる。

刹那、シユウは抵抗しようとはせず、穏やかな、じりかうれしへ  
な表情でサンカイの剣を受け入れた…。

シユウの体は徐々に光の粒子に変わっていく。その間、シユウはサンカイにその身の変化の過程と行つてしまつた行為についての謝罪をしていた。

「すまないな、サンカイ。インプが幻惑の魔法を覚えたと言つた時に気がつくべきだったのだ。そのときインプを切れず、流されて結局自分も赤い月に惹かれ禁忌を犯してしまった。」

「だれも傷つかなかつたのだ。大丈夫だ。」

「サンカイ！それはダメだ！シン！見てているか。禁忌は厳罰をもつて処されるのが定めなのだ。こう甘い王では先が思いやられるぞ。シン、頼んだぞ。」

「…はい、シユウおじさん。」

「そういうことだサンカイ。これが友として最後にできることだ。ミカド国を頼む。」

「…わかつた。」

「インプが『楽しかつた』と。確かに伝えたぞ。」

「白虎か。これからもサンカイを頼む。」

「承知。」

「うむ。サンカイも。元氣でな…。ツバキさんを大事にしろよ?」

「ふつ…さらばだ、友よ。」

「…」

「…」

インプと同じく虹色の小さな玉を残しシユウであったものは光の粒子となり消えていった。

サンカイの独白にも似た話は終わった。  
瞳からはとめどなく涙があふれている。

友、特に親友を切らねばならなかつた心情とはいかほどだろう。いつの間にか話を聞いていた周りの人も沈痛な表情だ。サンカイさんの近くに座つてた人の落ち込みようは特にひどかつた。話にあつたクラさんとユキさんか。

軽く彼らと自己紹介をし、クラさんからもユキさんからもシユウさんは尊敬に値する人物だとわかつた。

俺は「」といつ大好きな音を立て席を立つ。

案の定皆の視線が集中した。

「シユウさんがお亡くなりになつたそうです。皆さんの言葉からでも  
すばらしい人だつたことが理解できました。追悼の意を込め、少し  
の間目を閉じシユウさんの心が安らぐようにお祈りしたいと思いま  
す！黙祷です！」

黙祷といつ言葉の意味は分からずとも皆俺を見て同じようにしてく  
れた。

彼は禁忌により罰を受けたのだ。決して魔物として討伐されたので  
はない。

ところが皆の心情だった。

極刑の禁忌であつたが、魔物として討伐されるようはいい。

「そして、シユウさんの活躍を祈り乾杯です！」

「ダイスケは死後の世界を知っているのか？」

「知りません。死んだことないですから。ただ今回俺がこちらの世界に来たことで俺も違う世界が存在することを知りました。もしかしたらシユウさんは違う世界では英雄になっているかもしません。そちらで人々を統べているかもしません。聞いただけでもすごい人だと思いましたから。そうではありませんか？」

「そうかもしだれぬな。」

「では改めて。シユウさんの活躍を祈つて、乾杯！」

「　　「　　「　　「　　乾杯！」「　　「　　「

サンカイさんに昔話をせがむシン君。茶々を入れるツバキさん。なぜか俺の隣から離れず、それでもシン君につっこみを入れるユリカさん。

食堂のベランダから夜空を眺めている白虎とそれを慰めるように集まる友魔たち。

ミカド国の禁忌にまつわる話が解決した口はこうしてふけていった。

## 第8話 地下探索と父と母と祖父と孫

昨日の夜は早速防音の魔法を試してみることにした。これも勉強だし。

部屋の4隅に銀貨を置き、部屋の大きさぎりぎりの弱い魔力の立体を作り出して寝たのだ。

バタン！

大きな音を立てて扉が開く。部屋の外と中を隔てる防音であるからして、部屋の中での音は聞こえない。

「ダイスケッ！」

「わあっ！」

びっくりして飛び起きた。

「…なに…？」

「なにじゅありません！朝ですよー。」

ユリカさんだ。

「そうですか～。」

「ご飯です！」

「そうですか～。」

「早くしないとーみんな待つてますよー。」

「ふわわ～あああ。」

むにゅむにゅむにゅぶつぶつと独り言か文句のようなものをつぶやいてい  
るとユリカさんの容赦のないきつい視線が飛んでくる。仕方なく着  
替えて食堂に急ぐ。最後は小走りだ。

腹の肉がたぷたぷいう。魔力体で作られた体がどういつ原理で肉体  
を構成しているかわからないが、もし痩せないのなら運動しようが  
一生このままかな?など考える。少しくらい体力もつけないとこの  
世界ではきついことを考えれば、どうしたらしいか調べなくてはい  
けない。体を鍛えようとして運動しましたが効果が全くできません、  
では無駄すぎる。

ユリカさんは全く平気な顔をしている隣でやはり『はあはあ』と息  
を切らせている俺。何とか息を整えながら食堂に入り挨拶と遅れた  
謝罪をして席につく。隣は昨日の約束でユリカさんだ。反対側には  
ティタニアア。魔族は特に食事を必要としないのだが、ティタニ  
アやオベロンは朝にはお茶を楽しむらしい。

「 いただきます。」

「 ダイスケは朝の鐘で目が覚めないので?」  
ティタニアアだ。

「 鐘ですか?」

「 朝と昼と夕方に鳴るのよ。結構大きい音だとおもつんだけど?」

「昨日は防音の障壁を試して寝ましたね。銀もついで」。

「それじゃあ気が付かないね。防音の障壁は寝るときに使つと何かあつたときにわからないことがあるからやめたほうがいいよ?」

「これからはそうしますね。」

「うんうん。防音の障壁は部屋の外に見張りがいて、中で大事な話をする、というときに使うのがいいよ。」

「わかりました、ありがとうございます。」

そういうえばティターニアとかオベロンとか。白虎もケルベロスもだけど、俺の知っている神話系と関わりがあるんだろうか。気になつた。

「ティターニアとオベロンって夫婦なんですか?」

「ぶつ!」

ユリカさんが盛大に吹き出し向かいのオベロンに茶を吹きかける。憮然とした表情で顔を拭いているオベロンを横目にユリカさんの口元を拭つてあげる。

何でこうユリカさんは毎日毎に幼くなるんだろう。などと思いつつクスクスと笑つているティターニアに問いかける。

「そんなに変なことしました?」

「どこからそんな話を?」

「俺のいたところではそういう話がありまして。魔族は存在しなか

つたのでおとぎ話に近いんですが。」

「魔族は人と同じ肉体を持つてゐるわけではないわ。魔力体よ。人型だつたら生殖行為も可能だと思つけど人と違つて子はできないしそういつた欲望を持つものも少数よ。よつて夫婦やそれに準ずる関係は存在しないのよ。」

「そうなんですか~。」

「でもダイスケならいいよ? うふふ。」

「ダメですっ!」

ユリカさん参入。俺の頭上で空中戦を始めた。ユリカさんつていつも「ダメです」と言つてる気がする。

3日目にじすでに慣れてしまいそうだ。

さて頭上のある意味ほほえましいやりとりを半分以上聞き流しつつ、今日はどうするか考える。

書物が先かツバキさんとの防具開発か。防具開発なんていつても一朝一夕でできるわけがないだろうから、今日は書物を漁らせてもらおうか。

「サンカイさん、古代の書物を今日見せてほしいんですけど。」

「いいぞ。なにか新しい発見があつたら教えるんだぞ。」

「わかりました。」

「あたしも!」

「ユリカは仕事だな。」

「昨日お休みだつたのに働いたんですから今日くらいいい。」

「無断で召還を行つた罰だな。」

「うへ、そんな……。」

「ツバキさんは今日は？」

「城下町の代表選出のお手伝い。まあわたくしは半分おまけですけれど。」

オベロンに田配せして俺の思考と「うか感情を読んでもらこいつツバキさんになえてもうひとつを期待してコリカさんにあることを伝える」と云ふ。

「コリカさん、どうして召還をしたのか仕事の前に少しツバキさんと話をしたらいい?」

「ええ?」

「内容によつては午前中くらいは休めるかもしねないよ?」

「ほんとですかお母様!?」

「内容によつてはね。」

「わかりました。」

「では時間も惜しいし、コリカいきましょ!。」

「はー。」

カリンさんにサクラへの伝言を頼みツバキさんはコリカさんをつれて出ていった。

「ワシにも一言あつてもいいんじゃないか?」

「昨日、RJ還をなぜ行つたのか聞きたいとツバキさんがおつしゃつていたので。」

「そうか、次は仲間外れは勘弁してくれよ。」

「わかりました。すみません。」

「よこよこ。ワシもなぜコリカが召還などしたのか気になつておつたしな。」

サンカイさんとそう会話し、サンカイさんは代わりにシン君を連れ、ガクさんをお供に仕事に向かった。

残ったのは魔導師3人衆とセイさん。セイさんはナジャの主さんだ。

とりあえず魔導師3人にはこの間試した『火炎』『焰』の他にとりあえず使えるかはわからないが『雷』と『稻妻』、水や風の文字の後に『刃』と入れてみたらどうかと提案しておいた。それから障壁がその魔法に対してもうけい持つのかも。

全力疾走な勢いで研究室に向かう魔導師3人。いい結果がでるところらしい。ただ危険がないようにだけははしてほしい。

3人の全力疾走を苦笑いしながら見ている俺とセイさん。

「セイさんは今日は？」  
「今日はお休みをいただいています。」  
「どこか体が悪いとか？」  
「いえいえ、だいたい4日に一度はお休みをいただいていることになっていますから。」  
「そつか。まあゆっくり休んでください。」  
「ありがとうございます。…で、あの…。」  
「？」

「ダイスケ、ナジャ達もついていいでしょ？」

ナジャだ。セイさんの友魔。背は俺の腰くらいまでしかない。活発な感じ。言いたいことは言つ。

「いいけど、セイさんま?

「セイがそう思つたんだもの。」

「ナジャっ!」

「ほんとのこのなに。」

「いえつ、これはですね、その、あの……」

「俺ならかまいませんよ~。一人だとえつてつまらないかなと。」

「あの……、ありがとうございます。」

「セイ、よかつたね。」

「ナジャっ!……ただ姫様が何と言つか心配です。」

「あつはつは、確かに。『どうしてセイと一緒になんですかー』とか

言いそうちだね。」

「ええ……。」

「それはそのときに考えればいいことナジャは思つたな。」

「いい事言つねえ。『臨機応変』ってやつだね。」

「りんきおうへんですか……?」

「その場その場で一番いいこと思つことをする、とかいう感じの意味合いかな。」

「ダイスケす、こいつこいつ!」

「悪くいうと『これがあたりばつたり』。『じつにじつに……』」

「ま、どこかへ行こうか。」「ええ。」「うん。」「…」「…」「…」「…」「…」「…」

尻すぼみなテンションを何とか「まかしつつ地下図書施設前につけた。ではご開帳～。

「あれ？ こんなもん？」

見た感じどこかのキッズルームみたいだ。朽ちて半分形になつてい  
ないベンチや積み木。

それでもある程度の絵本のようなものがある。

セイさんは本棚に近づくと嬉々として本を物色している。  
聞くところの本は好きだが許可がないところには入れないし、暗い  
ので一人で来るのは少し怖いそうだ。

ふ～む。国語辞書と漢和辞書、できたら日本語大辞典がほしかった  
のに。ウイルス国との関連でいえば和英や英和も。

それでもと思い本棚を物色してみる。

やはり絵本やふりがなのしつかりついた児童書がほとんどだ。

ふと本棚の一番上の端に『シェルター仕様書』なるものが見えた。  
やはり城はシェルターの上に建設されたものだったのか。ではさら  
に地下とかあるのでは、と思い仕様書を読みだす。

と、

パタパタパタ…

「ダイスケさんお休みもらいましたよ～。…ってどうしてセイと一  
緒なんですか～！？」

「その言い方どつかで聞いた気がするなあ。」

「さつきダイスケが言つてたよ。コリカのまねして。ナジヤ覚えてるもん。」

「そりゃ。」

「無視しないでくださいっ！」

「まあまあコリカさん。私と一緒にではおいやですか？」

「そんなことないけど……。」

「では」一緒に緒しましようね。」

「うん……。」

「そういうえばティターーーーアは？」

「あたしのかわりに診療。」

「コリカさんはいいの？」

「いいの。」

「ほんと?」

「……」

「……」

「……では話もまとまったようなの、これからあるといふをじらべます。」

「ど二?」

「あそこ」。つてわけでナジヤ、俺の肩に乗つて。」

ここがシェルターとして、電気がきているのはブレーカーなんかそれ以外なのかだけでも調べられそうだ。入り口直上のボックスを見る。

ナジヤにボックスを開けてもらい、レバーの下がつたものがないか見てもらう。ブレーカーの仕様が変わっていないことを祈る。

一つ、右端のものが落ちていたのでレバーを上げてもひり。

カチ、ヴィイイイイイイイ…。  
どこかで音がした。

フイイイン…。

部屋の証明が生き返った。

蛍光灯に準ずるものはない。天井自体が光っている。俺のいた時代よりも高度な文明なのは間違いないようだ。ブレーカーは廃れていなかつたのか仕方なくつけておいたのか。よくわからないが、俺でもわかるようになつていていた仕様に感謝する。分かりやすいところに仕様書があつたことも。

先ほどまではランプで周りを確認して本などを見ていた。

しかし部屋 자체が明るくなると見えていなかつたものも見えてくる。

部屋の隅、ある一角がどうしても別の部屋に続く扉に見える。絵本を見ている3人を尻目にその一角に足を向ける。プシューっと音がして壁が開いた。

「おおうー、びっくりした！」

どこのSFTだ。エアーで動く自動ドアなんて。アニメの中にしかないと思っていたよ。

3人もこちらを見て目を丸くしている。

シェルター仕様書をもう一度確認し、危険ではないと判断、扉の奥に入る。3人もついてきた。

食堂か？広々とした部屋に机やイスが整然と並んでいる。ただ厨房は見あたらない。教室のようなものか。だが奥に続くドアの近くの電子レンジのようなものが気になる。開けてみてもなにもない。

そのレンジのボタンにはカレー、シチューなどをはじめ各種料理、パフェなどのデザート、ジュース類やアルコールのボタンがあつた。中にはなにも入っていないことを確認して試しにバニラアイスと書かれたボタンを押してみる。

ほんの数秒、シュインと音が聞こえたかと思つたらチーンと鳴つた。開けてみたらアイスとスプーンが入っていた。

バニラアイスだった。一口食べた後ユリカさん達に渡した。食べても大丈夫だと伝えて。

ま、俺も食べたんだし大丈夫だとは思つたんだろうけど、おそるおそる口に運んでいた。一口食べた後はあつと言つ間だつた。ユリカさんだけだと悪いかと思つたのでもうひとつ出してみる。セイさんとナジャもたいそう喜んでいた。

もつと食べたそだつたがもう少し調べた帰りにしょつと提案し、次の扉に入る。

次の間は他の間へと通じる連絡通路のようだつた。が、2部屋を除いて部屋にあつたものは特に意味のないものだつた。1部屋は毛布や布団のたぐいと食べ散らかされた保存食の缶詰などの空き缶。何か燃やしたのであらうか部屋の中央にはたき火の後のようなもの。さつきのブレーカーが食べ物のレンジというか瞬間作成機のようなものの電気も兼ねていたんだろうか。

わからないことが多すぎる。サンカイさんも何も言わなかつたところを見ると知らないようであるし。

素人ながらに推理すればブレーカーが何かで落ち、食べ物がなくなつて保存食でしのいだ。死体がないと言うことは助かつたのか出ていけたのか。食堂に入つたときのドアさえ何とかなれば出でていけるはずだ。もしくは非常口。

辞書はかなりの確率で失つていると思われる。暖を取りたい子供にとって燃やすのに躊躇しないものであるだろつ。

もう1部屋が気になる。他の部屋にはさうに下に行けるようなところもなかつたし、他と少し毛並みの違つこの部屋の扉上のプレートにはかすれながらも『管理』の文字が見える。ここを中心的機能があるのではないかと。

だが開かない。どうしたものかと途方に暮れているとすぐそばに『管理代理 天照大御神』と記してあるのをユリカさんが見つけた。

なんで気がつかなかつたのか。たいしたものではないと思つたのか、名前に現実味がなさすぎてスルーしたのか。

なにかのきっかけにならないかと思い、ユリカさんに読めるかと尋ねてみた。自分が幼い頃この神の名を読んだとき、周りに大笑いされた、それをこの子にもなんてそんな暗い理由はない…と思つ。

「てんてるおおかみ」

「ぶあつはつは…」

「？」

「あははははー!うへつ、げほつーあはははは…」

笑いの衝動が止まらない。ここにきて久しづりになにも考えずに笑了たかもしれない。

3人は未だに首を傾げ「？」だ。

「くつくつく…くえつ? !」

扉が開いている、5センチばかり。

でなんか瞳も見える。正直お化けっぽくておつかない。

「だ、誰…？」

おそるおそる聞いてみる。もしもの事があればまずいと思い周りを確認しながら。ユリカさんとセイさんは人がいると聞いていなかつたものだから腰を抜かしそうなほど驚いている。ナジヤはよくわからぬ表情をいている。

扉の開きがもう少し大きくなり、にゅっと手が出てきた。  
反射的に後ずさつてしまつたが仕方ないとこらだろつ。

扉から出てきた手は『管理代理 天照大御神』のプレートを指している。

「えつと…、アマテラスオオミカミ?」  
さんや様すらつけることができずうわざりながらも答えた。正直おつかなかつたからそれどころではなかつた。

すつと扉が開いた。

年の頃はユリカさんと変わらないくらいの黒髪の女性がいた。後光が差しているように見えるのは見間違いではないのだろう。名前の通りなが。

魂での格付けをされていると思つても嘘じやないと思われるほど威圧のようなものを受けた。無意識のうちに膝をついていた。

が、

「とーさまー！」

ナジャがその人めがけ飛び込んでいく。

あっけにとらわれているうちにその人はナジャを優しく抱き抱えていた。

「はあ？あなたが父い？」  
えらく不遜な言い回しだったと後で後悔したがこのときはそれどころではなかつた。

「むつ、キミに父と呼ばれる筋合はないのだ。ボクは何が楽しそうな笑い声が聞こえたので扉を開けて覗いてみただけなのだ。」  
俺はアメノウズメかよ。幾分冷静になれたので聞いてみる。

「ええっと、俺、いや自分はダイスケと申します。あなたはアマテラス様ですか？」

「うむつ。ボクはアマテラスなのだ。この地の魔族の長なのだ。今はティンロンにまかせてるけど。で、ダイスケって言つたね、キミはここの人と魔力の質が違うようだけど。何となくボクの魔力に似てる。この世界と一つになつたときにボクと重なつた人。その人に似てるのだ。」

「いつ頃ですかそれは。くわしく…」

「まあ待つて。キミの後ろの人たちも名前を聞いてから。」

「ユリカと言います。隣はあたしの侍女のセイです。」

「おつけー、ユリカにセイね。だいじょーぶ。で、ダイスケはなにが聞きたいの？」

「ええと、アマテラス様に聞きた…」

「アマテラスでいいよ。」

「ありがとうございます。」

「できたらかしこまつたのもなしで。」

「…、わかりました。アマテラスさんの『重なつた』とは…実は俺、こここのユリカさんの召還に呼ばれてほかの世界と言つか、この地球の今から5000年位前の時代から呼ばれたらしくて。」

「じゃあダイスケの子孫かもしれないなあ。」

「おお、俺は無事子孫を残せたのか！結婚できたって事でいいんだよな。よくやった俺よ！」

「ま、確實に子孫だとは言えないんだけどね。」

「そつか確實じゃないのか、がんばれ俺！」

「今から4000年位前かな、ここと一緒にになったのは、ボクがこの人と重なつて、もう2人仲間がこの世界とかと重なつたんだ。そしたら2つの世界が重なつたというわけ。」

「それはわかりました。じゃあ单刀直に入りますけど、赤い月に惹かれる理由はわかつたんですか？オベロンから聞いたんですけど。

「…わからない。」

「今のところ苦しめずに命を絶つてあげるのが一番と言つことですか。」

「うん。」

「とりあえずそれだけ聞けたら十分です。まだここにいるんですねか？それなら自分達は帰りますけど。お昼も近いですし。」

「ボクも行こう。用の事も手詰まりになつてきていたし、魔族の事も気になり始めていたし。午後はボクがここを案内してあげるよ。友達もいるし。」

「まだ何か施設があるんですか？」

「うん。もつと地下に。」

「じゃあ、おねがいします。」

「わかった。期待してて。」

アマテラスさんの『期待して』の意味が分かつたのは先の話だ。

地下食堂にてお昼のだいたいの人数を聞いて機械の調子を見るついでにアイスを作つてみる。アマテラスさんがこれもおいしいなどとバーラのほかにチョコやイチゴなど追加していた。ここは使えなかつたのに知つているということは午後の案内も期待できそうだ。

総勢5人でぞろぞろと歩き食堂近くまで来た。ユリカさんが、「ティターニア怒つてるかも~」などと言つので、どんな反応を起こすかといふいたずら心でアマテラスさんには少し後から食堂に入つてもらうことにした。特に白虎やケルベロスがどうこう反応を示すか楽しみだ。

食堂には皆揃つていた。案の定ティターニアはちょっと怒った感じで何か言いたげな表情でこちらを見ている。俺じゃないよな?関係ないと思うし。ティターニアの隣に2つ席が空いているということは俺とユリカさんと言うことか。その隣も開いているのは都合がいい。ティターニアが怒つていたんでそばにだれも来たがらなかつたんだろう。

ティターニアがユリカさんを見、ユリカさんが首をすくめ、俺に助けを求める視線を向ける。他人に助けを求めるのは何事だと言わんばかりの視線を向けて声を出さうとしたティターニアをさえぎり声を出す。

「本日、地下の書庫を探索中、新しく友人になつた人ができたので

昼食に招待いたしました。申し訳ありませんが、みなさんご起立い  
ただけないでしょうか。」

「起立もなにも、この食堂には王家4人と侍女2人に護衛1人、後  
は魔導師3人衆しかいない。友魔は父と仰ぐもの以外は同格のもの  
とは見ても格上のものとは見ない。よつて友魔はこれから来る人を  
知つているナジャ以外は至つて普通にしている。白虎やケルベロス  
なんぞ半分あくびしているかのようだ。

くつくつく。  
おもしろこじとになりそうだ。  
顔には出さず、どうぞと招き入れる。

まばゆいばかりの光が入り口あたりを満たす。  
さすがアマテラスさん、わかつている。

誰も動けないほど威圧感が漂う中、なんとかキツいのは表情に出  
さずアマテラスさんに手を差し伸べる。

「食事をよろしければご一緒しましょう。」「  
「うむ。わらわも小腹がすいたところであるな。」

下手な演技につきあつてもらいしずしずと席に向かう。  
友魔はこれほどないくらい驚愕した表情をしており、特に白虎とケ  
ルベロスは顎がはずれるかといつほどあんぐりとしていた。

ユリカさん、俺、アマテラスさんの順に座る。席に着くとアマテラ  
スさんの光も収まった。

とたん、サンカイさんが聞いてくる。この一番に飛んできそうな白

虎とケルベロスはまだ固まっている。

「その方はどなただ。」

サンカイさんにもアマテラスさんの強さといつか格がわかつたらし  
い。聞き方も丁寧だ。

「天照大御神様です。魔族の頂点に立つお方です。」

「ふつ。ダイスケ、様はやめろと言つたじやないか。ボクはアマテ  
ラス。よろしくね。」

どうもアマテラスさんが堪えられなかつたようだ。吹き出した  
後の自己紹介の後、友魔が駆け寄つてくる。

「父！」

「父上！」

「お父様！」

「なにつ？！」

サンカイさんもびっくりだ。ぼそぼそと小声で聞いてくる。

「男じゃないのか？」

「俺の世界でもアマテラスという神様は女性でしたからなんとも。  
しかし女性にしか見えないぞ？」

「両性具有とも言われていますよ。」

「りょうせいぐゆうとは？」

「男であり女である。」

「なるほど。」

「ダイスケっ！」

「はいっ。」

「ボクは女の子なんだよ。」

「でも…。父とか言っていたんで…すみません。」

アマテラスはやさしげな表情で友魔たちをなでていたが、こちらに威力のありそうな目を向けてきたのでとりあえず謝つておく。

「魔族での父とは旨を導く存在。母とは旨を包む存在。そういうことなんだよ。人の父母とは少し違うからね。ボクは女の子なんだよ？」

「わかりました…。」

「ふふ、いい子だねダイスケは。」

しかしさやられっぱなしでは癪にさわる。

「でもアマテラスさんがもし俺の子孫と重なったということならアマテラスさんは俺の子供と同じになりますけど？」

「むっ。確かにもししそうなら否定できないな～。これはきちんと調べないといけないね。」

「まあ食事をしてからでいいでしょう。」

「そうなのだ。ボクもここでは久しぶりの食事だからね。ちょっと期待しているのだ。」

あきらかに緊張しだした厨房の人々に、『気にしなくて大丈夫だ。』と伝えておく。もともとアマテラスさんもどんなにまずかるうとけちを付ける気はさらさらないので。ただ、自分のいなかつた間の食文化を知りたいだけなのだから。

つて、どうしてアマテラスさんの考えていることがおぼろげながらわかるんだろう。

「やっぱりボクがこの世界で重なった人はダイスケの子孫かもしれ

ないね。」

「ひょっとして筒抜けですか？」

「ううん、ボクのことを考えて伝えるつもりにならないと上手く伝

わらないよ。きちんと伝える気持ちになれば見てるものや匂いまで伝わるかも。友魔とのつながりがそんな感じ。

「へえ、なるほど。」

その人との直通回線が常に頭の中にある感じなのかなあ。うん、えつちなことは伝わらないように気をつけないと。

アマテラスさんがこちらに視線を向け、にやりとしたが特に何もないわなかつた。

ばればれか……。

喜びにふやけていた友魔も落ち着きを取り戻し、皆自己紹介を終え、食事を続けた。アマテラスさんもおいしいと言つて食事をしていた。どうも人と重なった時に半人半魔のような状態になってしまったようで食事は必須のようだ。その分魔族のような休眠は要らなくなつたそうだが。

そして食後のデザートのアイスは皆絶賛だった。

わて、これから地下の続きを探索するわけなんだけど。

全員が行くと名乗りを上げた。

まあ当然だわなあ。

アマテラスさんと相談する。

「機密保持の観点からしてみんなつてのはまずくないですか?」「そーだなー。サンカイとツバキ、白虎とオベロン位までかなあ。」

「 「 「 「 そんなん…。」 「 「 「

「 父の言つことは聞くものだ。」

などと外されなかつた白虎とオベロンは偉そつに言つてゐた。

「 じゃあみんな、お仕事がんばつてね～。お土産話ならボクがきちんと、…ダイスケにさせるからさ～。」

まわりの期待に溢れた目にちょっと引いてしまつたのか、俺に振りジト目を向けておいた。

まあ面白いことがあれば聞かれなくとも話したくなるだろ～。あまり気にしないことにした。

先ほどの食堂に着く。食品作成機の説明もする。来て早々おやつタイムになつてしまつた。

そうだ、少し気になつたことを聞いてみよ。

「 アマテラスさんつて言葉とか古代文字つてどのくらい理解できるんです？」

「 重なつた人が知つてたことはほとんど。あとは地下の友人から。」

「 それで『オッケー』とか『機密保持』とか知つてたんですねか。」

「 まあね～。難しい話が通じそつでうれしいかい？」

「 ええ。聞いた話、世界が重なつた時に大人がいなくなつたと聞いて難しい文化とか科学とか手探りで探さないといけないと思つてましたから。」

「 ふふん。まあ頼つてくれたまえ～。」

「 頼りにします。…で、この先の他の部屋にあつた燃えカスとか

食べかすとか、そこにいた人たちはどうなったんですか？」

「最初にここから人間の子を助けた時に雷を使える仲間がいたからね、電気の仕組みは分かったからエアー駆動のドアを開けてみんな外に出したよ。そのせいでもドアが開かなくなつたんだけど。それが君たちの先祖になるわけだね。ちなみにボクと重なつた人はそのときに唯一生き残つていた大人だよ。重病だつたけど。」

半分はサンカイさんやツバキさんに向けての言葉だ。なるほど、伝聞と実際に見た人の言葉とはやはり食い違う。

「そうだったんですねか。」

「うん。じゃあそろそろ行こうか。」

管理室と呼ばれた部屋に入る。

PCのようなものがあった。テレビかもしけんが。

「これ、パソコンですか？」

「みたいだね。ただ脳波とパスワードで管理してるらしいけど、ボクでは起動できなかつたよ。」

すでに頭が飽和状態で話についていけない人が2人、父と同じ所にいられる喜びだけであとはどうでもいいと思っているのが2人。まあ、あとでかいつまんで話をすればいいか。

PCに近づく。と勝手に画面がついた。

「脳波ヲ確認シマス。確認中。ぱすわービィドウゾ。」

合成音声が告げ、キーボードが宙に映し出される。投影式か。

「おお、ボクがやつてもパスワードの画面にすら行かなかつたのに。」

「

「なんでおでしようねえ。その大きな事件があつたときには俺は生きていなはずなんですが。」

「ま、次次。できる所まで行ってみよー。」

「そうですね。」

じゃあ、とパスワードを入れてみる。自分がよく使うパスワードから順に試してみよう。

と、最初に入れたパスワードで反応があつた。

「樹大介サン、ヨウゴソ。」

「おおお～！通っちゃったよ！」

「樹大介サンニめつせーじガアリマス。」

「ええ？ どんな？」

「めいんしすてむカラ、最深部ニゴ足労イタダキタイトノコトデス。」

「どこ？」

「そこならボクが知ってるよ。案内するよ、それでいい？」

「了解イタシマシタ、オマチシテオリマス。」

「じゃあ行こー。サンカイもツバキも行くよ？」

「「は、はい…。」「

じゃあこっちと管理室からエレベーターに乗る。

サンカイさんとツバキさんは初めてだらう、おなかのあたりを押さえている。あの浮遊感は慣れないとキツいかも。

結構降りている。エレベーターに乗ると自然と目がいつてしまう階数表示の他の階のところも正直気になるが今はとりあえず最深部に

向かっていく。

どのくらい乗っていたのか、正直エレベーターなんて都会に出張か遊びに行つたときしか使わないからどのくらい降りたのか見当もつかない。

エレベーターも止まり、降りた先は大きなホールだった。まずは目の前に大きな木があった。

天井もかなり高い。それに地下にも関わらずかなりの光が射し込んでいる。上を見なけば外にいるような錯覚を受けるほどだ。

大樹に近づく。

「お待ちしていましたマスターの血縁者、樹大介様。それからアマテラス様、お久しぶりでございます。」

木がしゃべった！よく見ると顔に見えなくもないところがあり、口に見えるところが動いている。

「イグドラジル、久しぶり。アメノトリフネは？」  
「ここに。」

ちつとも黄金の船が大樹のそばに浮いていた。

「アメノトリフネも元気？」

「ハイ。父モオカワリナク。」

「うん、元気そうで何より。あ、みんな、この樹は『イグドラジル』。船は『アメノトリフネ』。ヨロシクね。」

「「母殿…」」

よろしくといひ前に白虎とオベロンがくいついた。その小さな船に駆け寄る。

「母？」

「うん。みんなを包む存在。世界が重なる時に先に自ら世界と重なつて世界そのものになつて皆を守つた人。今のこの姿はある意味残滓。でも小さいと言つても弱いわけじゃないからね。世界を壊すレベルでの攻撃がないとなんともないよ。世界だからね。」

「なるほど。で、イグドラジルさん、ここに呼んだ理由は？それから血縁者って。」

「話は長くなりますが、私としてもどうしてここにマスターの血縁者がいるのかも含めて聞きたいこともあります。アマテラス様はその人間の相手をお願いしてもいいですか？」

「いいよ～。あ、この人たち、今上の世界での王様と王妃様やつてる人。サンカイとツバキ。白虎とオベロンは知つてるからいいよね？」

「はい。サンカイ様ツバキ様ですね。ではこちらでゆっくりなさつてください。」

ふよふよとアメノトリフネと呼ばれた船が近づいてきてテーブルやイス、お茶やお茶菓子など出していく。どうやつているんだろう。食品作成機といい。

「ではダイスケ様、よろしいでしょうか。」

「はい。おねがいします。できたら2010年あたりから。自分のいた時代はそこだつたんです。姫の召喚によつて魔力体となつてこの世界に存在するようになつたので。ほんの2日前のことです。自分としてはそれ以上のことは分かりません。」

「かしこまりました。先ほどブレーカーを戻していただいたおかげで地上ともリンクするようになりました。まずは感謝申し上げます。」

「いえいえ。」

「そして2010年以降の話でしたね。かいつまんでお話します。

2012年、特殊な宇宙線が地球に降り注ぎ人間に生殖能力がほぼなくなります。ダイスケ様はその中でも奇跡的に生殖能力のなくならなかつた少數の人間のうちの1人でした。

2021年、クローンが人にも認められるようになりますが、生殖能力はその人格からも影響を受けたようで、クローンには生殖能力がありませんでした。

2040年頃には完全な脳移植ができるようになり、生殖能力のある『エルダ』、能力のない『ノーマル』として主に生殖ではなくボディを替えて人類を生かすというようになりました。特に『エルダ』はボディの損傷等を防ぐ意味でもより高度な技術が使われていて怪我や病気などに強く寿命が長かつたようです。

2253年、ダイスケ様の脳細胞自体の寿命により永眠。

2289年、ダイスケ様最後のお子さんであり、エルダの『麻耶』様が私のシステムアップ、及びエネルギーの吸収、放出を伴わない原子変換を成功。

2310年、あらゆるものが通称『マジック』と呼ばれる機械で作成可能になりました。

2405年、麻耶様が最後の子、『天照』を生み他界。

2601年、天照が世界の盟主として立ちます。

3007年、天照の寿命を狙いクーデター勃発。この頃にはクローンもかなりの高性能で600年から800年の寿命を持っていたようです。

クーデターはノーマルの者が、クローンとは違ひ機械化により命を永らえていたのですが、生身の体とかつて自分の持つていた富や名誉をもう一度得ようと違う次元の地球と次元結合を行いました。

それが魔族と呼ばれる者と同じ地で生きていくことになるきっかけになりました。その時に特に生身ではなかつたクローン体はこの影響を強く受け、生きていけなかつたようです。そして子供たちが生き残つたのです。

麻耶の子、天照が最後までこのシステムを使い一人でも多くの人を助けようとしていました。そこにアマテラス様が重なりアメノトリフネ様は世界と重なり、私はシステムと重なったのです。アメノトリフネ様が世界と重なったことでこの地球の崩壊はなくなり安定しました。

「…これがシステムに残されていた情報です。その後のことはアマテラス様や白虎様、オベロン様の方がお詳しいかと。私は唯一地上へのリンクが切れおりましたのでよく分からぬのです。  
もともとあらゆる植物は私でありますたが、この世界で单一の魔力でなくなつたこととシステムと重なつたことでコンピュータ的に物を見るほうが得意になつてしまひました。ですから今は植物からではよほど強い感情しかとらえられなくなつています。」

「…なんて言つたらいいのかわからない。自分がそんなに大きなことにかかわっているとは思つてもみなかつた。」

「ボクが重なつた人がダイスケの孫で同じ名前だつたのは知らなかつたなあ。」

「よく分からぬが今のミカドの民はダイスケの遠い子孫であるのか？おもしろいのう。」

「わたくしたちがダイスケの存在に不安や危険さを覚えなかつたのは血なのね。」

俺の言葉のあとにアマテラスさん、サンカイさんツバキさんが続く。

白虎やオベロンは

「我はもつまことこの世界にいるからな。今の世界を否定できぬ。

」

「父と母とともに生きていけるなりまほかに何を望みましょ。」

厳密には俺のせいではないと思いたいが、大きな流れを見すぎた結果、小さな堤防の欠損が大きな災害を招くのと同じように、自分の子孫がしでかした結果に心が痛む。ここにいる皆は責めはしなかつたがそれが返つて自己嫌悪を招いている。

「まいつたな…。詫びよつもない。」

「あんまり考えちゃダメよ、ボクだつて赤い月のことは、なんにもできないもん。ね、おじいちゃん。」

「ぐつ。この年でおじいとは。まだ結婚もしてないのに。まあ仕方ないのかな、ねえアマテラスちゃん。」

白虎あたりに怒られるかとも思ったがあえて軽口で返してみた。特に白虎は何も言わなかつた。バカにしているわけではないと理解してくれたんだろうか。

「お昼の時から思つたんだけど、ダイスケつて相手によつては堅苦しいしゃべり方だし、どこか遠慮してる所があるでしょ。その丁寧つぽいしゃべり方も中途半端だし。そういうのつて疲れない？ボクには普通にしゃべつていいいんだよ？ボクも血のつながりのある人とか初めてだし、なんかうれしいんだ。」

「ありがと。そうさせていた…もううよ。」

「おい、ダイスケ、ワシらだつて家族だる？」

「そうですよ、わたくしたちにも気楽にして欲しいの。」

「ダイスケが父との血縁者ならば我らとも家族となるな。」

「 もうですね、今後ともよろしく。」

「 ありがとうございます、いや、ありがとうございます。『氣をつかま…』あ、  
『氣をつける。』

「 まだまだ先は長いわ。」

やわらかに笑ひが空間にこつまでもこだました。

## 第9話 レベルアップ

地下での歓談が続く。

サンカイさんとツバキさんは地球全盛期時の紅茶やお菓子のたぐいを子供のように喜んで食べている。カロリーが高いことは伝えるべきか否か。

白虎とオベロンはアマテラスとアメノトリフネとの会話に忙しいようだ。アマテラスがここにこもつていた間に起こったことのすり合わせだろうか。

俺はといえばイグドラジルと話をしている。

「ダイスケ様がシステム管理者と登録されました。」

「え？ めんどくさいことはやだよ？」

「いえ、管理者がいることで管理メインシステム『ノルン』の制限が解かれます。」

「ノルンって？」

「歴史、地理及び土地の研究開発に特化した『ウルズ』、人の生活環境に特化した『ヴエルザンディ』、マジックに特化した『スクルド』。それぞれの人工知能を管理運用するのがノルンです。そして私はノルンと現在重なっています。」

「へえ。人情的な判断とかできるのかな？ ほら、コンピュータつて人間に作られていても人間という種をいらないと判断したら問答無用で人間を滅ぼすイメージがあつて。」

「私がノルンと重なっていること。そしてアメノトリフネ様がすべてを含めた世界と重なっていること。その影響がノルンにも出ています。」

人や魔族全員を引き替えにしなくてはいけないようなことがない限り大丈夫でしょう。懸念材料の4000年前の世界融合ですが、そ

れを行つた資料、装置はすべて破棄されています。」

「じゃあとりあえず安心しておくよ。で、権限が増えたつてのを具体的にお願いしたいんだけど。」

「ノルンの中での基本的な食物維持施設以外の稼働が先ほどより再開されました。」

「さっきの3つのシステムは今まで休止だったってこと? 食物維持施設つて?」

「3システムは管理権限者が存命でないと稼働いたしません。ですからダイスケ様が管理者に登録された後、直ちに暖機運転に入っています。」

命令により稼働を行うでしょう。食物維持施設ですが、マジックにより作り出される食品系はどうしてもコピー元が必要になります。世界の不

文律と言われていますが、理論のみで実物のないものは作成できないのです。そのコピー元を常時保存もしくは隨時入れ替えるのできる施設がどうしても必要でそれは管理者に関係なく常時稼働しています。エレベーターより専門階層に行くことが出来ます。」

「わかった。3システムはどうするの?」

「3システムから命令を受けたいと要望が出ています。メインのノルンもご挨拶がしたいと。」

「え? どうやって? コンピュータじゃないの?」

「ホログラムのようなものを用います、どうぞ。」

「統合型メインコンピュータ統括のノルンでござります。」

「土地特化ウルズでござります。」

「生活特化ヴェルザンティでござります。」

「マジック特化スクルドでござります。」

黒髪のノルン、茶髪のウルズ、緑髪のヴェルザンディ、銀髪のスクルド。

正直髪の色以外では見分けがつかない。皆美人であるが。四つ子？皆同じくらい、25歳あたりに見える。正直俺の見た感じと実年齢がこの世界では合ったことはないんだが。

なんと言つていいか困つていると、イグドラジルが助け船を出してくれた。

「ダイスケ様、インターフェイスの関係上、髪の色くらいでしか判断できないかと思います。累計稼働時間が長くなり、各自の特色といいますか、性格が出てくれば姿形ももう少し変わつてくるでしょう。それまではこのままで、申し訳ありませんがお願ひいたします。」

「わかつた。で、みなさんがどうしたいかまず聞いた方がいいかな。」

「地理関係としては上空衛星とのリンクを回復、土地関係としては動植物の分布や数等の把握、魔物の種類及び生態の研究でしょうか。」

「生活関係は、科学が衰退してしまつてるのでどこまで介入していいのかをはかりかねます。」

「マジックについても同意見です。」

「たしかに今の文化にはあまり大きな影響を与えたくないなあ。徐々にやつていくべきか。土地と動植物と魔物の件はそのままやつてくださいな。衛星は悪用されないようにだけはお願ひします。」

「わかりました。」

「生活については、個人の魔力を充填できる電池のようなものを作つてとりあえずランプを。それからできればオートで作動する魔力

障壁。マジックについては今までのものを残しつつ、この世界で作ることができるもので再構築。あと、できたら俺の装備がほしい。特に身を守ると回復系。攻撃用については俺専用で無力化の方向ならありがたい。」

かしこまりましたとヴェルザンティとスクルドが続けようとした時、アマテラスから待つたがかかった。

「開発するものは、ウルズと相談してミカドの地でしか使えないようにしておいて。」

「どうして？」

「どうもユリカの召喚の件、ウイルスが一枚かんでいそうなのだ。ウイルスの個人の暴走ならいいけど、国家からみだとしたら戦争が起きる可能性もある。まあ最悪金銀を止めてしまえば戦争なんてなりっこないけど、そのために一般人を巻き込みたくないし。」

「あとで詳しく。」

「分かったのだ。ボクもあまり詳しくないからあとでツバキとも話しあおうよ。」

「分かった。そういうわけで頼むよ。」

「かしこまりました。」

「それから…、個人的なことで申し訳ないんだけど、今の俺の体の状態って分かる？こんだけ乗り物とかない世界だと自分の体が資本だと思うんだけど、俺ってやせられるのかな？その、魔力体つてどうなのかなと思って。」

ノルンはスクルドに何か耳打ちし、スクルドをアマテラスのところ

へ行かせる。何か作り出したのだらう、アマテラスに渡し、何事か話をしている。

程なく戻ってきて4人揃ったとき、アマテラスが言い出した。

「ボクたち上に戻ってるから。夕飯までに帰ってきてね。」

「アマテラス様は」一緒にされないんですか？」

ノルンが聞いた。

「ボクは上に帰ってもチャンスがあるからね。今日はキミたちに譲つてあげる。」

「ありがとうございます。」

「いいって。じゃね。」

言いつつアマテラスをはじめとした皆がそろつて上に通じるエレベーターに向かっていった。

俺はといえば、何とかと問うこともできずにその場に立っていた。俺ちらへと言いつつもノルンが先導しながら前を歩き、ヴェルザンディとスクルドは俺の両脇を固め、ウルズが後ろからついてくる。いつの間にか逃げられない包囲網の中にあり、おとなしく扉のある方へ向かっていく。

「さて、ダイスケ様。」

「ちちらへと言いつつもノルンが先導しながら前を歩き、ヴェルザンディとスクルドは俺の両脇を固め、ウルズが後ろからついてくる。いつの間にか逃げられない包囲網の中にあり、おとなしく扉のある方へ向かっていく。

イグドラジルがにやりと笑ったのは気づかないふりをした。

連れて行かれたのはどこかのホテルかと思つ場所だった。

そういうえばさつきホログラムだと言つていたのになぜ触れることができるのだろう。答えは、

「ノルンとイグドラジルとアマテラス様の研究の成果です。最初は魔物化した人々を救うために精神や魂といったものを特殊な魔力の塊に入れ

、新しく体を構築させ正常化させようという試みから始まったもの  
です。私たちノルン下の3人は思考のための擬似精神があるとはい  
え、もともとはノルンの一部でした。ノルンという人の腕や足のよ  
うなものです。」

「今こるとこいりとまづまくいつたんだ。」

「いえ、人は心臓やその他臓器を意識して動かしているでしようか？そういうことと同じで、魔力体は体を作ることはできるものの生きることはまだできていません。私たちはそういう自動的なことを本体に任せ、ある意味端末として存在しています。ですから実体化しても本体の制御範囲を超えるところには行くことができません。」

「なるほど。難しいことはよく分からぬけれど上手く行くといいね

「ええ、頑張ります。そしてダイスケ様の疑問もそういうふたものとあまり変わりありません。」

גָּדְרַתִּים

「体が魔力体を肉体と同じように思い込んで使っているためです。」「どうすればいいのです？」

卷之三

10

ふう……。

「どんなことをしたかは」想像にお任せするが、なんでも基本的欲求から細かく体の状態を紐解いていけばいずれは魔力体とはどんなものか体が理解するらしい。もつと慣れてくれば翼で飛べるかもしれないという。オベロンやティターニアの羽はあれは魔力放出が目に見えている状態だということだ。

落ち着いてお茶など飲んでいる所にスクルドが腕輪を差し出した。

「管理者用の腕輪です。アマテラス様にも同じものを先ほどお渡しました。」

「ああ、さっきの。」

などといこいつ受け取りつけてみる。と、収縮し腕にぴったりと収またた。

「すごいな、これ。金属じゃないの？」

「元はプラチナですね。身分証明用に作られたアイテムです。レプリカがこの世界にもあるようですね。専用マジック装置があるんでしょう。それからこれも。」

「4連リングだね。」

「腕輪はノルン、リングは個別に私たちにアクセスするためのツールです。それから全員の承認がないと外れませんのでよろしくお願ひします。」

「了解です。こちらこそ色々いたらないと思いますけど、今後ともよろしくお願いしますね。」

「こちらこそ。たまには遊びに来てくださいね。」

「上から時間がかからず直通になればこっちに部屋を持ってきても

いいですねえ。」「

最優先で。」「

あはは。頼んだことも頼むよ?」「

私たちの同時並行処理を甘く見ないほうがいいですよ?それにダイスケ様の温もりが、さらに私たちの創造主の血縁者であることも含め、その方と同じ時を過ごし、上手くいけば想像の中にしかなかつた一緒に町を歩く、誰かと一緒に食事をするという行為ができるのであれば寝る間も惜しんで研究するでしょう。」「

睡眠が必要なの?」「

言葉のあやです。」「

そつか。」「

では一応使い方を説明いたします。」「

使い方なんてあるの?」「

ええ。腕輪は私たちに向けられた思考及び、呼びかけられた場合にその時の問い合わせなどに沿つた者が対応いたします。反応は基本脳内へ直接おこります。それから危険がある際はダイスケ様の魔力をお借りして障壁を開いたします。そしてリングですが、1本だけ色違いのリングだけは引っ張ると大きくなります。そこからマジック機能が使えます。ただ一般的なマジックと違い、スクルド管轄内の専用倉庫から物を行き来させるという機能になります。武器等、使わないときにしまつておいたりもできますし、食料も貯蔵できます。何かを手に入れたときに保存することもできます。そして厳密には元素等を分析し、保存という形になりますので、複製も可能です。ただし、生き物だけは無理です。そのままを元素分析しコンピュート保存しますので当然姿形は同じですが生きてはいません。それだけご注意ください。」「

ふうん。一応理解したよ。ただ、なにがあるか分からぬからもし何か些細なことでも心に引っかかつたらそのつど教えて欲しい。」「ダイスケ様はお優しいのですね。」「

そう?」「

「私たちには厳密には心が存在しません。精神に似たものがありますが、それは特化運営のために必要な最小限のものです。それでもダイスケ様は私たちを心ある者と扱ってくださいます。私たちはダイスケ様とアマテラス様の腕輪を通して触れ合う人や魔族の心というものを理解していくのでしょうか？ダイスケ様やアマテラス様に愛想をつかれることはないでしょうか？」

「それを怖いと思うんならかなり人に近づいてコトだろうね。」「そうでしょうか…。」

「もし言い過ぎたと思つたらあとで謝ればいいんだよ。俺は結構いい加減な所があるのであまり色々言わても気に病まないし。顔を

のないのが残念だけど、俺の孫もいいもの作るねえ。

「分かりました。」

「いやあ、もう少し魔力体に慣なせてから戻るか、まーつ。

卷之三

100

「じゃあ、開発のめどが立つたら連絡下さいな。」

「分かりました。護身武器はどうしましょう。」

「自動障壁は基本的に網状です。」  
「とも調べてみて強度に問題ないなら一般向けに何か考えよ。」

「網？」

「ええ。便宜上障壁と言つてはいますが、強度の高い糸を編んだような状態です。切つ先のあるものや速度の高いものは当たる一点に高密度で展開、魔法等の広範囲系はゆるい網状にして魔力自体を遮断、効果が体に及ばないようにします。」

「ピンポイントバリア？」

「反発力で打撃戦にも手や足に展開すると効果あります。」

「ほにゃらりあたーつくてか。」

「一般にも即時対応できますが。」

「でも護衛の仕事してる人とかの給料奪うわけにもいかんでしょう。要人警護用にしよう。本人たちが何かのきっかけで発展していく分にはいいんだ。納得するだろうし。ただいきなりレベルの違うものを持ち込んだときの反応とかが怖い。」

「そうですね。気をつけます。」

「よろしく。じゃあ戻るよ。」

「また来てくださいね。暇がありましたら他の研究階層も一応目を通してくださいです。」

「うん。分かった、覚えとく。」

見送りを受けてエレベーターに乗る。

彼女たちも最初と違つてかなり会話とかも打ち解けた。だんだん人に近くなっているんだろう。いいことだと思う。これからすれ違いや喧嘩もあるかもしだれないので、上手くやっていけたらいいな。

そんなことを考えながら地上に戻ってきた。一応地上でシステムとリンクしているか腕輪も試したし、魔力体にも慣れてきたし何とか自分の守りは大丈夫だろう。これからは自分と他の人を守れるようになればいい。

食事の時間には早かつたがふと思い立つて食堂に来た。

食事の準備に取り掛かるうかと言う所だ。

マジックを試すならその充実度から見ても食材の方がいい。失敗した時のことも考えていつもの食事とは別に場所を借りて試してみる。簡単でいいものを。豚肉、ジャガイモ、人参など出してみる。

マジックの観点から、ある程度大きさを指定して取り出せるらしい。皮などもむいてあつてありがたい。

肉を炒めた後、野菜と一緒に鍋に入れ水を入れて煮る。ついでにここにはない白米も出して腕輪の指示通りにご飯を炊く。

最後はカレールーだ。大融合事件の直近のカレールーは研究もかなり進んでいて2010年辺りよりも手軽でいい味を出せたらしい。俺も楽しみだ。

なかなか失敗のしようがないメニューではあるが、上手くできた感じでうれしい。

まわりで食事の支度をしている人たちも今まで感じたことのない匂いなのか、時たまこちらをうかがつたり鼻をひくひくさせている。味見をしたいという人がいたのでさせてみると辛くて食べられないと言っていた。

甘口なんだけどなあ。米と一緒に食べるとまた違うかな。最悪1人で食べればいいか。

食事時になり、みんな集まってきた。

アマテラスも来たようだ。アマテラスもアメノトリフネも友魔の人気者だ。当然だが。

そのアマテラスが何か匂いをかぐ仕草をしていく。どうかしたのかと尋ねると、

「カレーの匂いがする。」

「食べたことあるの?」

「ない。けどボクの中にある天照の記憶にあるのだ。食べてみたいのだ。」

「いいよ。」

「ほんとに? カレーがあるのかつ?」

「あるよ。さつきマジック使って作ってみた。」

「じゃあすぐ持つてくれるのだ!」

「自分のことは自分でしろよ…。」

といいつつも鍋を持つてくる。さつきついでに出した福神漬けも忘れずに。

と、そこへユリカさんが来た。

腕輪と指輪を見るなり誰からもらつたのかと執拗に聞いてきた。アマテラスにカレーをよそいながらシステムのことをかいつまんでも話す。地下にどんな施設があつたかという程度だ。

そして、

「ちょっと反則気味に便利になつたからね。魔物だろ? ウィルスだろ? 敵じゃないな。」

ウィルスのくだりはユリカさんだけに聞こえるようにな。

ユリカさんは一瞬これ以上ないほど口を大きく開け、驚愕の表情を作つたが、すぐに泣きそうな安心したような表情になつた。そして一言加える。

「まかせといて。」

そしてユリカさんがなにか言い返す前に、一緒に食べるかと聞く。

「これは何ですか?」

「カレーっていうもの。」

盛られたお皿からカレーのみスプーンですくい口にする。

「からい…。」

「い）飯とまぜてみて。」

「こんな白いご飯は初めてです。あ、あんまり辛くない。  
よしよし。ユリカさんが大丈夫ならみんなも平氣かな。」

「ダイスケさん、これおいしいです！」

ユリカさんの一言がきつかけになつたのだろうか、遠巻きに眺めていた人も寄ってきた。

最初は少しのカレーに大目の白米。普段玄米が主流のここの人々は白米のやわらかさとその味に驚いている。白米を塩や醤油でバカバカと食べているのはガクさん。

カレーは特に若い人、この世界では生きた年だけで言えば100年位でも十分若いんだが、そういうた若い人により好評だった。

人型の友魔も香辛料の塊のカレーは舌への刺激や独特の味と香りが面白いいらしく何かうんうん頷きながら口にしていた。

この世界の人々は健啖だ。魔族がほぼ何も口にしなくても生きていけることと比べてしまうのかもしねないが。

あつさりカレーと白米の鍋は空になつてしまつた。

煮込んで2・3日たつとまた味が変わつておいしいのにとつぶやくと皆からもつとたくさん作らないからいけないと逆に怒られてしまつた。

今度はたくさん作りましょうかね。

次も作ることを約束して楽しい食事は終わつた。

さて、食後はユリカさんの話だろう。ウィルスからなにかされたんだとは分かるが、対応のやり方が思いつかない。

腕輪経由で個人、国家限らずの嫌がらせ及び仕返しの方法と、それに伴うアイテムを開発、用意するようお願いする。

一般の人々にだけは被害が行かないよう注意を払つてもらうが、当事者にはそれなりの報復があつてもいいだろう。

皿には皿を、歯には歯を。

システムにも話をきかせるためと顔合わせを兼ねて地下に向かうことにする。

「あれ？ 扉が変わってる。」

児童キッズルームから食堂に行く扉がごつくなっている。腕輪からの情報で権限のないものは入れないようにしたらしい。

仕事の速いことだ。

食堂と管理室を抜けエレベーターに乗る。エレベーターの扉にも権限チェックがあるそうだ。  
初エレベーターのユリカさんとシン君は浮遊感につらしありにおなかを押さえていた。

「ほんばんわ～。また来たよ～。」

「どちらの方は？」

「ほむらサンカイさんとツバキさんの娘のコリカさんと息子のシン君。こちちはノルン。あとあの大きな木はイグドラジル。」

「お見知りおきを。」

「ほむらこね。」

「他の3人は？」

「入り口等の整備をおこなつた後、それぞれの特化研究に入つります。呼びますか？」

「わざわざ呼ばなくていいかな。こっちの会話を一応聞いておいて何かあれば発言するようにお願いするよ。」

「分かりました。」

マジックでお茶やお菓子を出しながらコリカさんの話を聞く。

「大丈夫？ 話せる？」

「大丈夫です。お母様に話ができたとき、1人で抱えなくてよいことが分かりました。ご迷惑をおかけしますが聞いてください。」

「迷惑だなんてとんでもない。子供は大人を頼るものだと思うよ？」

「もう子供ではありません！ ダイスケさんももつと親密にわたしを呼び捨てにしてくれてもいいと思いません！」

「はいはい、考えておくよ。」

言つていることが支離滅裂だったがスルーし、何があつたのか聞く。要約するとこうだ。

半年前のウイルスとの交歓パーティーでつい気を許したある貴族の息子にちょっと目を離した隙にペンドントに睨のようなものをかけ

られたらしい。外せなくなる呪とその貴族から一方的に通信が入ってしまう呪だ。

通信といつてもあまりひねりのない愛の言葉と呪を消すかわりに隸属しろという脅迫じみたものと両極端なものでいまいち相手の心のうちがつかめない。

ミカドにいる間はティエリニアが通信をほとんど阻害出来ているようである。

が、最近強力な魔力でも用いたのかたまに声が聞こえることと、次の交歓パーティーが来月に迫った事情があり、少し気に病んでしまい召喚に

て配偶者を決めてその貴族と決着をつけようとしたということだ。貴族とはウィルス王家に近いこともあり、ミカド国との関係も考え、サンカイさんやツバキさんにも相談できなかつたようだ。

最後の方は半分涙声になつていた。

「ウルズ呼んで。」

「ここに。」

ぼうつとウルズが現れる。

「土地調査を少し変更、最優先でウィルスについて調べて欲しい。」

「衛星以外では今の所ウィルスを調査する方法がありません。」

「どうしたらいい?」

「衛星を介したリンクシステムを構築する必要があります。私たちの分身をウィルスの大地に置き、そこを拠点として調査する必要があります

。数日かかるかもしません。」

「外国屋のオヤジに頼んでウィルスに先行してもらつか。持つて行くのはどんなもの?」

「これです。」

手のひらに乗る程度の一見ただの種だ。

「種？」

「大地に埋めることでアメノトリフネ様の魔力を分けてもらつて成長、地下深くに拠点を作成します。」

「わかつた。サンカイさんにも許可がいるかもしれません。」

「いいだろう。ユリカのことについてだ。労を惜しむ気はない。」

「ありがとうございます。それからノルン、呪の解除の方法は分かること？」

「相手の血液を用いた呪としか…。すみません。ミカドとはかなり魔力形態及び使い方が違うためと思われます。」

「仕方ない、何とかできる手は打てるだけ打とう。そういうわけでツバキさん、お手伝いは少し先になります。」

「いいわ。今はユリカのことが先決だもの。」

「我らに何か出来ることはないのか？」

「白虎やケルベロスは向こうに行つたら魔物と間違われない？オベロンやティターニアは羽さえ何とかすれば『まかせそうだけど。』

「否定できんな。」

「ではその間の人々の心を安んじてくださいな。」

「承つた。」

「みんな、『ごめんなさい…。』

ユリカさんは泣き出している。

「ユリカさん…。誰か困っている人がいたら助けてあげたいと思う？当然出来る事出来ない事があるだろうけど。」

「…もちろんです…。」

「じゃあ、俺のときはようしきね。」

「うふつ。わかりました。」

少しは落ち着いたようだ。笑顔も見せてくれた。

よし。見てろ、ひねくれ貴族め。

## 第10話 ウィルスへの準備

息が苦しい…。

顔に何か巻き付いている。だがなぜか燐々と太陽が照らしているのがわかる。

そして徐々に意識が薄れていった…。

「うわっ？！」と田が覚めた。が、声に出たのは「もがっ？！」だつたが。

なぜか首があまり動かせないし、目の前には薄い布のようなものがあり視界を覆っている。

パニックになりかけたが、以外にも顔を覆っているものがやわらかく危険ではないと感じたので少し落ち着いた。

冷静になつて、よくよく見てみれば、無理やり右に顔を向かされ頭を誰かに抱かれている。

なぜか左手が動かないのなんとか動く右手で田の前の柔らかなモノをつついてみる。

「あんっ…」

胸か…。見えないが左手側にも何かありそうだ。

いい加減生理現象的にもまづくなってきたのでどうとかしないといけない。

と、

「お田覚めですか？」

「え~と、この声はティターーーア?」

「ええ。」

「これ、だれとだれ?」

「まあわかつて~いると思うけど、アマテラス様とコリカですよ。」

「なんでティターーーアがいてこんな状態に?」

「私にはアマテラス様を止める事はできないわ。」

「だよねえ。ちなみになんで俺はこんなに好かれるんでしょう?」

「さあ。直に聞いて下さいな。」

「ふ~む。」

まあ考えて仕方ない。

遠くで朝の鐘も鳴つてることだし2人を起しそうか。  
手をわきわき動かしてみる。

くすぐつたいところにでも当たったのか寝返りでもうつたのか左手  
は自由になつた。

頭を抱えられるのをなんとかしようとつづつと下がつてみると  
相手も追つかけてくる。

ゆつくりではダメかと一気に頭を引き抜きつつ起きベッドを離れる。

頭を抱いていた手が何かを探すように動いていたので枕をはさんで  
やつたら収まった。

一息ついて眺めると、頭を抱いていたのはアマテラス、左側で

俺の腕を取つて眠つていたのはコリカさんだつた。

昨晩は少しは落ち着いたとはいゝ、泣くほどの中白をしたコリカさんを慰める意味も込め、急でまだ部屋のなかつたアマテラスと一緒に眠ると言つていたはずだ。

ティターーー亞にどうしたのかと聞いてみた。

「アマテラス様がけえきと言つものを食べたいとおつしゃつたのでアメノトリフネ様が出したの…。」

「もうなんとなくわかつた。どうせブランデー入りのスponジケーキだつとかつてオチだろ? んで暴走と。」

「ぶらんでえとかすぽんじけえきとかの意味は分からないけどお酒の入つたお菓子だつたとかで…。」

「わかつたわかつた。で、どつちが先にここに来ようと言つたの? 「さあ? わたしは隣の部屋で簡易ではあるんだけどアマテラス様の寝所を作つていたら2人とも飛び出して行つたから…。」

「それにして、参つたね、これ。」

「どうするの?」

「朝食もあるしそろそろ起こさなきやね。男なら水をぶつ掛ける所なんだけど。さすがにねえ。着替えてくるからティターーー亞頼んだよ。」

「はあ…。」

「で、どうしてこうなつてているの?」

着替えから戻つてみると、俺の代わりに抱き枕にされているティタ

ーーアがいた。

「た、助けて…。」

「俺のことを助けなかつた罰もあるんぢやないの？」

「だつてダイスケは気持ちよさそつたし…。」

「うん、否定は出来ない。夢見は悪かつたけど。じゃあ仕方ないな、  
びひょりか…。」

するどがやがやと部屋の外から聞こえてきた。ナジャとリリムとネ  
コマタのパーティか。

案の定の3人がノックもせず部屋に入つてくる。今日もお遊戯会で  
俺を起こしたかったのか少し残念そうだ。  
でもちようどいいからと3人にベットで寝ている人を起こしてくれ  
るよつにとお願ひする。

「ちよ、わたしはもう起きてるんですけど…。」

ティタニアがなにか言つてゐるが特に反応せず軽く耳をふさぎな  
がら部屋の隅へ移動する。

ちやかぽいぢやかぽいどんぱふぱふじやーん！

「おお、バリエーションが増えてる。」

それによく見ると硬い魔力で筒を作り、筒の端は多少柔らかい魔力  
の膜でふさぎそこを叩いている。きちんと魔力体として覚醒したた  
めに見えるものだが、まんま太鼓のよつだと思つた。後はリリムの  
羽を硬質化してシンバルの代わりにしたりと上手くいけば魔力で楽  
団も作れるのではないかと思つた。

そついえばこの国の娯楽はどうなつてゐるんだらつ。イクサの町には賭け試合があると聞いたが、トランプや将棋やオセロとかの類は  
あるんだろうか。無ければ開発していくのもいい。

やがて絶え間ない騒音。アマテラスが田を覚ましたのかむくつと起き上がり、

「う、る、や～い！」

と怒鳴った。アマテラスの怒声にユリカさんも田を覚まし、何とかときよろきよろしている。

怒鳴られた3人はどうと、アマテラスに怒鳴られたせいか、とたんに田に涙を溜め、泣き出しちゃった。

「うわ～ん！」

「ふええ～ん！」

「ひっく、ひっく…ひづ。」

三者三様の泣き方にアマテラスも困惑してしまい、「ごめんね、よしよし。」などと3人をあやしている。外見は小娘のようなアマテラスもこのときばかりは魔族から父といわれている存在そのものだつた。

白虎やケルベロスにもこうして接したことがあるんだろうかとふと思つたら、あのかたつくるしい物言いをする白虎たちにそういう風に接する場面を想像してしまい忍び笑いがもれた。

と、不意にアマテラスがギラリと視線をこちらに向け、そもそも怒つたような声色で聞いてきた。

「ダイスケ、なんでそこにいるの？」

「ここ、俺の部屋だから。」

「なんで起こしてくれなかつたの？」

「起きなかつたのはそつち。起こさうとしたティーター二アまで抱き枕にして寝てたじやないか。」

「うつ…。」

「不満があるなら鐘の音できちんと起きらわれるよ」になつてから聞こうか。」「うへ。」

「さらば言つながら、」『う』行行動は不安から来てるんだと思つけど、そんな不安を植えつけたアホ貴族にぶつけるんだね。」「ちくしょー。貴族許すまじなのだ！」

「はいはい、女の子はあまり汚い言葉を使わなにようにね。じゃ、ユリカさんも『飯にいくよ？』

「まだ寝起きでぼやぼやとしていたユリカさんにも声を掛けろ。ふと思つたことがあつたのでティターニアに聞いてみることにする。」「ねえ、ティターニア、ユリカさんてもしかして自分で起きられな人？」

「ええ。いつもわたしが起こしてますよ。」

「やつぱり。まだ子供か。」

「あたし子供じゃないもん！」

「まだ完全に目が覚めていないのか、駄々っ子のようだ。」

「そういうことはまず一人で起きられるようになつてからにしようね。さ、『ご飯に行くよ。アマテラスも。ナジャにリリムにネコマタも大丈夫？アマテラスが寝ぼけてただけで悪気は無いから許してあげてね。』

「わかつたー。」

起こしに来た3人もどうやら落ち着いたようすで、皆でざるざると食堂に向かう。

食堂に入るなり、カリンが声を掛けてくる。

「ユリカ様、どこにいつてたんです？ティターニアも。」「彼女の友魔、リリムが口を挟む。」

「ダイスケの部屋でアマテラス様とティタニアと一緒に3人で寝てたよ？」

一  
な  
に  
つ  
?

—なんですか？

サンカイさんとツバキさんが声を上げる。なんか面倒なことになり

「ボクがユリ

「なるよ<sup>う</sup>なことではないよ。」

「二二二。一、二、三。」

「うむ。」

助がつた

「……………いたさぬすー。」「……………」

部屋で出かける準備をしている。今日は町をまわり、外国屋のオヤジに頼みごとをしたり、旅の装備を整えるためだ。

エリカさんやシン君もウィルスに行くので結構な大所帯になりそうだ。アマテラスも俺と同じ黒髪を除けばここらの人と変わらない格好で出てきた。アメノトリフネは小さくなつてアマテラスの髪留めと化している。なかなか似あつているのでほめると顔を少し赤くしていた。アメノトリフネは外觀がまんま船なので表情は分からないが悪くなさそうな感じを受けた。

支度も終わり、城の入り口付近でどこから行くかなどとワイワイヤつていると、町の方向から1人の男がやつてきた。友魔を連れていないところを見ると魔導師系か。

その男はユリカさんやシン君を見て一礼して名乗った。

「今日からミカド代表となります、ケイと申します。」

「シユウさんの代わり?」

「そうです。シユウを師と仰ぎ勉強してまいりました。」

「シユウが師匠なら安心だね。」

「ボクはシユウって人を知らないけど、ケイと言ったかな、キミは信用できる感じがするのだ。」

「あなたは?」

「ボクはアマテラス。」

「おお、あなたが。わたしには友魔はいませんが、病院に来る魔族から聞いたことがありますよ。父という方だと。どこかにお籠りになつたと聞いておりましたが。お出になつたんでしょうか。」

「うむ。」

「そうですか。それなら魔族が名を明かしているのもうなづけます。」

「そうだったっけ?」

「ええ。出てきていないうちは軽々しく名を呼ぶなど全魔族にティンロン様からお達しがあったと聞いていますよ。今こうしていくても魔力の量と質に圧倒されています。」

「アマテラス、お前さんってえらかつたんだな。」

「ふふん。えらいだけじゃなくて強いんだよ?…どうだ、まいつたか。」

「ちつとも。まだまるで子供じゃないか。」

「なにおつー。」

「まあまあ、そちらの方は?」

「俺はダイスケです。残念ながら歴史的にこの子の祖父に当たるよ

アマテラス

うです。」

「歴史的に…ですか。」

「詳しい話はサンカイさんにでも聞いてください。コリカさんの召喚によって呼ばれたのが俺です。」

「なるほど。少しだけ話を聞いています。サクラが最近よく名前を出す方ですね。回復魔法を一段と発展させたと。」

「サクラさんが？」

「ええ。少し妬けてしまいますよ。」

「そうですか。俺はここに来てまだ数日ですんでそういう感情はなかなかまだ出てきません。ですから頑張ってください。」

「あはは、ありがとうございます。」

「しいて言えば、少女を扱うよにしたるびつです~あまりそれでいい感じがしましたから。」

「それは良いことを聞きました。そうしましょ~。」

「では『今後ともよろしく』」

「ええ、ひかりん。姫様、王子様もまた。」

「ええ。」

「うん。」

「ねえダイスケ、さつきの挨拶、何か意味があるのか?」

「さつきの挨拶?」

「今後ともよろしくってやつ。なんかボクには言葉以上のニュアンスを受けたんだけど。」

「まあね。」

「あれか?」

「知ってるの?」

「古いゲームだな。」

「まあね。魔族と人が助け合って生きている世界にはぴったりだと思つけど?」

「やうか。そうかもしないのだ。」

ユリカさんやシン君、彼らの友魔のケルベロスやティタニアは『にゅあんす?』『げえむ?』などと首をかしげていたが。

さて取り留めの無い話などしながら最初の目的地である外国屋にやつてきた。ちょいと運よくオヤジが店をあけるところのよつだ。

「こんちわ、旦那。面白いものある?」

「へいらつしゃい。つてにいさん、つい先日来たばかりじゃないか。お、今日は姫様も王子様もいっしょですかい。どうぞじひこきに。といつても王子様にはちょいと早いものが多いですがね。」

「タバコは子供には売つていないよね?」

「当然ですよ。ガクさんからも通達がありやしたし。」

「それは良かつた。ついでと言つては何だけど、今度はいつウィルスに買い物に行くか聞いていい?」

「今日は来た客に欲しいもの聞いて、明日から向かおうと思つてるんですよ。ホントは来週のミカドとウィルスの顔合わせに合わせて行こうと思つたんですがね、かちゅーしゃが欲しいという客が多くて。早めに仕入れに行こつかと。こないだの姫様の姿がいい宣伝になります。」

今日も折角だからとカチューシャをつけているユリカさんが顔を赤らめる。

「似合つてゐるから確かにいい宣伝になるだろうね。ついでと言つては何だけど、これをウイルスのどこかに埋めてこれない?」

ノルンからもらった種を出して渡す。

「かまいませんが、危ないことにはならないでしょ？」

大丈夫だと太鼓判を押そうとした瞬間、店の奥から声がかかる。

「大丈夫に決まっているじゃないか、あんた。隣にいるのは父様、アマテラス様だよ！」

「あ、オトヒメじゃないか。ひさしひりー。」

「おお、女性型竜族じゃないか。浦島太郎で有名な。」

「ええ？あの浦島太郎？」

ユリカさんとシン君が食いついてきた。オトヒメもなれたものでそうだと告げる。

「そして竜宮城に来たのがここ。タロウってまんまだろ。」

「あつはつは。旦那はタロウって言つ名前なんだ。」

「まあな。別に悪い名前ではないと思つんだが、ここ（オトヒメ）が面白おかしく言つもんでな。」

「いいと思うよ。で、頼まれてくれるかな？」

「うちのかかあの親のアマテラス様の頼みとあつちやあ断れねえな。いいぜ。」

「よろしく。つて旦那はオトヒメさんと結婚してるの？」

「そうだよ。腐れ縁つてやつさ。強いし安心して旅ができるつてもんだがね。で、にいさん、どうに埋めてくれば良いんだ？」

「そつか場所が分からんと困るか。地図はある？」

「ちょっと待つてみんな。」

と地図を引っ張り出してくる。店の旦那のタロウさんとオトヒメの説明を受ける。

ウィルスは最初に向かつた人々が定着したのだう港近くのマリン部という所から徐々に町を広げながら発展し、マリン部西にセントラル、そこを中心として西にウェスト部、サウス部、ノース部と広がっている。ウィルス国はウィルスという町しかなく、～～部という表現で土地を分けているらしい。セントラルをトップとして順にマリン、サウス、ウェスト、ノースの順で貧富の差があるといふ。

特にウェスト、ノースのさらに西や北には広大な土地がある反面、魔物も多く、なかなか発展していないのが現状らしい。

ノルンと意識内で会話をしつつタロウさんとも会話をする。

『ノルン、どちら辺がいい?』

『貴族の動きを早くとらえるならセントラルですが。魔物などの動きもとらえるならばウェストとノースの中間がいいでしょう。』

「旦那はどちらへんに仕入れに?」

「たいがいはマリンで済んでしまうな。一般人はセントラルには入れないし。武器の系統ならばウェストやノースに売りに行くやつもいる。』

「セントラルに城壁はある?」

「ああ、でかいのがあるぜ。ただ市場は城壁近くまである。』

『ならばセントラル城壁付近に埋めてもらいましょう。もし武器を仕入れにノースやウェストに行く人と一緒になつたらついでに頼むようにして。』

『そうだね。』

「じゃあひとつは城壁の傍に埋めてくれないかな。ま、埋めるといつても種にしか見えないし、そこらの物陰に置いとく感じでもいい。』

『 リングを使い、さも袋から出した振りをしてもう一つの種といいくつかの金を出す。』

「こつちはもしウェストやノースに行く人がいたら頼んで欲しい。これが前払いの報酬。』

「こんなにもらつていいのかい?それから何か役人に聞かれたらなんて言つておいたらいい?』

「この食べ終わつた種だと言つてそちらに捨てれば大丈夫じゃないかな。』

急いで作った作り話をごまかすために桃をいくつも出す。種の大きさもそんなに変わらないだろう。

「こりゃなんだ？ 食えるのか？」

「皮をむいて食べてみたらいいよ。向こうで売つてもいいし、いや、あまり取れないから賄賂代わりのほうがいいか。ただ傷がつくとそこからあつという間に腐つていくから気をつけて。」

「そうか。金をもらつた上にこんなものまでいただくとは、しつかりやらなくてはな。任せておけ。」

「頼んだよ。じゃあもしウイルスで会えたなら食事でも。オトヒメさんもよろしく。」

「タロウの尻はしつかり叩いてやるから安心しな。アマテラス様もお任せくださいな。」

「うん。ここの人と魔族が結婚することはあまり無かつたからね。そのときにも盛大に結婚祝いをやるのだ。」

「まあ、ありがとうございます。」

「じゃあまたね。」

「ええ。」

市場など適当にぶらつき旅用の服や保存食などをあさる。正直マジックのおかげでいろいろなんだが、あまりマジックのことを広められないために仕方なくという感じだ。

武器屋も覗いてみる。一応今の世界の装備を確認するためもある。武器に関しては魔族のアマの町にすむドワーフなど地系魔族のものが高級品とされ価値も性能も高い。

戦闘スタイルとしてミカドは友魔との連携でどちらかが障壁で守っている間に弓矢や炎や風の魔法で攻撃。ウイルスは魔力の開花しな

かつた兵士が魔術師を守つてゐる間に大詠唱魔法を練り上げ攻撃。魔族は力の強いものは反則的に強く魔法も打撃も効かなかつたり反射したりと魔物も逃げ出すほどの有様だ。

そんな魔族が半分趣味のように希少金属を使い魔力を注ぎ武器や防具を作り上げる。正直これが安価で出回ればツバキさんの研究も意味がなくなつてしまふのだが、生きていくために剣を作るのではない彼らは年に一本といつよくな程度でしか売らないし作らないので価格はうなぎのぼりだ。

そんな武器屋だが、安易な皮鎧や鎖帷子といった防具や鉄製の剣などは人が生活のために作ることもありそれなりに安くおいてある。武器や防具のことはよく分からぬがノルンに言わせると数合打ち合つたらかけてしまう程度だという。特別な品はドワーフなどがたまに置いていき、数日もしくは数ヶ月かけてオークションのように一番高い値をつけた者が買っていくシステムのようだ。結局は商人あたりがウイルスにからに高値で売りさばくためにいい値をつけて買つていくようだが。

今日はそんな風にアマの町から品をおろしてこられたドワーフの男と知り合つた。

その男は無造作に武器屋の特別品展示コーナーに武器を並べると、武器屋の店主となにやら話をしているところだつた。

ドワーフは目をこれ以上なぐくらに開きこちらにすつ飛んでくるとアマテラスの前にひざを着き涙を流し始めた。「おかえりなさい」と。

「迷惑かけてすまない」とアマテラスが言うと、ドワーフはアマテラスにすがりつき大声で泣き始めた。アマテラスはもともと世界を覆うほどの魔力を持つてるので、引き籠りから出てきたことは魔族皆が感じ取れることではあった。だが、城から出るときに後光を

消し、魔力を弱め歩いていたので友魔にもあまり気にとめられずここまで来たのだ。

だがどうもこのドワーフには隠せなかつたらしい。ドワーフの泣き声につられて出てきた魔族や友魔も集まり、うれし涙を流しながら口々に「お帰りなさい」と言つていた。一緒に籠つていたアメノトリフネは今は少しだけ大きくなり、アマテラスと同じようにみなから喜びの声を受けていた。

アマテラスだと気がつかずにすれ違つた魔族など、ケルベロスやティターニアに「なぜ教えてくれなかつたのか」と詰め寄られていて困り顔だった。

完全に蚊帳の外の俺とユリカさんとシン君で話す。

「やつぱり偉大なひとなんだなあ。」

「そうですね。」

「僕もあんなふうになれるかなあ。」

「そう思つて頑張つていけばきっとなれるよ。」

「うん。頑張る。」

もみくちゃにされ、胴上げでもされかねない勢いの中にはさすがに入つていげず、かといつて放つて他の場所に行くわけにも行かなかつたので武器屋を物色することにする。

武器屋のオヤジとも話をする。

「うちのドワーフが何かしたかい?」

「ああ、オヤジさんの友魔?」

「そうだよ。普段はアマの町に仕入れに行つてもらつてるのさ。」

「その間は大丈夫かい?」

「魔物のことかい? それなら大丈夫さ。アマの町まで行くのにまずは魔族のフェニックスが迎えに来てくれるし、向こうで武器を作つている魔族は地竜だつたりジャイアントだつたりするのさ。そこら

の魔物じや相手にもならなによ。」「

「オヤジさんの方は?」

「オレもかみさんももともと活躍度30魔物3の冒険者さ。かみさんの友魔もいるしな。ちっこいハイピクシーだが実力は折り紙つきだ。」

「活躍度?」

「なんだ、知らないのかい?冒険屋の段位さ。後で行つてみな。ミカドの町から出るなら行つて損はないよ。荷物を見たところ町から出るようだしな。」

「ありがと。行つてみる。そうだ一つ聞きたいことがあつたんだ。前から少し気になつていたことを話す。

「こう、まつすぐな棒に細い穴を開ける道具つてある?もししくは作れる?」

「ないことはないがそこまで長いものは無いな。」

「で、細田の木に穴をあけて、その穴に炭と粘土を混ぜて流し込んで固めたものつて作れない?」

そこでノルンから通信が入る。

『鉛筆のことですか?』

『うん。』

『こちらで出すことも出来ますが。』

『それじゃあ押し付けになっちゃうじゃないか。俺は当然ノルンの出してくれたものを使うけど。』

『ならばいいです。』

「そんなもの作つてどうするんだ?」

「それを削つて使えば筆の代わりにならないかと思つてね。」

「へえ。面白そうだな。今度試してみよ。」

「出来たら呼んで欲しい。城のダイスケといえば通じるから。」

「ああ、あんたが姫様の旦那かい？」

「は？どこからそんな話が？」

「そうです！わたしの夫になる人です！」

「ゴリカさん、ややこしくなるから…。で、オヤジさん、それは誰が？」

「ガクのやつが飲み屋で姫様が召喚をしてダイスケって人が出てきたって大声でいつとつたぞ？」

「そうか、ガクさんがねえ。」

「まあそななおつかない顔するなよ、にいさん。ん、王子様、何かいいものがありましたかい？」

シン君は先ほどドワーフが持ってきて並べた剣に釘付けだ。

「ダイスケ兄ちゃん、これ、すごいよーものすごく軽いし…。」

「どれどれ。」

ノルンに分析してもらひ。魔力と金属が融合し物質化したものだといふ。特に刃の先は魔力が濃く、刃こぼれを起こしても魔力充填か最悪魔力のあるこの世界だからこそだが数日おいておけば刃が元通りになるといふ。特に自身の魔力を通すことにより重量も軽くなり使いやすくなるようだ。ただ魔力と融合しているせいでどんな金属かは分析できないといふ。元の地球上に存在しない物質のようだ。

「それは草薙の剣のレプリカなのだ。」

アマテラスがいまだに魔族に囮まれながら答えた。

「れぶりかつて？」

「ああ、ごめんシン。レプリカっていうのは元のものを真似たもののことなのだ。」

「じゃあこれの元になつた剣もあるの？」

「うむ。これなのだ。」

アマテラスは懐から柄だけのものを取り出した。

「これ？柄しかないよ？」

「まあ、見てるのだ。」

「ううと柄から美しく光る刀身が現れた。

「わ、すごい。」

「うむ。もともと草薙の剣はボクなのだ。魔力でこうして刀身を作ることも出来るし、刀身に水をかければ水の剣、火をつければ火の剣。いろんなことができるのだ。でもレプリカといつてもここまで魔力を刀身にこめることが出来るのはオモイカネくらいだと思うのだ。」

「ああ！忘れてました！」

ドワーフが声を上げた。

「この剣は献上用でした！おっしゃるとおりオモイカネ様がアマテラス様の復帰を喜んでミカドの王室に献上しようと。」

「また頑張ったものなのだ。簡単に作れるものじゃないはずなのだ。

「何年もかけた渾身の一振りだそうです。」

「そつか。じゃあシン、キミが持つといいのだ。」

「いいのつ？」

「サンカイには大昔に似た様なものを持つていてははずなのだ。王の錫杖だつたか。2つもいらないと思うのだ。シンがいい王になれるようにはそれはボクからの贈り物にしてあげるのだ。」

「ありがとう、アマテラスねえちゃん！ぼくいい王様になれるように頑張るよ！」

「うむ。ボクも応援してるのだ。」

「ホントの姉のようだね。」

「ええ、あたしも妬けちゃいます。」

「ま、アマテラスからしてみればみんな自分の子供のようなものだろ？」「いいんじゃないの？」

「そうですね。」

「それじゃ落ち着いたようだし、次に行こうか。」

「ええ。」

後ろ髪を引かれる思いで散っていく魔族にアマテラスは「また来るから大丈夫なのだ」と声をかけ、次の場所に行く。武器屋のオヤジから聞いた冒険屋なる所だ。

冒険屋に武器の直しを受けて納品に行ぐらしくドワーフに道案内してもらいながら歩く。アマテラスはティンロンという今現在魔族を治めているものに「元気でいる。魔物のことは結局どうにもならない可能性が高い、もしくはまだ時間がかかる。それからまたそちらに顔を出すから。」といった伝言を頼んでいた。

さて、冒険屋なるところについた。

よくファンタジーで使われるところの所謂ギルドといつものだらう。中に入ると人と魔族が半々でいるようだ。ここでもアマテラスとアメノトリフネはもみくちゃにされていた。

もう慣れたので放つておいてカウンターであるだらう場所に向かう。

「ええと、冒険屋について教えて欲しいんですけど。」

「分かりました。あら、あなたはもう腕輪を持っていますね。どういった用件でしょうか？」

困った。地下システム管理者とか言つわけにはいかないだろう。と、

『ノルンです。ゴリカ様の召喚者として名乗ればいいと思われます。

』  
『分かった、ありがと。』

「ゴリカ姫の召喚により呼ばれたダイスケといいます。」

「ああ、あなたが。」

「またか。出所はガクさんですね？」

「ええ、まあ。でもそれならば腕輪の使い方を知らずにいるのも分かります。他の地では身分証明として腕輪を持つ方もいますから。」

「そうですね。ではよろしくお願ひします。」

適当に相槌を打ちながら話を聞く。とりあえずその前にガクさんに報復の手段も考えなくては。

「ということです。」

説明するところだ。

腕輪に所々開いている穴に名前や住所を刻印した本人の認めがないと変更できない宝石、銀行代わりにお金を預けるための数字が変動する特殊魔術の入った宝石、それから活躍度と呼ばれる所謂レベルのようなものが入った数字が刻印された宝石をはめるのだ。特に銀行は金銀を取りするここ冒険屋の特殊な腕輪とリンクして数字が変動するらしい。活躍度は各々の数字の入った宝石をレベルにより入れ替えるだけだが、その横に小さく4つの穴があり、そこに受けた仕事に応じた小さな宝石を集めていき、5個を越えるとレベルが上がるという寸法だ。ちなみに生命活動がなくならないと外れない。冒険者が外に出た折、死者のものを持ち帰り遺族に渡すこともあるという。形見代わりにさらに腕輪をつけるものもいるらしいが。昔は銀行の残高が高すぎて仲間に襲われたものもいたらしいが、そういうことをする人は必ず最後は赤い月に惹かれるので逆に討伐対象になるそうだ。

依頼などは活躍度に応じてもらえる小宝石の数が違い、活躍度が高ければ少なくなる。どうも20を越えればかなり上級らしい。もう一つは魔物にランクがあり、どこのランクまで倒したことがあるか

というものになっている。街中の雑事を受ける仕事ではそちらは上がらず、討伐系の仕事は回つてこない、もしくは受けられないというシステムだ。ちなみに魔物1が最上である。魔物1はめったに見られないというか会つたら死ぬとまで言われているもので、赤い月により魔物化した魔族だ。もっとも元魔族なので、アマの町というか魔族にひかれてフジサンの北の方にしか出ないようだ。魔物2は異形系のものらしい。ノルンからの情報では工場等から抜け出したロボットが知能を持ち、特に冒険者の金属系を狙うそうだ。危険だが、ある意味装備を捨てれば助かるを考えると魔物3の方が恐ろしいようだ。

武器屋のオヤジが言つていた魔物3、これは魔物化した人間と、それから子育て中などで特に凶暴化した熊などの魔物にあたる。するとあのオヤジは相当な腕を持っていることになる。人は見た目で判断してはいけない。

ちなみに倒してもいい魔物の換金部位、牙や皮、角など持つても魔物段位は上がらないらしい。どういうわけか腕輪自体が戦い 자체を記憶、魔物段位を自動的に上げるそうだ。

さすがは元超科学地球のものだ。当時の地球でも身分証明他、へたしたらGPSにて場所が完全に特定できたり携帯の代わりだつたり犯罪の割り出しや冤罪の証明などになつていたんだろう。ノルンによれば当然だそうだ。ただ何にでも抜け道があるように、どうやって外したのか大融合を起こした者は誰一人として腕輪をしていなかつたという。

そして早速いろんな宝石をつけてもらう。アマテラスをはじめ、ユリカさんやシン君もつけることにしたようだ。

活躍度、当然0。銀行も0。魔物段位、外。なんとも面白くないが仕方ない。ウイルスにも同じものはあるのか聞いたら特に上流の身

分のものがつけていいるそつだ。コリカさんがなめられたのもそこにあるのかもしない。活躍度はともかく、魔物段位が上がるやつを倒して段位を上げておけばより効果ありかもしないな。コリカさんを危ない目に合わせるわけにはいかないが。そうだ、ウィルスに出来る前に地下に行って自動障壁を展開できるように改造してもらおう。ノルンも了承してくれたしこれで安心できるかな。

さて、帰り際、旅支度の服を買った所の傍に露天が開いていた。最初に来た時には無かつたものだ。お昼も近いしスルーしようかとも思つたが不意にアマテラスが立ち止まりそちらに行つたのでついていった。

「フレイア、久しぶり。」

「あ…、アマテラス様、父様…ふえ…う、ひっく…ぐすつ。」

「今日は泣かれてばつかりなのだ。どうしたのだ、フレイア？」

「父様…、シユテンドウジ様とデュオニユソス様が…、ひっく…お酒を買つてくるまで…ふえ…、帰つてくるなど…ふわつ。フレイアもがんば…えぐつ…たんだけど…。」

「あやつらか。アメノトリフネ、ティンロンにつないでくれ。」「カシコマリマシタ。ドウゾ。」

「おお、アマテラスの嬢ちゃん、久しぶりじやな。引きこもりはすんだのかの？魔物化の方はどうじや？」

「分かっているくせに聞くんじやない。魔物化のことはまだ研究中なのだ。それよりシユテンドウジとデュオニユソスに伝えるのだ。ボクがアマの町に行くまで反省してろとな。」

「ほほほ。やつらがどうかしたのかの？」

「これを見てもまだそんなことが言えるのかい？ボクも怒るよ？」

アメノトリフネから立体映像のように飛び出した龍が好々爺のような受け答えでしゃべっていたが、フレイアの姿を見て口を閉ざした。映像からですら噴出する魔力が見えるようだ。ノルンによれば世界と重なるアメノトリフネが局地的に重なりを強くするとこゝにして映像を行き来させることが出来るらしい。その分実体化している体は小さくなるようだが。

「シユテンドウジヒデュオニコソスを呼べ！そしてアマテラスの嬢ちゃんから沙汰があるまではしばらくアバダンにでもくれてやれい！」  
「ラクシコミはどうしたのだ？」  
「どうせやうりに向かつたよつじやの。波動をたぐつてあちこち動いているよつじや。」

「おと～さま～！」

「ちょうど来たようなのだ。ラクシコミにはボクから言つておく。  
「そいつかの。それでこちらにはいつ来るんじや？」  
「ちょっと急ぎの用が出来たのだ。ボクがこちらの生き残りの大人と重なったのは知っているだろ？その子孫であるこちらのユリカはボクの子孫も同じことなのだ。その身を穢したやからこまづはお灸をすえなくてはいけないのだ。」

「そつかの。ミカドの人間はすでに我らが同属と同じ。穢されたとすればだまつているわけにはいかんの。手を貸そうかの？」

「ううん、彼らには人としてやつた報いを受けなきやいけないと思うんだ。だから大丈夫。」

「まあお嬢がおればめつたなことにはならんじやね。」

「うむ。まかせておくのだ。それからそれが落ち着いたらそつちへ向かうから。」

「待つておるぞ。」

「うん。じゃあね。」

ゴンッ！

映像が切れた瞬間、抱きつこうと飛んできた人影がアマテラスの作った魔法障壁にぶつかった。

「お父様」。

さらに擦り寄ろうとするがなかなか魔法障壁は抜けられない。

「ラクシュミ…。フレイアになにか言つことは無いかな？」

「フレイアですか？」

フレイアはいまだ殻に閉じこもったように両手で視界をふさぎすすり泣いている。

「フレイアっ、どうしたのですか？もしかしてこの男に泣かされたのですか？…そここの男、覚悟っ！」

俺っ？と思うまもなくラクシュミが飛び掛ってきたがなんとかノルンの自動障壁がその攻撃を防いだ。障壁にひびが入つてしまつたが。

「人間にしてはやりますね、でも次は手加減しません。これでおわ

つ

ボクつと痛そうな音がした後、目をつむつてしまつた俺が再び見た光景は、頭を抱えているラクシュミと呼ばれた女性とその上で手刀をかざしているアマテラスだった。

「なにを勘違いしているのだ？これはラクシュミにも原因があるのだ。」

「わたくしにですか？わたくしはただ父様が出になられたと感じて急いで来ただけです。」

「シユテンドウジとデュオニヨソスの酒は？」

「飲みすぎないよう厳重に保管してあります。わたくしが。」

「ヤリが出てきた間の酒は？」

「もちろんあるはずがあります！」

「でも、やつらはフレイアに露天を開かせ酒を買って来いと命じたわけだ。」

「なんですか？では急ぎ戻つて叱らないと…」

「もうティンロンに任せたのだ。今頃はアバランの腹の中なのだ。」

「え？』

「ティンロンに任せたのだつ！」

「ティ…ティンロン様にですか…？わたくしまで叱られてしまつではないですか…どうしましょう？」

「どうしましようではないのだ。ボクはビリにこも行かないのに浮かれるからいけないのだ。町の皆だつてこっちへ飛んできたいのを我慢しているのが分かるのだ。今は急ぎの用事が出来てしまつたけどまた町に行くと伝えたはずなのだ。」

「たしかにそんな感じも…。」

「で、このせまなのだ…。」

「『めんなさい。』

「ボクこそすぐ戻れなくて『めんなさい』なのだ。でもラクシユミはもつと謝らなくてはいけない2人がいるのだ。」

「あ、『めんなさい、フレイア。それからその男の方。』

「俺はダイスケ。でも俺はいいよ。無事だつたし。そこのフレイアさんだけ、慰めてあげて。」

「ありがとう。『めんねフレイア、許してね。』

フレイアと呼ばれた少女もラクシユミという女性にすがつて泣いていたが、少しして落ち着いたのか泣き止んだ。

このままではなんだということでも、そういうの食堂でみなでお嘗じようところになつた。

アメノトリフネがサンカイさんにもつなげられるところとでお願いすることにした。つこでここにこの前うやむやになつた挨拶もしてお

く。」ここまで伸ばしてしまったのはある意味大人として恥ずかしい。

「アメノトリフネさん、ダイスケです。挨拶が遅れてしまつてすみません。」

「そういえばそうだつたね。ボクも半分忘れていたよ。」

「イエ、あめのとりふねデス。コンゴトモヨロシク。」

「こちらこそ。自分の子孫がご迷惑をかけたようすみません。」

「カマイマセン。今ハ人モテスガ、魔族ノイルコノ大地テイラレ、皆ガ幸セデアルトイウコトガ、ワタシノ幸セデス。」

「そうですか、ありがとうございます。今後ともよろしく。」

「おお、コリカ、どうした。」

「町でお昼をいただくことにしましたので『』報告を。」

「そうか、伝えておく。それからアマの町から書状が来て、剣を一振りいただけるそしだが届いておらんのだ。武器屋にでも聞いてもらえんか？」

「僕が持つてるよ！」

「シンがか？うーん、まあいいか。後でわしにも見せてくれ。それからだからと『』てあまり危険な』とはせんようにな。」

「うん。」

「よし。ではゆつくりしてくるといい。アマテラス様、ダイスケ、頼んだぞ。」

「はい。」

そういうて映像は切れた。ケルベロスやティタニアも白虎とオベロンから同じよに頼まれたようだ。「まかせておけ」などと言つている。

「じゃあお昼にしましょうか。ラクシユミさんもフレイアさんも一緒に。ヨリカさん、」こらのおすすめ教えてよ。」

「いいですよ、いきましょう。」

「おーい、アマテラス、いくぞー。」

「父様、ちょっとといいでですか？」

「なんなのだラクシユミ。」

「父様にあのような物言いをするあの男はなんなのですか？」

「あ、フレイアも気になります。」

「フレイアもか。ダイスケはボクの家族だよ。」

「家族？」

「ボクがこっちの世界の唯一の大人と重なったことは知ってるよね？その人が将来のダイスケの孫なのだ。ボクたちの世界と一緒になった大融合、その約1000年前の人間であるダイスケがヨリカの召還によってここに魔力体として呼ばれたのだ。だからダイスケはボクのおじいさんになるね。というのを除いてもわかるだろう、ダイスケの人としての性質と魔族としての魔力体の融合を。彼は人であり魔族であるのだ。それはある意味この世界では究極だと思うのだ、ボクと同じように。よつて人も魔族も彼に惹かれていく。そういうことなのだ。もしかしたらこれからこの世界の発展の鍵となるかもしれないほどに。」

「そうなのですか。」

「ふふ、まあ、ティンロンのオジジにはおもしろい人を見つけたと伝えておいてよ。そのうちつれていくからって。」

「わかりました。」

「おーい、アマテラス、おいてくれ。」

「今いくのだつ。よし、いくぞ2人とも。」

「はいっ。」

外での食事はそれほど城と変わらないものだつた。

これだけでも王家が散財していなのがわかる。いい王家だ。

そして女3人よれば姦しいとはよく言つたものだ。5人もいれば言わざもがな。

俺とシン君、ケルベロスは完全に蚊帳の外だ。

ふと話が途切れたので、フレイアにどんなものを売るつもりだつたのかと聞いてみた。

手渡されたものはセーターだつた。

「きれいだし、暖かそうだけど、さすがにこれだけ暖かい場所では売れないだろうなあ。」

「アマの町のように高い所ならまた違うんだけど、あそこにはなかなか酒を置いていないのだ。あそこ連中で酒をたしなむ者は大抵ミカドに飲みに来るが、物々交換のよつにして酒をもらつていく者がほとんどなのだ。」

「そなんですか。ウィルスはどうですか？あそこは結構涼しい所ですよ？」

「そつかユリカはウィルスに行つた事があるのだつたな。あそこは確かに涼しいのかもしれないが、魔族がいれば最悪魔物と間違われて攻撃されて命を落としてしまうかもしれないのだ。そんな所に同族を行かせる訳にはいかないのだ。」

「そうですね、すみません。」

「ユリカ、気にしなくてもいいのだ。1人でここまで下りてくるものにはそう弱いものはいないのだ。」

「ところでフレイアさんだつけ？これ何で出来て…、あ、いや材質

とかはいいんだけど、これ結構伸縮するんだなと思つて。もう少し薄い布状にしてもこれだけの伸縮するものは作れる?」

「はい、少し難しいですけどお。」

「それで下着作つてみれば?」

「下着つてなんですかあ?」

「え~、言いづらいんだけども。あの~、なんといいますか、女性の胸や男女に限らず下半身を隠すように服の下に着るものといいますか。」

ダイスケさんえっちです、といつよくな視線がユリカさんから刺さつてくるが一応説明する。

「おお、ダイスケ、それはいい案だ。ブラジャーーやショーツを作るわけだな。」

「うん。俺もまだこの服の下半身がスースーする感じに慣れないと、出来たら欲しい。」

「どういった形なんでしょう?」

「アマテラスと相談してみて。男性用ならまだしも、女性用は実際に分からんしそこし恥ずかしい。それから腹巻もいいかも。子供とか特に寝相の悪い人がおなか出して寝てたりするとお腹壊したりするからね。それで下着も腹巻も多少でも伸縮する布なら、ある程度の大きさをそろえれば大抵の人に合つからね。」

「へえ~、服として多少体の大きさの違う人でも着られるようにと作つたものですが、そんな使い方は思いもよりませんでしたあ。」

「下着を使つていない人にはあまりぴんとこないのかもね。つてわけアマテラス、頼むよ。」

「任されたのだ。魔族単体として魔力や武力を持つ者、それから武器などを作者以外にも何か人のために出来ることがあるのだ。特に器用だが非力な魔族にも出来そうだし。」

「よろしく。あ、他にも布を人の世界に広めてみて魔族と人がそれ

ぞれ違う特色を持つものが出来たら面白いかも。柄や色や形にこだわるのか機能にこだわるのか。

「確かに面白そうだ。一気に魔族との交流が深まりそうだ。ユ

リカもシンもそう思わないか？」

「かわいい服が着られるならうれしいです！」

「僕は動きやすい服がいいなあ。」

「早速男女で違いが出るね。楽しそうだ。」

「さて食事も終わったことだし、行こうか。午後も出来るだけ町を回つてみたいし。」

「ラクシコミとフレイアはどうするのだ？」

「シュテンドウジとデュオーユソスの件もあります。わたくしにも落ち度があつたわけですし、ティンロン様に頼んでみようかと。フレイアと急ぎります。」

「そろそろ、フレイアさん、さつきの服買わせてよ。折角来たんだし。あ、それから折角の再会だし俺も気になるからお土産用のお酒も一緒に見に行かない？」

「お邪魔ではないですか？」

「大丈夫大丈夫。ね、みんな。」

皆それぞれ頷く。特にティターニアやケルベロスはかつての仲間なのでうれしそうだ。

「それから今度は「こういう服が作れるかな?毛糸の服、俺のところではセーターって言っていたけど、セーターなら特に俺はタートル

ネックが好きでね。」

「せえたあですか。たあとるねつくといふのは？」

「うーん、首まであるセーターというか。出来たら重ね着できるよう薄めならなおよし。えーと、そうだ、アメノトリフネ、俺の頭の中の映像つて分かる？」

「のるん経由ナラバ。ソレカラアマリ人目ノツカナイトコロガヨロシイカト。」

「わかつたちよつと場所を変えよう。じゃ、お願ひ。」

なぜか出てきたのはユリカさんとシン君の映像だった。もつとも俺だと薄手のセーターでは腹のラインがぴっちりと出てしまつて格好悪いといつのは分かつていた。もっと魔力体に慣れれば自分の一一番いいときの外見になるそうなのでもう少しの辛抱なのだが。

映像が自分の想像通りになると分かつたので、シン君には紺のタートルに黒のジャケットを着せてみる。ユリカさんは白のタートルとピンクのロングスカート。ついでにティターニアとアマテラスにも。ティターニアは朱色のタートル、アマテラスには薄い黄色だ。

「なかなかかわいいじゃないか。うんうん。シン君もかつこいいよ。」

「あたしも着てみたいな~。」

「ねえちゃん、僕かつこいい！」

「魔族にはあまり着飾る習慣が無いんですけど、これはいいですね。」

「ボクも着てみたいのだ。あれ、ダイスケは？」

「あはは、俺はまだ腹が出てるから除外。」

「ラクシュミ様～、フレイアもこんな着たいですぅ。」

「フレイア、あなたは作る方じゃないの。」

「そうでしたあ。がんばってみますぅ。」

「フレイアさん、出来そう？」

「フレイアのことば呼び捨てでいいですよ。」

「じゃ、俺も呼び捨てでいいよ。よ」

「わたくしも呼び捨てでいいわ。父様が呼び捨てでわたくしがさん付けなんておかしいもの。」

「そう? ありがとう。で、フレイア、どう?」

「絵か何かあればアマの町の皆さんにも説明しやすいんですけどお。ちよつとフレイアじゃ説明が難しいですぅ。」

「そうかあ、あ、そうだ、マジックマジック。」

リングを広げてスクルドにつなぎながら、ポラロイドカメラを出す。といつてもポラロイドと言うのは俺の言い方であり、超科学の未来からすれば、立体写真を撮るものらしい。通称は相変わらずポラロイドらしいが。

そしてその映像を出来る限り大きく撮る。それから人目は無いがヨリカさんとシン君には向こうを向いてもらつて、下着の写真も撮つた。ちなみにこのときの映像は首から下だけのものだ。寒い時でも着飾れるようにとストッキングやスパッツ、レギンス、後は男性用にズボン下なども。

ま、今の技術力では厚手の股引が精一杯かもしれないが。

加えてより実用があるか分からないがレースをどう服に応用できるかなど。ミカドの人はまず自分が生きていくためになかなかそういつたものに手が出せないが、比較的余裕のある魔族なら色々やつてくれそうだ。人間に広まればいいし、そういうものを製作して生計を立てる人間が出てくるならなおいいだろう。最終的に正装のパーティや結婚式などが出来るようになって安心で多少裕福な国になるといいな。

技術交流なのか? も終わり、そこらの露天でお菓子や飲み物などを試しながら酒場街まで歩く。ラクシュミやフレイアも結構食べ歩きを楽しんでいるようだ。

そしてここのお菓子といえばクッキーに果物を煮詰めたシロップのようものを混ぜ合わせたものが多い。甘い果物はふんだんにあるし、サトウキビなどはもつと暑い場所に行かないと作れないのだろうが存在しない。ちなみに味噌や醤油、酒などはもともとは籠ったアマテラスがイグドラジル内のノルンと協力し、気候的に育つもの、技術的に作り出せるものなどから分かりやすく製法を記したものを作めたのが始まりらしい。確かにあのキッズルームにそんな本がもともとからあるわけない。場合によつては酵母なども作り出したようだ。

そんなこんなで酒場街に着く。これから徐々に日が暮れてくるので酒場はこれからが仕事だ。

酒場にはさすがにユリカさんやシン君を連れて行けないので、もつぱら酒屋を探している。一軒見つけて入つてみる。

「うつしゃい！お、姫様に王子様、さすがにまだお2人には早いですかな。」

「今日はお土産を探しにきてね。」

「ん？黒髪のにいさん、姫様。ひょつとしてにいさんがダイスケさんかい？」

「ええ。」

「そうかい、姫様を頼むよ！」

「はあ、姫や王家をはじめとしたこの国の人を守りたいと思つてますよ。まだまだ役者不足ですが。」

「おお、わしらもかい？これはうれしいねえ。そうだ、このブドウ酒、今日が一番の飲み頃だ。一杯試してみないか？姫様と王子様にはこつちのブドウ実汁だ。大人になつたらまたひいきしておくれ。と、そこのお嬢ちゃんたちも実汁でいいかい？」

「くつくつく。彼女たちには酒の方で。魔族だからね。」

笑いをかみ殺しながら説明している間にもやはつこりでもアマテラスは魔族にもみくちゃにされていた。酒場のオヤジの友魔もあれはアマテラス様だとオヤジに説明するとアマテラスのほうにすっ飛んでいった。

「そうだったのかい。あれが魔族の父様か。こりゃまずいことをしちまつたかな？」

「くつくづ。大丈夫だよ、あれでもやさしいからね。」

「こりゃーダイスケー言いたい放題言つなー、笑うなーなどとかすかに叫び声が聞こえてくる。

当然無視してブドウ酒を味わってみる。

「これはなかなか。今までいいものを飲んできたって訳ではないけど、これは飲みやすいし、香りもいいし、今まで飲んだ中では一番だ。」

「だらう? ここまでのはなかなかないよ? 前まではこのくらいの出来になると城に持つていったんだが、ツバキ様が城に持つてくれるよりも人々のお祝いなんかで使つてくれつて言われてね。今日はこないだの魔物騒ぎで怪我した連中がみんな完全に復帰したってんでそのお祝いさ。」

「そうだったんだ。よくなつたんだね。」

「おおそろか、にいさん、ダイスケさんだつたな。すゞい回復魔法を使つたつてんです」<sup>3</sup> と評判だよ。この国を守るつてのもあながち間違いじゃなさそうだなあ。まあよかつたら顔をだしてやってくんな。お、もう一杯どうだ?」

「ありがとう、じゃあもう少しこうかな。」

味わいながらブドウ酒をなめているとアマテラスも戻ってきた。杯を受け取り、アマテラスを始め、ラクシュミやフレイア、ティタニアーアもブドウ酒に口をつけた。

「いい酒じゃないか。イグドラジルの出す最高級に遜色ないのだ。  
これはもつと飲みたいのだ。」

「お城のものよりもかなりいいものですよ、これ。」

「シュテンドウジやデュオニコソスが酒を飲むのも分かる気がしますね。」

「おいしいです。」

「こないだ怪我した人が復帰できたからお祝いだつて。」

「何があつたのか？」

「そうか、アマテラスは知らないか。町の近くまで魔物が出てね。  
結構な怪我を負った人がいたんだよ。なんとか助かつたけど。」

「文字魔法か？ボクも文字は読めても書けないからねえ。文字魔法  
ならティタニアあたりの方が上手いと思うのだ。」

「重なつたつていう俺の孫つてって文字を書かなかつたの？」

「思考を読むコンピュータがあるしキーを打ち込めばすぐ文字にな  
る。だからなかなか文字を手で書こうとはしないのだ。趣味として  
いない限り。」

「なるほどね。発展の弊害つて訳だ。だから書き順なんて伝わらな  
いわけだ。」

「うむ。良し悪しつて訳なのだ。」

「そうか、ま、今の俺が活躍できる場があるだけよしとじよつ。ラ  
クシユミ、お土産はどれにする？さつきのセーターのお代もまだだ  
し、俺が出すよ？」

「そうですね。しかし彼らもまだ罰を受けているわけですし、どう  
したものでしょう。」

「いつそいいもの買つてくとか。今後フレイアを助けていい服が出  
来ることになればこりこりいい酒が飲めるぞーつて。」

「それはいいですね。彼らは逆にお酒が入っている方が、やせっこ  
しく働きますから。」

「じゃあオヤジさん、いい酒を頼む。」

「結構値が張るがいいか？」

「いいよ。それから怪我から回復した人の祝いの酒の分も少し出しからいいものを出してもらつていいかい？」

「おこ、こんなにもうつちや酒をいくつ出しても足りねえよ。これくらいでいい。」

「そう? んじゃそこに顔を出してくるかな。コリカさんもティター

ニアも行くよ。自分が治した人を見るのはいいものだと思つし。」

「そうですね。元気になつた人が声を掛けたりしてくれるととてもうれしいですから。」

「ボクもついていこうと。」

「シン君とケルベロスはどうする? そういうえばケルベロスって酒はやらないの?」

「僕も行つてみたい。」

「我ら誇り高き獣は皿に注がれた酒を飲むことなどせぬ。だが、主の酔いなどは共有することも出来る。我が酔うのはシンが飲めるようになつてからにならう。シンがどういう大人になり、どう酒を飲み酔うのか。実は楽しみにしている所もあるのだ。」

「なるほどね。シン君、大人になつたら一緒に飲もうね。」

「うん、僕も楽しみにしてる。」

「そうだね、俺も楽しみだ。あ、そうだ、ラクシュミとフレイアはどうするの?」

「わたしたちはお土産もいただいたことですし、ティンロン様のお叱りもいただかなくてはいけませんのでこれから帰ります。」

「フレイアも叱られるのかなあ~?」

「ふふふ、フレイアは叱らないよう、ボクからティンロンに言つておこう。服のことは頼んだのだ。」

「父様、ありがとお。」

「うむ、氣をつけて帰るのだ。」

「では父様、またお会いしましよう。」

「父様またねえ。」

「うむ。」

ラクシコ＝ヒフレイアの2人は音もなく浮き上がり飛んでいった。

「おお、早いなあ。しかし外見で見ると女性2人で危険に見えるんだが。」

「実際は2人ともかなり強いのだ。フレイアは気が弱いから今回のようになってしまつただけなのだ。ティンロンのオジジも別にフレイアが悪いわけではないのだしフレイアにお小言は言つまいよ。でも一応伝えておくのだ。」

どこかに通信している風のアマテラス。ものの数秒だが、元の世界で携帯電話で話している様にも見えたのでなんとなく懐かしく感じた。

そして酒屋のオヤジの酒の納品がてら、ある酒場に行く。そこで復帰祝いをしているはずだ。  
すでにかなりの喧騒がドアからも漏れ出している。

「まいど〜。」

たいして大きな声を出したわけでもないのに一斉に静まり返る。酒場にいる人間も魔族もどう接していくやら分からないうつだ。と、そこへ1人の男と友魔が近づいてくる。

「ダイスケさん。あの時ははお世話になりました。」

「ダイスケさんあの時はありがと。」

知らぬ間に隣にサクラさんもいて例の瞬間完治で治した男だと聞いた。

「いえいえ、どういたしまして。正直な話、あの日に初めて回復魔

法を畱いました。ある意味魔法を試すよつたことになつたので返つてこつちが申し訳ないくらいです。」

「しかしあの魔法でなければオレ……いや私もどうなつていったか分かりません。本当にありがとうございました。」

「ありがとうございました。」

「そうですね。では今は終わりよければ全て良しとしましょう。それから堅苦しい言い方をしなくてよいですよ?」

「ありがとうございます……いや、ありがとうございます。オレも正直完全に治るの

はあきらめていたんだ。ホントにダイスケさんのおかげだ。」

「いいつて。代わりにまた町の人たちを守つてあげて。まだ怖いかもしれないけど。」

「オレだって冒険者として国を回つたことがある。怪我したからつて魔物を恐れたりはしねえよ。そつそつ、オレの名はトウ。友魔はルサールカだ。」

「ルサールカです。初めまして。そちらは分かりにくいですがひとつとして父様ですか?」

「ダイスケです。よろしく。そつ、こつちはアマテラス。」

「よろしくなのだ。つてみんなでどびかかつてくるんじゃない!ダイスケ、助けるのだつ。」

「今まで引き籠もつてた報いじゃないのか?」

「遊んでいたわけじゃないのだ!」

「それもそうか。まあまあみんなひょつと待つて。アマテラスからも何か一言あるらしくから聞いてあげてよ。」

「ボクに丸投げ?」

「お前さんのことなんだから仕方ないだろ?」

「む~。じゃあ……」

アマテラスが魔族に向かつて何かを話している。結局アマテラスが主役のよつこなつてしまつたようだが、落ち着くまでは仕方ないだろ?。

ふと田が合つたサクラさんと話をする。

「回復が早くてよかつたですねえ。」

「うむ。あの魔法のおかげだろつ。足りない魔力を周りから強制的に吸い取つてしまつ欠点を除けばかなり回復魔法は進歩したと言つていい。」

「それはそれは。解毒などにも瞬間の文字は応用が利くかも知れませんねえ。」

「なるほど。病氣の者をわざと作る訳にもいかないから試す機会はそうそう訪れないかも知れないがな。」

「そんな機会はないほうがいいかも知れません。」

「まあな。しかし今日はなぜここへ？コリカやシン坊にはまだ少し早いと思うが。」

「酒を買つ用事がありまして。たまたま寄つた酒屋がここで復帰祝いをやると。」

「なるほどな。わたしも呼ばれてきたのだが、怪我が治つて元気になつた者を見る事が一番の酒の肴になる。」

「でしようね。そういうえばケイさんという人が町の代表になつたようですが。」

「うむ、昨日盛大に皆で祝つたぞ。わたしも祝いの言葉をかけたがつたのだがなかなかヤツも美男子だ。町娘などが離してくれないようでな。近寄れずじまいだ。」

「なるほど、妬いたと。」

「む、そ、そんなことはない！病院の人手が減るからさみし、いや！せいせいしているんだ！決してヤツのことが気になるとかいうことではないぞ！」

「もうだいぶ飲んでるんですか？」

「うむ、今日は日が暮れる前からこんな感じだ。」

「なるほど。まあ俺はケイさんに何も言わないと誓いましょう。」

「うむ。絶対だぞ。」

「ええ。俺は誓います。」

サクラさんの向こうでおとなしくオレンジやブドウのジュースを飲んでいたコリカさんとシン君に軽く視線を向けると、ここにひといやにやにやとしてうとうん頷いていた。

相思相愛っぽいな。上手いくといい。まあ、こじれなければ十中八九大丈夫だろう。

そしてアマテラスの方の話も落ち着いたようだ。アマテラスにも今日のこの場は俺たちが主役ではないことを伝える。

そして酒場の皆には復帰祝いの酒の差し入れを持ってきたことを伝え、これからも頼むと言つ。

ついでにコリカさんのお姫様モードにて「あたしたちの町をこれからもよろしくね。」などと言われようものならテンションは最高潮だ。

ある意味嘘も方便だが、酒が入っている人間には何でもありだろう。

まだ引き止めたかったようだが、サンカイ王も待っているからと早々に彼らの元を去り、城の帰途につく。

ユリカさんとシン君は今日のご飯は何かなくなどと言つて居る。

まだあたりは完全には暗くなつていない。子供の頃感じたことのある他の家からの夕飯の香りに懐かしいものを覚えた。

魔族は夜目が利くが、人はそうはいかない。油はまだ少量しか取れないため高価でなかなか照明用にできないので薄暗くなると町も少しさみしい。

ランプが広まればいいと思う反面、暗い危険な所にでも子供が行ってしまうと困るな、と利点と欠点などを考えながら歩いていると、

城付近でケイさんに出会つた。朝とは位置をちょいと逆にした状態だ。

「やあ、ケイさん。仕事は上手くこなれていますか?」

「ああ、ダイスケさん。ありがとうございます。これからよろしくお願いします。色々聞きましたよ。」

「いやだなあ、陰で笑われているんじゃないよね?」

「とんでもない。わたしもサクラの病院を手伝う傍ら、魔導師として研究もしておりました。ダイスケさんの示したものは本当に何十年もの進歩になるでしょう。これからもよろしくお願ひしたいと思つていいのですよ。姫にも王子にも年の近い男性の支えがあるならばより高みに上れるだらうと。」

「買いかぶりすぎじゃないのかな?第一この魔力だつてこっちに来た時の後付けの力だし、古代文字にしても俺は精通しているとは言いがたい。そういう点では地下システムの方がより知識があるだろ?ね。背格好で判断されないのはいいんだけど、さて、それが俺の力だとは俺が自分では認められないところでもあるんだよ。」

一瞬ケイ以外の者が何かを感じたような顔をしていたがダイスケは気がつかない。ケイは気がついたが特に気にする様子も見せず言葉を続ける。

「それもいざれダイスケさんの一部になるでしょう。そしてそれ以上に好かれるようになるには結局最後には性格や行動ではありますか?」

「そうかも。ケイさんありがとつ。少し楽になつたよ。」

「いえいえ、とんでもない。これから長い付き合いになるんでしょ?うし。何かお互い伝えるべきと思つたことは伝えるべきでしょ?」

「そうですね。よろしく。」

「ええ。朝も言いましたが」「からじやみやみじく。」

「じゃあ俺も助言を。」

「何でしちゃう?」

「俺は言わないと誓つてしまつたのでコリカさんとシン君が教えてくれますよ。」

お互にいやにやとした視線を交わし、コリカさんとシン君がケイさんと内緒話をしている。

といつてもあたりには人もいないし丸聞こえなのだが。

「サクラがケイさんのことを見美男子だと言つてましたよ。」

「病院やめちゃつたからさみしいって。」

「ケイさんが気になるとも言つてましたわ。」

「コリカ様、シン様、本当ですか?！」

「間違いないわ、ね、シン。」

「うん!」

「俺は何も言つていらないし聞いていいない。」

「ダイスケ、いい性格をしているのだ。」

「俺は誓つて何も言つていない。な、ケルベロス、ティターニア?」

「うーん、いいのでしようか?」

「我はどうでもいい。」

「あの2人が上手くいくなら何でもいいさ。将来喜ばれるかも。」

「ですね。」

「そういうわけでケイさん、今は酒場で怪我した人の復帰を祝つての宴会をやつているはず。サクラさんはあまり酒に強い方ではないようだし、普段どおりに頑張つてきなよ。無理に色々押し通さなければ大丈夫。」

「おお、ありがとう。じゃあ行つてくるよ。コリカ様、シン様、それでは。」

ユリカさんとシン君の「がんばって」などの声を受けてケイさんは走り去つていった。それほどサクラさんが好きなんだろう。なにかとも気持ちのいい気分になりながら城に戻った。

ちなみにあんな程度の酒で酔つたりしない。夕飯時にせりに麦酒など飲んだ。

そしてふと、今朝のようになつても困ると思ったので入り口に扉の大きさで魔法障壁を作つてみた。自分の全開の力で。

何でかといえば結局ユリカさんとアマテラスの部屋を同じにするこ

とになつたからだ。

今朝みたいになつても困る。ユリカさんは当然として、アマテラスも生きている年は長いのだが、あの外見では寝所で愛を語るにはかなりの犯罪臭を感じてしまいそつだからだ。俺も男だし、ノルンたちとは楽しんだし興味がないとは言わないがやっぱり見た目10代ではちょっと腰が引けてしまう。

ベランダでタバコをふかしながらなんどなく障壁は無駄にならんじやないかといつ予感を感じていた。

## 第1-1話 休暇、準備、鍛錬、休息

俺は俗にレトロゲームと呼ばれるものが特に好きだ。最新のゲームも好きだが、あのチープな音やグラフィックが様々な想像を引き立て、自分だけの物語を作っていくからだと思っている。キャラが一言もしゃべらず、ダンジョンの描画が線画である某6人パーティ地下探索型3DダンジョンRPGなどその最たるものだろう。だが今日はせっかくの休み、もう少し新しく、敵として出てくる悪魔を口説いて仲魔にし、パーティを強化、攻略していくゲームをする事にする。

エミュークレータでのプレイもいいが、ここはあえて実機で。何度もカセットの接触を確かめながら電源を入れる。

古いゲームなので当然のようにドリーテータが消えていた。  
朝っぱらから休日用に買っておいたビールを飲みながらスナック菓子などをつまみにゲームを開始する。

あれ？開始直後なのになんでこんなに強いんだ？無装備にも関わらず防御力はカンスト、主人公は魔法が使えないはずなのに全魔法使用可。

前にプログラムコードをチート機器によっていじったのが原因か？まあいかと序盤のイベントをこなそうとした瞬間、敵出現のエフェクトとともに戦闘になった。

あら？やつぱバグってる？

出現した敵はアマテラスだった。

まあ高レベルの悪魔だけど、ここちは防御カンストしてたし大丈夫だろ。

超余裕で鼻歌の一つも出ようかといつものだ。  
せつかくなので会話でもしてみるか。

会話にカーソルを合わせて決定。

ウインドウには

「ダイスケ、起きるのだ！」

はあ？ やっぱバグってる。だめだこりや。仕方ない、まだ朝だけど

今日は飲んで寝よ。

「ねえーーー！」

「バツキヤーン！

何かガラスの割れるような音と盛大な怒声があがつた。

「うおおっーなんだつ？！」

飛び起きた。きょろきょろと見回すと部屋の入り口付近でアマテラスが仁王立ちしている。じめかみにマーク付きだ。

「な…なにかな？」

機嫌の悪い女性は機嫌の悪い理由を言わないことが多いが、一応聞かないと。

「昨日はおとなしく寝て今日の朝、鐘が鳴つたらダイスケを起こしてあげようとしたのにきたのだ。そしたら扉を開けた瞬間に2人で障壁に頭をぶつけたのだ！ 腹がたつたのだ！ 障壁は当然壊すし、ダイ

スケにも同じ苦しみを味わつてもいいのだ！」

「はあ？」

自業自得だと思つたが口には出せなかつた。後が怖いし。

「そりですよ、ダイスケさん！」

「覚悟なのだ！」

まだベッドで上半身だけを起こしただけの状態であつたため何の反応もできぬまま2人の突撃を受けた。

ダイスケはくすぐり攻撃を受けた！

ダイスケは笑いだした！

くすぐる、くすぐる、笑う。くすぐる、笑う、くすぐる。笑う、笑う、くすぐる。

が、どんな時でもふと冷静になつてしまつ時がある。  
くすぐられるからといって、はたいたり蹴り飛ばすわけには当然いかない。

結局2人の腰を抱いた状態になつてていた所で3人の動きが止まつた。

「……おお…、両手に花。それにこれはかなり気持ちいいぞ。よし、

「一度寝二度寝」

「じゃあ…あたしも」

「…ボクも」

一度寝も、色々ふにふにして「いやん」なんてことをする時間もも

らえず、ため息混じりに入ってきたティタニアに怒られてしまつた。

「ダイスケを起こしてくるから待つてろなんて言つていたのにこれ  
はなんなんですか？」

「ティタニアも混ざる？」

「え……早く朝ごはんに行きますよー！」

さらばティタニアのお小言が増えた…。

「なんで俺が怒られるの？」

「私がユリカはともかく、アマテラス様を怒れるとでも？」  
「そうか、あんなナリだから忘れそうになるけど、偉い人だつたっ  
けね。障壁壊されたし」

「ふふん。あんな障壁はお茶の子さいなのだ」「  
「そうか。明日はもっと強くできるか試してみるか」

「そこは「明日は障壁なくそう」ではないのか？」

「いやそこは「明日は突撃を自粛しよう」だろ？大人なら  
「ぐむむ……」

漫才のよつな会話をしながら朝ごはんを食べに食堂に向かう。

今日の食堂の雰囲気はなんだか言い方は悪いがだらけているようだ  
った。

「なんか今朝はくつろいでいるよつですが、どうしたんです？」  
朝から酒を飲もうとしているサンカイさんに聞いてみる。

「民も数日に1日は休日を取るよつとしているからな。王族も例外  
ではないだろ？」「

「店とかどうなつてゐるんです？」

「ミカド内で同じものを扱つてゐる店」とに休みを取り合つてゐる  
してある。新しい代表であるケイも入つたし、魔法もここ数日でか  
なりの発展をした。わしらもやつとゆつくりと休みを取れるという  
ものだ」

「ゴリカさんの件がまだ残つてますけど」

「それはダイスケが何とかしてくれるだひづへー」

「ええ、そのつもりですが。」

「そういうわけで朝から酒が飲めると」

「丸投げもどうかと」

「わしらも向こうの王たちとの交歓会という腹の探りあいがあるか  
らな。ゴリカに付きつ切りにはなれないのだよ」

「そうですか、できる限りがんばりますよ」

「たのもむ。で、ダイスケは今日はどうするのだ？」

「地下にこいつかと。ゴリカさんヒシン君の腕輪をちょいといじら  
ないといけません」

「つむ、わしも行こ」

「わたくしも行きますわ」

「「「わたしたちも!」」」

「みんな? てかサンカイさんとシバキさん以外は上の食堂へいらし  
か入れないよ? それでもいい?」

「「「もちろんです」「」」」

「じゃあみんなで行こ」

だが全員というのは少し問題があると思ひ。

「でも誰か一人は上に残した方がよくないか? 何かあつたときに連  
絡が取れないではこまるだ?」

とはサンカイさんの言だ。

「じゃ、ネコマタを連れて行つてガクさんは居残りと」

「なんで？！なんでオレが居残り？」

「ガクさん、酒場とかで俺のことどんな風に言いふらしたかおぼえてないんですか？」

「いや、いすれは姫の旦那になるからいいかな……と」

ユリカさんは赤くなつてぐねぐねしている。

「ダイスケはまだ来たばかりだぞ？否定はせんが、もう少し城に仕えるものとして分別があつてもいいと思うが、どうだ、ガク？」

サンカイさんは少しきつい視線を向けながら言つ。

「すみません」

「では居残り頼むぞ？」

「はい……」

「さて、では王族の方以外はここまでになります

どこかのツアーノ添乗員のようだ。

マジックの機械の使用法を教え、王族とその友魔と地下に向かうことにする。

残された人はパフェなどのスイーツを特に喜んでいるようだ。

この部屋に入るにも管理者権限が必要になつてているので俺かアマテラスがないと入ることができない。

後々面倒になつても困るので、皆にはここで飲食してもいいが、外に持ち帰らない、外ではこことの話をしないということを約束させることにした。

破ればここに入ることができないようになると、できるかどうかは

わからないが脅しておくことにする。

甘く柔らかなスイーツに完全に心が奪われているようであいまいな返事や頷きしか返つてこなかつたがまあ仕方ないとして地下へ向かう。

「お、浮遊感がなくなつてゐる」

エレベーターの浮遊感がなくなつてゐる。腕輪からの情報ではノルンの完全稼動につき、重力制御装置を組み込めるようになつたということだ。

まあ最先端の科学の施設などほとんど海の底だつたり破壊されたりするのでまだ数世代前の大型建造物にしか使えないそうだ。エレベーターでも俺からすれば十分小型だと思うんだが、個人使用にまで小型化されていたという当時にしてみれば前時代的なのだろう。

地下に着いた。

4人の美人の歓迎を受けた。ユリカさんは不機嫌そうがまあ仕方ない。

サンカイさんも鼻の下を伸ばしていたようで、ツバキさんからつねられている。

シン君は優しそうな女性に見えるのか、喜びながらノルンに抱きついている。なんか10歳くらいにしか見えないな。

ここの人たちの年齢は半分で見繕うのが正解かも。特に男。女性は別だ。生まれたときから女だからね。

とにかくコリカさんとシン君に自動障壁の機能を腕輪につけてもらう。

特にケルベロスは自分が守るからとあまりいい顔をしなかつたが、  
ウィルスに行く間だけでもと説得しておいた。  
ティターーーアはペンドントからの呪に専念できるところにと  
がたいと言つていた。

それからウルズからある程度ミカド内でのリンクが回復したといふ  
ことで魔物のこと、発生原因などはまだがどんなモノがいて、こ  
の国の人たちがどう対応したのかが分かつてきだと報告を受けた。  
国のほかの者の腕輪から情報が入つてきたそうだ。GPSもミカド  
内なら対応できるそうだ。

それはすごいと褒め、その情報はどうにか自分たちにも分かるよ  
うにできないか聞く。

すると床から何か「ツクピット」のようなものがいくつかせり出して  
きた。

どうも、ヴァーチャルで経験をつむことができる道具らしい。痛み  
なども感じるがそういうものは大幅に削減されているようだ。  
というか、ゲームなどで使用されていたものらしい。

早速試してみることにする。サンカイさんら、4人もやつてみたい  
とのことで5人でやることにする。

イスに座り、顔をすっぽりと覆うヘルメットのようなものをかぶる  
だけだ。

と、いきなり真っ暗だった目の前に今までいた部屋とは違つ、広大  
な野原が現れた。

手足の感覚も自分本来のものままだ。目の前にいきなりウィンド  
ウが出、武器選択といわれたのでスクルドの作つてくれた俺専用と

のタグのついた武器を選択する。手のひらに現れたのは銃のようなものだ。ただ意思に応じスタンガン的な雷撃と実弾が選択可能らしい。雷撃の効果範囲が5メートル程度と狭いがスタンガン的に麻痺させるように使うにはこの程度が限界らしい。電気を5メートル程度とはいえ飛ばせるだけでもすごいことだが。実弾はかなり高価な誘導弾。間違つて相手を殺めてしまふ、もしくは逆に外さないためのものだ。

一弾あたりの値段を聞いてしまったが忘れることにした。地方なら土地と家が買えそうだ。

ふとみんなも視界に入ってきた。サンカイさんは軽鎧に錫杖、ツバキさんはローブにでかい宝石のついた杖、ユリカさんツバキさんと同じ。

シン君は軽鎧にこないだの剣を持っていた。

イグドラジルの声が響く。

ノルンが現在フルで能力を使っているらしいので受け答えは余裕のあるイグドラジルがするようだ。

「友魔を入れる技術がまだありませんので皆様には己の能力のみで戦つていただきます。武器や魔法は現実と同じようにしか使えません」

「武器の能力は?」

サンカイさんが尋ねる。

「現実の通りに使えます。では弱い方から順に。最初は1対1で行きましょう」

いきなり他の人が視界から消えた。

ありがたい。喧嘩もしたことないし、無様な様子しか見せられないだろうから。

牛、銃で一撃。

猪、突進されかするが痛くもなく、やはり銃で一撃。

熊、爪が怖かつたが自動障壁で平氣。何発か打つて終了。

子連れ熊。何度か殴られる。足も速いので離れようとしても追いつかれる。ただの熊は離れるとどうでもよくなるようひづり狙撃できたのだが。

これはこの前、怪我をした人が出たのも分かる。何とか撃破。

機械というかロボ系、マシンというひらじいが。当たり前だけ動きが読めないし銃も撃つてくれる。

戦っているうち、銃の反動にも少し慣れてきた。マンガのように片手で無理な姿勢から打つと肩が持つていかれるようになる。が、だんだんゲーム感覚で楽しくなっててきた。誘導弾の補正を使い足を1つずつ落としスタンガンを打つ。やはり電撃はクリティカルらしく動かなくなつた。

じじじでいつたん休憩ということであつが集まつた。

サンカイさんとツバキさんは余裕でマシンまで撃破。どうも錫杖は何かに当たるときに氷と炎を瞬間に順次発動するものらしい。凍らせたのち、中に残っている空氣や凍らなかつた水分を膨張させるこ

とで対象を破壊するという。ツバキさんとユリカさんの杖は魔法の文字を宝石に書けば、杖を振り突くことでその魔法を発動するものだそうだ。ミカドの魔法陣が空中に文字を描き、そこから動かせられないことを考えればかなりいい杖ではないだろうか。

シン君はマシン撃破まではできなかつたようだ。魔法の発動が不安定なのと、剣は軽いし切れ味は抜群なのだが、ただそれだけなので結局相手を捕らえられないとどうしようもないらしい。いつもはケルベロスのブレスで相手の行動を制限し止めを刺すという戦法だったので自分の欠点が分かり、勉強になつたと言つていた。悔しそうだったが。

ユリカさんは攻撃魔法の勉強をしてこなかつたため、回復しかできない。

結局障壁で防御したり逃げ回つていたらしい。ツバキさんにだから勉強しておけといったでしょ？とお小言をもらつっていた。

全員休憩も終わつたことで、イグドラジルの提案で団体戦を行つことになつた。

いきなりどこから「ヴォン！ フィイイイイイ…」と駆動音が聞こえてきた。

相手が見えないので、自動障壁のないサンカイさんとツバキさんを内側にし、音のした方にゆっくりと進むことを提案しようとしたが、腕輪から通信が入つた。ノルンたちは忙しいからイグドラジルだったが、使える物は全て使わないと色々守れませんよと。そして、

『敵影発見、センサー作動』

「方向と距離！」

『13時に3体、距離1キロ。18時に2体距離300メートル。

5体ともマシンです』

「サンカイさんとシン君、真後ろに2体、よろしく

「つむ」「はい」

「ツバキさんとコリカさん」のまま前進、コリカさんは後方から敵を見つけ次第障壁で援護！

「ええ」「わかりました」

後ろ2体は最悪サンカイさん一人で何とかなるだろ？  
こちらはどうするか。少しだけ間がある。

『敵タイプは？』

『マシン系2体です』

「よし、ツバキさん杖をちょっと見せてください。これをこうじて  
つと」

宝石に“雷槍”と書いてみる。効果範囲が分からぬのが不安だが、  
文字のイメージからしても一直線にいくだろう。

「見えた！ 障壁！」

「はいっ！」

何とか障壁が間に合い、マシンからの銃弾を防ぐ。

障壁を盾に銃とツバキさんの杖で2体を倒す。残った1体が近接戦  
闘をしようとしたのか近づいてきたので牽制の意味で障壁を倒して  
みたら

あっけなくつぶれてしまった。

「あれ？ 障壁にも重さがあるのかな？ まあいいか。」

サンカイさんの方も特に問題なく終わつたようだ。  
イグドラジルの一言で現実に戻ってきた。

「ふう…。戻ってきたぜ…」

「なにをえらそうに格好つけておるのだ。ダイスケ、ボクはまだまだだと思うのだ」

「そこはほら、いつもいるアマテラスや友魔を信用していると考えてもらいたいところだろ。アマテラスが離れるならまた考えることにするけど」

「う～ん。ダイスケと離れると面白いことを見逃しそうなのだ。ボクと重なった人もなかなか面白い知識を持つていないので。国の経営などには結構な知識があると思うのだが」

「それはミカド国の発展に使っていただきましょう」

サンカイさんが口を挟む。王になつてからなかなか気楽に体を動かす機会がなかつたのかさわやかな笑顔だ。

「う～む、あんまりめんどくさいのはイヤなのだ」

「シンの教育のためにもおいおいお願ひしていきたいと思つているのだが」

「シンはかわいいからな。それならば考へてもいいのだ。どうもボクを弟妹扱いするものが多いから、ボクより弟なシンは大事なのだ」「アマテラス姉ちゃん、今後ともよろしく！」

「うむ、任せておけ！」

とりあえずのお茶をしながらこれからどうするかを相談する。

ノルンの、食物が厳しい条件で育つか研究するフロアがあり、そこの少々暴れても大丈夫だから、そこで実際に戦つてみるべきだと

いつ提案でそこに移動、模擬戦を行うことになった。俺だけ。

「誰かついてきて欲しいんだけど……」

「どう言葉にアマテラスとユリカさんとシン君がついてきてくれるうことになった。」

当然そうすればティターニアとケルベロスもついてくれることになる。模擬戦とはいえ、危険がないとは言い切れないからと書いて。

サンカイさんとツバキさんはウイルス王への対応を考えるところらしい。

エレベーターで移動する。

途中で一応ボディースーツのようなものを着させられる、ヘルメットもだ。最悪の状態を防ぐためらしい。

ケルベロスとティタニアはつける様子がなかつたので聞いてみたら「そんなもの当たらない」とか堂々と言っていた。というよりノルンの説明では魔力体だから肉体が欠損しても魔力さえあれば再生できるらしいので問題ないそうだ。

そこは本当に荒野というべきところだった。

他のフロアでは極寒や猛暑もあるそうだからそなへなくて助かった。

そしてそこにマシン系の魔物が現れた。どうもマシン系とはいうう施設の管理ロボットが自我を持つて廃棄施設からパーティを調達、自己進化を遂げた存在らしい。

今回はマシン系も制御の上で模擬戦に参加させてるので、現れた3体のうち、2体は熊系の動きをするマシンだということだ。

『熊系？ ひょっとして子育ての熊か？』

腕輪からノルンに聞いてみる。

『普通では面白くないとアマテラス様がおっしゃいまして』

「マジか!? 仕方ない、臨機応変にいくぞ！」

と言った直後、熊系マシンの1体がアマテラスの攻撃によりスクランプになつた。どういう攻撃だったかも分からぬ。何かを飛ばしてたんだろうか。

残り2体になつたが気を抜けない。あつといつ間に間をつめてきたマシンの攻撃をぎりぎりかわし、銃を撃つ。しかし銃の誘導範囲を越えたようでは当たらなかつた。でもアマテラスに頼るのは何か気に入らない。

「シン！ ユリカの援護で熊系を頼む！ ティタニアとケルベロスは遊撃で牽制！ マシンはこっちで食い止める、その間に頼む！ アマテラスはやばくなるまで待機！」

「面白くないのだ」

「アマテラス、お前<sup>チー</sup>が入ると<sup>チー</sup>反則だろ！ 待つてや！」

「分かったのだ」

「つく！ はやい！」

誘導弾でも動きが早いとなかなかとらえられない。

それでもケルベロスの牽制により4本足のうち1本は何とかなつた。そのうち熊系が何とかなつたようでシン君とユリカさんがこっちに來た。

「ダイスケ兄ちゃん！ 姉ちゃんがなんかほにゅほにゅしててあんまり使えないよ！」

「分かった！ ユリカ！ しつかり！」

「はつ！ すみません……」

「よし、いくぞ！ ユリカは回復系準備。怪我したらユリカの作った障壁内に駆け込め！ ティタニアはその保護！ ケルベロスは続けて遊撃！

シンは俺が気を引くから思つよつに攻撃、いくぞ！」

マシンに攻撃をかける。と言つても俺に気を引かせるための牽制だ。そしてここで自動障壁の欠点が出た。欠点と言えるものかは微妙だが。

マシンの機銃に反応したのだが、完全には防げなかつたのだ。ほんの少しのタイムラグで発動し、銃の反応に対応するだけでもすごいと思うのだがその最初の一発を受けてしまうなら意味がない。

バスつ！

ボディースーツで腕を失うようなことはなかつたが痛いものは痛い。と、ここまでゲーム感覚でいた自分が恥ずかしくなつた。そしてそれ以上に恐怖が出てきた。

「どわ～！今まで死んでも復活させればいいやとか思つてごめんなさい！」

とゲーム内の各主人公に詫びを入れながら逃げ回る。

「シン！左から行け、ケルベロスは右からだ。ティターニアは正面で障壁！ユリカはダイスケをなんとかしろ！」  
アマテラスからの指示が飛ぶ。

「ダイスケさん！大丈夫ですか！」

「怖い……、死ぬ……」

「ダイスケさん！」

ぎゅうつ。ユリカさんが抱きしめてくれた。

「死ぬう…うつ？ユリカさんが、……ありがと」

「こえ」

「はすかしいんですかど……」

「もつとこのまま……こいんですよ~」

「ありがと~、でもこのままだと反応しちゃうわ~」

「ダイスケさんならいいですよ……」

「ひつやーー、ダイスケー！ さつわと行くのだー！」

「おおっーよしー、いくぞー！」

「もうっ。次はきちんと……」

ゴリカさんの言葉は聞かなかつたことにして戦線に参加する。

俺は近接は向かないと分かつたので自分の障壁を盾にして間接的に足を狙つてみる。

が、当たらない。動きが早い！ しかしシン君が足を一本落としたのではじっちゃいられないと恐怖心を押さえ、自分をおとりにして雷撃を繰り出す。

怖いが、衆目のあるところで自分の半分にも満たない年の女性に抱きしめられることを思えばこれくらい。

痛みと恐怖心での震えで狙いが逸れそうになるがなんとか雷撃を当てる。

そして動きが止まった所でシン君の攻撃でジエンド。

「きつかった……」

「ダイスケはこれが現実だとキチソと理解しなくてはいけないのだ」「分かりました。というか理解できました。冗談抜きで怖かつた」

「ふふふ、しつかり絞られたようですね」

「ええ、すみません」

ツバキさんの言葉は堪えたが返事をを返す。サンカイさんも口を開く  
「指示はいつもダイスケとアマテラス様の2人でいつたらどうだ。  
ダイスケが恐怖で我を忘れるとは思わなかつたしな」

「すみません。もう指示はアマテラスにお願いした方がいいと思いま  
したよ」

「そうか。まあその時に合つた方法でいいと思つぞ」

「またおいおい考えますね」

そこにシン君が口を挟んだ。

「ダイスケ兄ちゃん、僕や姉ちゃんはもう呼び捨てでいいと思つん  
だ。ダイスケ兄ちゃんの呼び捨てで姉ちゃんがほにゅほにゅしちや  
つたし」

「そうか、何かあるときにつん付けしてて指示が遅れたりしたら意  
味ないからなあ。考えてみるよ」

疲れでぐつたりと机にふせる。ふと腕輪に目が行つた。

「あれ、魔物段位が上がつてる」

魔物2と表記されている。なんか裏技っぽい方法だったけどいいの  
かな」と思いつつ、ユリカさんとシン君にも聞いてみる。

「ねえ、ユリカさ、いえ、ユリカとシンは腕輪の魔物段位の数字変  
わってる?」

きつい視線がユリカさんから飛んできたので言い直す。

「あ、上がってる…2になってるよ…」

「あたしもです。でもあたしはいのかしら…」

「ま、もらえるものはもらっておきましょう。向こうの貴族にい

牽制になるかも」

「なるほど」

もう色々疲れた。昼間だが飲むことに決めた！

「さて、ノルン。生と手羽先。あとポテチ、それからカツ丼」

「よろこんで～………とでも言つと思つたんですか？……今回だけ  
ですよ？次からは自分で出してください。それより食べすぎじゃな  
いですか？」

「魔力体なんだから気にしない、気にしない」

「ダイスケ兄ちゃん、なまとかてばさきとかぼてかとかかつじんつ  
てなに？」

「あ、じゃあみんなにも。生は麦酒のことだよ。後は食べてみてね」

「おーしゃー」

「こんなに味の濃いものは初めて食べた」

とはカツ丼をかきこんでいるシンとサンカイさんの顔だ。

手羽先に含まれる成分がお肌にいいと言つたとたんに結構な勢いで  
手羽先を食べるツバキさん。

ユリカはポテチに夢中のようだ。

「栄養が偏るから野菜も食べた方がいいですよ？」

ノルンはそういうながらサラダも出した。ノルンを始め、システムの3人もサラダをつついでいる。魔力体でないと味というものは分からぬだろう、ドレッシングが今の農業技術でどこまで再現できるかなど話し合っている。

卵が安定供給されればマヨネーズが作れるかもなどと言っていた。

ミカドの素材のおいしさ全開の食べ物もいいんだけど、現代人としてはこういうものも食べなくなる。

「こういうものを知っているなら、今のうちの国でできるものは是非教えて欲しい」

と、サンカイさんはノルン達にと言つていた。

ヴェルザンティが俺を見ながら、

「ダイスケ様はどの程度ならいいと思しますか？」

と言つてきたので、

「この国の人々が仕事をなくさない程度ならいいんじゃないのかな」と答えておいた。人々の生活の種を奪うわけにはいかない。代替の事業とかも考えていかなくてはいけないだろう。

それから自分がこの国で最終的にどう生きていくのかも徐々に考えなくてはならないだろ？

だが今はウイルス貴族への報復が最優先だ。

もうそれなりに飲んでしまったし午後は寝て過ごすのもいいだろ？また忙しくなるだろ？、一曰くら寝て過ごすのもたまにはいい。

気持ちのいい酔いに身を任せながらなんじを考えた。

今日はミカドを出る日だ。

もう朝のアマテラスとコリカの部屋への突撃にもなれてしまった。

そして性懲りもなく障壁を作つておいたんだがあつけなく全て破壊されている。

破壊までの時間が長かったのが硬い魔力ブロックを伸縮するひも状の魔力でつないだもの。硬さと粘りを両立させようと考えてみたのだが、これが一番だった。

魔導師3人衆にこれを伝えておいた。ゴムがないこの世界でどこまでイメージを伝えられるかは分からないが。

そうそ、フレイアのタートルネック、武器屋の鉛筆の試作品が届いた。

「いい出来だ。鉛筆はまだまだだけど、タートルはいいな」

「お、フレイアの作ったものか？ボクのもある？」

「というかこの感じだと女性陣のものだけっぽいな。俺にはきつそうだ。次は少しゆつたりで男性にも着られるものをとたのまないと」「じゃあボクが言つておくのだ」

「よひしく。じゃあとりあえずこの4着は何とか分けて

「うーん……黒はシンで……黄色はボク……うーん……」

「ま、仲良く頼むよ」

前に出したポラロイドのイメージが強いのか悩んでいるアマテラス。と、そこへ腕輪から通信に入る。

『ウイルスでの種の着床を確認しました』

『どう?』

『2~3日後には情報収集ができるでしょう』

『そうか、よろしく』

『かしこまりました』

部屋で持つていい物の最終チェック。と言つても着替えと道中の野宿の用意だけだ、それすらマジックで出せるんだが。

ブランドでタバコをふかふかとやつているとティターニアが呼びに来た。そろそろ出るそうだ。

リコックのようなものを背負い城門に向かつ。すでに皆揃つてい  
る。

「俺が最後? 申し訳ない」

「かまわぬ、遅れたわけではないしな」

サンカイさんの言葉がありがたい。それにしても城を空けていいのだろうか? 聞いてみると

「ケイもいるし大丈夫だろ?。いや、ケイがいてよかつた」

ケイさんが苦笑いしながら答える。

「私もまだまだ若輩者ですから期待はほどほどにしていただきたいのですが」

「他の代表といつもお茶をしておるようなものだ。気にせぬことだな」

「私には友魔がおりませんが、緊急の場合せどりしたらいのどう?」

「そうか、いつもは友魔のつながりを持つて緊急に備えておったな、

ダイスケ、何か手がないか?」「

「俺ですか?うーん、腕輪あります?」

「ええ、旅もしていましたし、昔はイクサで治療の職についていたこともありますから」「

「ではそれに通信をつなげられるようにしてしましょうか。サンカイさんやツバキさんは腕輪あるんですか?」

「無論だ。王族の者は己の治める地を見るためにも若い頃に色々旅をするのだ」

「わたくしも旅をしたことがありますから持っていますよ」

「じゃあホットラインをつなげられるかノルンに聞いてみましょう」「

「ホットライン?」

「ああ、すみません、直通回線のことです」

「そうか、ノルン殿、申し訳ないがよろしく頼む」

『かしこまりました。アメノトリフネ様にお願いする』といたします

「アマテラス、アメノトリフネは?」「

「アマテラス」「

髪留めを指差すとそれがふよふよとこちらに来た。

「じゃあアメノトリフネ、お願い」

「ワカリマシタ、皆サン、コノ光二腕輪ヲカザシテクダサイ」

「で、どういう風に使うの?」「

「伝えたいことを強く思つたときに全員に伝わる仕組みなのだ。携帯電話の機能もあるが、それはつけていないのだ」「ふーん。わかった。でもこの所能力というか力を使いまくりだな。いいのかなあ。便利に慣れちゃうと怖い気がする

「拡散には気をつけないといけないのだ」

「だね」「

「では出発するぞ」

サンカイさんの声でまずは町の端まで歩く。ところよつ、馬車のようなものはミカドには存在しない。緊急連絡などは足の速い友魔を頼るし、体躯の大きな友魔が人を乗せて走ったりすることも珍しくない。

ふと町並みを見ていると閉まっている店が多いことに気がついた。

開いていても店員は若すぎると思われる子供と女性だけだ。

「店がいつもと違うみたいですがどうしてですか？」

隣を歩いていたツバキさんに聞いてみる。

「わたくし達のウイルス訪問にあわせて向こうでも大きな市場が立ちますからね。珍しいものもあるそつです」

「そつなんですか？」

「時間があれば見てまわることもできるでしょ」

「それは楽しみですね」

町を抜けた。ここからしばらくは田畠が続く。田畠が終わる所あたりに衛兵の詰所がある。衛兵に「ようしくたのむ」とサンカイさんが言い、衛兵は「お気をつけて」と返事を返す。しばらくよろしくお願いします、との意味をこめて会釈しておいた。

「さて、ここからは少し気をつけていくぞ。魔物が出る」ともある  
しな

「わかりました。ノルン、ウルズと接続、周囲監視を怠らないで欲  
しい」

『了解いたしました』

「よし、今日はここまでだ」

ミナートにいく人々はほぼ歩きであるから当然同じようなところで  
野営することになる。小さいが意外に丈夫そうな建物が作つてあり  
そこで夜を明かすことになる。

味噌汁のようなものを作り、麺を入れる。うどんやラーメンのよ  
うなものだ。

「む、何かいる！」

ケルベロスが声を上げた。いそぎ装備を整え、ケルベロスの向い  
ている方に注意する。

がさりつひゅつ

！！！

「犬か？」

犬らしきものはケルベロスの威圧に恐れたのか顔を出したと思つたらすぐにどこかに行つてしまつた。

『ノルン、警戒は？』

『害意、魔力ともになかつたので感知できませんでした』

『わかつた、これからも頼む。小物は白虎やケルベロスならわかるだろうし』

『かしこまりました』

「ふつ……、魔力等なかつたようで、ノルンの感知外だつたようです」

「そうか、白虎、ケルベロス、何か気がついたら教えてくれ」

「承知」

「そりいえばダイスケさん、あまり落ち着きがないようですけど大丈夫ですか？」

「こういう夜の越し方つてしたことないからね」

「ダイスケ兄ちゃんの世界つてどんなんだつたの？」

「そうだねえ。遠い所の人とでも会話のできる道具、城からこじま

でならあつという間に着く道具。色々とても便利だつたと思つよ。

実物見ないとわからないだうつけど。」

「そんな所に住んでみたいなあ」

「その分機械や道具に囲まれて、こんなすばらしい自然に接する機会がなくなるよ。俺のいたところはまだ自然があつたけど、都会と呼ばれる町部分には城よりも何倍も高い建物が建つてしたり、木々や自然なんてほとんどなくて息苦しかったよ。そういうえば1000年後はどうだつたんだろう?」

「人が少なくなつていたからな、ほとんどは地下施設だつたのだ。地上はかなり自然に考慮しておつたらしいのだ。今はほとんど海の底だが」

アメノトリフネが俺やアマテラスの記憶から情報を取り出し映像化する。人が乗り込み高速で移動する車。携帯電話などはかなりの驚きを持たれた。アマテラスにも。なんでも西暦3000年あたりでは個人用の重力制御装置により足を使わずに高速移動ができるおり、タイヤのある乗り物などは完全に廃れていたためだ。ノルンたちのこれから研究いかんではそれを楽しめそうだ。バスクトウザフューチャーのあの空飛ぶスケボーにはあこがれたものだ。今の世界で再現できるとすれば自転車だろうか。ノルンのメモリには自動車など旧型移動装置のデータはないらしく、そういう古いデータも残つている所が生きていらない限り手探しだそだ。

それからいい機会だからとノルンにも頼んで世界地図も出してもらう。まだ衛星の稼動範囲により地球全体は見渡せない、ミカド、ウィルス周辺の地図だ。

「地球は青かつた……。つて海しかないよ?」

『その2点の陸地がおののミカドとウィルスになります』

「ミカドはまだまだ小さいのだな。フジサンの北に土地があるのが気になる」

「ウィルスもですよ。北西にかなり土地があります」

「ボクの覚えている魔族の土地とも形状が合わないのだ」

「それよりこんなに上手く他の陸地にいけたウイルスの創始者は何か道具を持っていたということかな？それにだ、俺のいた地球と魔族のいた地球が重なつて水が増えたのはわかる。だが土地なども同じく増えていないといけないはずなのにそれがない。そして現れた新しい月……、ノルン、大融合前の前の地球2つ分と今の地球と赤い月を足した重量や体積はどうちがつていい？」

『計測の方法がありません。大融合前の体積や重量はともかく、現在の地球をそこまで詳細に調べることがまだできません』

「そつか、わかつたらよろしく」

「ダイスケ、どういうことなのだ？」

「今の地球、2つの地球が重なつたとして、これだけ海が広いということはその陸地分のものはどこに行つたのかと。もしかしたらそのなくなつた分が赤い月を構成しているかもしだれない」

「魔物化の研究も進むかもしれませんね。ノルン、ボクからもよろしく頼むのだ」

『かしこまりました』

夜が明けた。今日も1日歩く歩く。正直車が欲しい。魔力体に慣れてきたので疲れはしないのだが。

「暇だあ！暇すぎる！」

「どうしたんですかダイスケさん？」

「ああ、ユリカ、これちょっと暇すぎじゃね？」

「そうでうすか？あたしはあまり町から出ませんので楽しいですよ？お父様やお母様と出歩くこともめったにありませんし」

「そうか、そういうことならわかる。でも俺は暇だあ……」

「ダイスケ、歌の一つでも歌うのだ」

「そうそう、この国の楽器つてどんなものがあるの？」

「魔族から伝わったもので豎琴があるのだ。それから横笛」「弦の楽器か。弦は弾けないわあ。横笛もなあ……学生時代にサックスやつたくらいだし、今の世界にサックスはない」

『バンブーサックスなどはいかがですか?』

『今でも再現可能かな?』

『リガチュア以外は』

『じゃあそれは紐にして、運指はリコーダー準拠、口笛で』

『しばらくお待ちください』

「何を考え込んでおつたのだ?」

ノルンとの念話もはたから見ると考え込んでいるように見えるのか。それからアマテラスが聞いてくることを考えると、主と友魔は意識しないと精神で会話できないということか。ふとそんなことを考えながらアマテラスに答える。

「ちょっとノルンと相談。俺の世界の楽器が持ち込めるかどうか」「あまり複雑なものはよろしくないのではないか?」

「竹と葦さえあれば作り出せるものこじたよ」

「ほう、楽しみなのだ」

『それから主と友魔の念話のよつにはボクとはつながらないよ。強めにボクを信じないと。前にも言つた気がするけど』  
とはアマテラスからの念話だ。

「忘れてた……」

「何を忘れてたの、ダイスケ?」

ティタニアにつつこまれた。

「いや、アマテラスと精神がつながって会話のようなことができる

こと

「ええっ？アマテラス様とつながるんですか？」

「うん」

「なんだとっ？」

白虎も怒った風に言つてきた。

「ダイスケ、父様とつながるとはどうこじりことだ……？」

ケルベロスも本気に見える。

「ちょ、ちょっと待つた！結果的にそうなつてただけだよ？アマテラス！なんとか言つてくれよ！」

「人と友魔の関係はその魔族が眠りから覚める時期とその人の誕生の時期がある程度重なることと、魂と呼ばれるものが似る、もしくは惹きあつことで結ばれるのだ。そういうわけでみんなの父としてのボクは眠りを必要としない、故に人と契約を結ぶことがないのだ。だから念話を使えるものなどいないことになるのだ」

「血は？俺の孫と重なつたんだろ？」

「重なるとは肉体を共有するものではないらしいのだ。と言つてもこの世界で今の所だれか、もしくは何かと重なつたのはいまのところボクとアメノトリフネ、イグドラジルしかいないのだ。重なつた相手が血の通つた体を持たぬアメノトリフネやイグドラジルも特殊なのだが、かえつて血の通つた肉体を持つものと重なつたボクの方がもつと特殊なかもしれない。ダイスケの孫の知識や思いしかボクにはわからないから」

「じゃあなんで俺とアマテラスはつながることができるものだ？」

「そんなことボクにもわからないのだ。問題がないならとりあえず放置なのだ」

「それで俺がこんなににらまれるんだけど？大問題じゃないか、俺

的に」

「魔族の魔物化と比べたら問題ではないのだ！」

「それを解決しようと思つて引き籠もつて今を生きる者はほつたらかしかよ」

「なにおう一ボクが心を痛めていないとでも思つていいのか？」「そうじゃねえよ！結果的にほつたらかしてることが悪いと言つているんだよ！たまに地上に出てきて魔族と交流したり、魔物化する魔族を見るのはつらいかもしないけど、「最後に父の顔を一目見たかった」とか言つ魔族はいなかつたのか？！その人のために「後は任せろ」とか言つて笑顔で送つてやるのも父の役目じゃないのか？！町でのおまえの姿に喜ぶ魔族をどれだけ見たと思う？俺は子供がいなかからと言われるかもしれないが、父はいる。いや、いた。人の父と魔族の父が同じだとは思わないが、子が父を思う気持ちを考えたことはあるのか！」

悪い方向にこじれているのは分かる。が、言葉は止まらず、言つてから「しまった」と後悔した。それに涙も止まらない。言つともりがあらうがなかろうが、相手にとつてきつといとわかつていて話す言葉は言つ方にとっても痛い。誰かを殴るとその殴つた手も痛いようだ。

「ダイスケ殿、もつそのくらいで」

「はつ！……申し訳ない、白虎。ぼつと出の人間が言い過ぎた。アマテラス、君にもたくさん考えた上での行動だつたんだろ？ごめんな」

「いや、こつちこせごめんなのだ。ボクは遠い昔、まだこの地が重なる前、この世界の守護者たる任を受けたのだ。神という存在から。そこでの父としての役割は悪に落ちた魔を滅し力のない魔族を守る

」と。その方こそボクにとつての父だったのだ。今はその方の力をほとんど感じなくなってしまったが故に、ボクは魔族を魔物へと落とすこの現象を何とかしようとしたし、よって今を生きる魔族を結果的にないがしろにしてしまっていたのだ。……目が覚めたのだ。神のご加護が薄れているこの世界、またの方に会えるかは分からなければど、次に会ったときに胸を張れるような生き方をしなければならないのだ』

「どんよりと場の空気が沈んでしまった。

「神か……、お、ノルン出来た？」

『はい、バンブーサックス仕上がりました。結構前に出来ていたんですけど言いづらくて……』

『いや、変に話の腰を折るよりいいよ。空気読んでくれてありがとう』

『いえ。ではリングを広げてみてください』

リングを広げてバンブーサックスを出す。場の空気を読んでいいなこと甚だしいが、音を出してみる。

「結構いい出来じゃないか。何か吹いてみよう。まずは童謡かな。こないだオトヒメさんとも会つたし、浦島太郎から」  
魔族はまだ沈痛な表情が消えなかつたが、浦島太郎と聞いてユリカとシンが反応した。

（

「？」

首をかしげているユリカとシン。

「ああ、絵本だと音が伝わらないのか。そうだ、アマテラス！ いつ

までも落ち込んでないで浦島太郎歌つてやってくれよ

「……ああ、分かったのだ。ユリカ、シン、よく覚えるのだ」

「むかしむかし浦島は助けた亀に連れられて龍宮へ城へ来て見れば絵にもかけない美しさ……」

その後もいくつか童謡を教えた。特にこの世界にないものの描写が入るものは伝えにくいので限られる。

それでも歌と童話がつながるのがうれしいようで、結局ミナトまでの行程はほぼ即席音楽会で終わってしまった。それにウィルスへと向かう人が他にもいたらしく、ミナトへ近づくにつれて合唱の人数が増えた。楽しかったからよしとしよう。

ミナトの城門をぐぐる。城門と言つたが厳密には正しくない。ただ見た目は城門だった。

「おお、すごいな。人口はミカド城下町より少ないはずなのに人の活気もすごい、すでに夕方なのに。ウイルスとの交易があるせいかもしれないが。そしてミナトの入り口にいた衛兵に先導され、

ある宿についた。王族など、重要なお客様の宿らしい。かなり上級なようで、他の宿には入り口から覗き見える中から酒場兼用と分かつたが、その宿には重厚な扉があつた。扉をくぐると受付らしきものもある。ふらふらしていたある入り口から中が見え、中は上品に食事する小奇麗な客が見えた。箸の使い方はいい加減だつたが、ウィルスからの文化らしいナイフとフォークを使うものもいた。金髪でミカドには珍しい髪の色のところを見るとウィルスからの客かもしれない。

はつきり言つて苦手だ。お上品に食事よりもここに来るまでに見た屋台のメシのほうがうまそうだ。

「はいっ！サンカイ王様、自分のように一番王に仕えている期間の短い者にはこのような上等な場は分不相応でございます。明日の朝一番にお迎えいたしますゆえ、今日は失礼いたします！」

衛兵はさもありなんという顔をしていた。俺のことを知っている人間はみな突然の俺の言葉に固まっている。冷静になつて何か言われる前にその宿を出、駆け足で角を曲がる。追撃を避けるためだ。

「ふう……」

『いいんですか？ダイスケ様？』

『いいんだよ、あんな疲れそうな所。ああいう疲れそうな所は王族の仕事でしょ。それにたまには家族水入らずもいい』

『そうかもしねりののだ。自分のやる事以外で面倒なことはごめんなのだ』

「おおっ？アマテラスか。……なんだよ、ほかの人も」

「家族水入らずを進呈しただけだ。それにどうもあの宿はウィルスがぶれでな。友魔とは言え、魔族をあまり歓迎しない感じがしたし

な

「ここはまだ安全だ。我がいなかつと危険はあるまいよ。それに  
我はいまいちミニナートの町長まちおおきを信用できぬ。クラヒマツハは付き合い  
が長いからそうでもないが

「ダイスケといったほうが面白そつよね」

「ではみなでどこかで食事しましそうか。といつてもどこまで食事  
が必要かわかりませんがね」

順に白虎、ケルベロス、ティターニア、そしてオベロンだ。

「よし、食事にしよう。あ、オヤジさん、それ何？」

ふと皿に入った屋台のオヤジに声を掛ける。

「お、兄ちゃん、えらく美形の魔族と強そうな魔族連れてるね、う  
ちを知らないとはミカドからかい？まあいいや、これは『おでん』  
っていうもんさ。イクサでしか取れない卵なんかをふんだんに使つ  
ていろよー！」

見るとおでんによく使われる卵、大根、後はイモなどおでんとい  
うより煮物だ。

「ほひ、2皿ほどもらおつか」

「あんがとよー！」

「おお、案外うまい。ほら白虎もケルベロスも食べてみないか？  
櫛に刺さったそれらを白虎とケルベロスの口の前に持つていく。  
ぱぐりと口に入れる白虎とケルベロス。

「これはなかなか……」

「人の料理というのもいいかもしだぬ

そんな咳きを聞きながらおでん屋のオヤジに魚の白身をすりつぶ  
しかためて一緒に煮てみたりどうかと提案しておいた。崩れそうな

ら一回軽く油で揚げても焼いてもいい。面白がりだ、試してみようとのオヤジの言葉を受けながらそこを後にすると、いつも思つがここの人たちは面白がつなら何でもいいんだろうか……。

その後もやはりイクサから仕入れたという肉を使った焼き鳥屋のよつなものにも行った。焼き鳥屋のよつ表現は、鳥だけではなく魚や肉も串焼きにしているからだ。むしろ海に近いミナトでは魚がメインだったからだ。

「ああて、どこの宿にしようかな？」

「どじか案があつて飛び出したのではないのか？」

「初めての土地でそんな案なんかあるわけもなく

「あ、ダイスケ、あそこはどうです？」

オベロンの言葉にそちらを見ると、きれいなお姉さん方が手招きしていた。オベロンはまんざらではなさそうだ。

「おいつ、あれば娼館じゃないか！ あんなところで泊まつたらアマテラスはおろかユリカやツバキさんにどうされるぞ？」

「娼館とはなんです？」

「金で女を抱く店」

「おお、なるほど、いいじゃないですか」

「マジか、オベロン？ まあこいや、明日の朝に聞に會ひながら行けば？」

「金ならやるよ」

空氣読めないと甚だしい。金を受け取ったオベロンは一直線に向かつていった。

ちなみに女性陣、アマテラスとティターニアの視線は氷点下だ。

「オベロンって……」

一応ノルン経由でウルズに聞いてみる。

『あそこ、ボツタクリじゃないよな?』

『ミナトでの評判は高いようです』

『じゃあいいか』

「そういえばここは魔族が少ないねえ」

「そうね、ここにいる友魔はほとんど貿易でウイルスと行ったり来たりじゃない?今いるのは友魔のいない人かな。魔導師にならない、もしくはなれなかつた独りの人たち。友魔がいなくてもここは生きやすいから。海の幸、牛や豚の飼育、魔族がいなくても生きていけることをここは証明しているわね」

ティタニアが説明してくれた。北からの魔物をミカド城下の者が抑え、南からのものはイクサが抑える。たしかに過ごしやすいのかもしれない。

さあ、宿をどうしようかとぶらついていると宿屋街のか客引きのつるついている所に出た。というより屋台街の途中に色街の通り、宿街の通りなどが枝分かれしている。隠れてノルンの情報をフルに使い、隠れた名店的などんこつのラーメンもどきをだす店に入り、注文する。自分の分だけは後回しにし、宿を探してくると言つて宿街の客引きの一人に声を掛ける。

「オススメはどこだい?特に魔族も安心して泊まれる所

「魔族も?それはなかなか難しいねえ。ウィルスとも交わりがあるここは魔族は少し敬遠されちまうんだ。さつきの麺屋に入った人たちかい?女性2人はいいけどあの2頭の魔族はなあ」

あの2人も魔族だと言つべきか言わざるべきか。もう少し詳しく話をしないと分からない。客引きを連れて近くの酒場に入る。その客引きも分かつていいのだろう、おとなしくついてくる。

「オヤジ、この旦那にいいのを頼む。俺には麦酒を」

「兄さん、金は大丈夫なのかい？これからウィルスにむかうんだろ？まああの2頭は向こうの歓迎館とは名ばかりのところで止められちまうだらうけどよ。ウィルスでは下手したら魔物に見られて討伐対象になっちゃうしな。」

「なるほど。けど彼らも大事な家族だ。あまりひどい所にはな」

金を一握り客引きのポケットにつっこむ。

「そりゃかい、兄さん、ほんとになにも知らないんだな。じゃあ少し教えてやるよ。ミナートで生まれた人間で魔族が嫌いなものは1人としていない。当然だ。ただ最近多少ウィルスにかぶれた町長があり魔族にいい顔をしないんだ。今はミカドにいるクラさんの仲間や友人、弟子が抑えているから、屋台なんぞでは平気なんだが、宿に泊まるとなると、町長の息がかかっていない所がいい。」

「そうなのか、初耳だ」

「まあクラさんがいれば大丈夫だと思つていてるがね。じゃあ一ついことを教えよう、と言つてもここに何回か来たやつらは知つていることだが、色街の一角に魔族が営んでる宿屋がある。そこへ行ってみな。場所は色街にいる女どもに聞けば分かるだろう。色街は結束が強い。町長の影響もない」

「ありがとう、いいことを聞いた。オヤジ、旦那にもう一杯と勘定」  
そう言って支払いを済ませ店を出た。

屋台でワイワイと食事するアマテラス達に近づき、ラーメンもど

きと麦酒を頼む。アマテラスが聞いてきた。

「どうだ？宿は見つかったのか？」

「うん、こここの町長が結構ひねくれ者でね。魔族が普通の宿に泊まるのは難しいからしい。色街の一角にある魔族の営む宿がいいって」「そんな話は我は聞いておらぬが」

白虎が言つ。

「上に立つてると分からぬこともあるんじゃないの？ミカド城下はいいけど、ウィルスとのつながりがミカドより強いここだとなんか本音の話を聞くのは難しいよ？普段から接していない分余計に」「そういうものか……」

なにやら考へ込んでしまった白虎に、「サンカイさんと言つてもいいけど、今はやめた方がいいかも。こちらはすぐごどつてできないし、ウィルスの考へも聞かないと。クラさんにも相談してからの方がいい」と言つておく。

「じゃ、行こうか」

屋台の女性においしかつたと告げ、店を後にし、色街の方へ向かう。と、先ほど別れたばかりのオベロンがいた。

「あれ、オベロン、どうしたの？お楽しみじゃなかつたの？」

「いやあ、お酒も食事もおいしかつたんですが、泊まるのだけはやめた方がいいと言われまして。近くに魔族の宿があるからそこへ行けど」

「魔族だつてばらせなければよかつたんじゃないかな」

「でも、それは不貞だと思つたんですよ」

「じゃあ娼館など行かなければよいのだ」

「そりアマテラスが言つ。ティタニアも頷いている。

「たまには他の女性と話をしたいじゃないですか、あ、あそこですか  
よ、行きましょう」

やはり空気を読んでいない。俺や白虎、ケルベロスともに手で顔  
を覆つている。アマテラスとティタニアにいたっては言葉もない  
ようだ。

「あ～あ、女性を怒らせるといわいぞ～……とにかくオベロンって  
あんな性格なのか？」

「ツバキ殿のいない所ではああだな」

「自業自得だ」

「こんばんわと宿の扉を開ける。

「いらっしゃいませ、なんめいた……父様?！」

もうすっかり慣れた光景だ。あえて何も言わずその友である女将  
と部屋の契約をする。俺が一人、あとは大部屋にしてもらつた。ち  
らつと白虎達を見、「家族水入らずだ」と囁つておいた。

ミナトにミナトならではの問題があることが分かつた。今回は

何とかしのげたけれど、次は分からぬ。

「神に祈ろうか……ああ、アマテラスが存在が薄れたと言つていたな。じゃあ実在する天照大御神……アマテラスは問題起こす方のような気がする。ご先祖様は……この世界の人からすれば俺が先祖の1人か……。どうしたものかな……」

そんなことを考えつつゆっくりとまぶたを閉じた。

第13話 ウィルス国（前書き）

遅くなりましたが、今後ともよろしく……

朝の鐘の音が聞こえる。徐々に意識が覚醒していく。

「ふう、今日はアマテラスの襲撃も無いようだし、静かない朝だ」  
着替えをすませて食堂に向かう。女将に朝ごはんを頼みながら、魔族の人たちはまだ起きてこないのかとたずねる。

「そういえばまだ起きてこないねえ。朝ごはんは用意しておくから、その間に起こしてきただらどうだい？」  
「やつする」

コンコン

軽くノックをすると「ひづれ」と聞こえてきたので部屋に入る。

「おはよひづれこます。やつぱり最後まで寝てるのはアマテラスか」「おはよひづれ、ダイスケ。父様はなかなか起きがよくないのでひづれ起こさうかと考えてこいる所ですよ」

なぜか仲間はずれのように布団を離されていたオベロンが布団をたたみながら答える。理由は分かっているから聞かない方がいいだら。

まわりの友魔は幾分うれしそうにアマテラスの寝顔を眺めている。お腹も減ったし、俺がアマテラスを起こさないといけない理由はないだろ。

「俺は」「はと食べてくるから、間に合ひづれ起こしてね～

特に答えも聞かず食堂に戻る。

「はいよ、朝食。みんなは起きてたかい？」

「約1名以外は。いただきます」

やはり港町とこいつ」と魚がつまむ。「飯が進む。お茶も飲み干して一息つく。

「は～。女将さん、おこしかったよー。」ちひわわ

「お茶はどうだい？」

「まだみんな来ないからもう少ししてただこいつかな」

「……おはよ～なのだ～……」

「おはよ～。ってなんだ？その頭？ぼやけだじやないか。アメノトリフネも落ちそうだぞ？ま、いいか、よく眠れた？」

「うん。でも目が覚めたらみんなに覗かれていたのだ。あんまりいい気分ではないのだ

「やつか……」

友魔はばつが悪そしそうっぽを向いてくる。

「まあいいか、アマテラス、『飯は？』

「いただくのだ」

「女将さん、お願ひします」

「はいよ～」

「魚がおいしいのだ」

「だね。後はアマテラスの髪を何とかしないとな」

いただいたお茶も飲み終わり、アマテラスの後ろに立ち髪を梳く。さすがは強力な魔族か、変な癖があつという間に取れてきれいなストレートになる。が、あまりそれだけでも面白くないので横から後ろにかけて髪を三つ編みで編みこむ。最後は後ろでまとめて、アメノトリフネに髪留めになつてもらつ。昔美容師の友人に教わつたものだ。元気にしているのだろうか、いや元気に生きることができたのだろうか。少しだけ感傷的な気分になつてしまつたが、アマテラスの髪型もそれなりに納得のいくものになつていた。

「まあ！父様かわいらしいですわ！」

ティタニアが感嘆の声をあげ、白虎やケルベロス、オベロンはうんうんと頷いている。

「そ、ご飯終わつたか？サンカイさんたちをあまり待たせても悪いからそろそろ行こうか」「分かったのだ」

王家の人たちが泊まつた場所に着いたとき、ちゅうど顎も出でくるところであつた。内心遅れなくてよかつたとホッとする。

「おはようございます」「おはよう、ダイスケ、よく眠れたかしら？」

「ええ。料理もおいしかったですし、また来たいですねえ」「ま、機会などいぐらでもあるが。はて、コリカはどうした?」

サンカイさんにそういうわれてふと見回してみると、コリカとアマテラスがなにやら言い争いをしていました。そしてこちらに向かつてまくし立ててきた。

「ずるいです!」

「なにが?」

「アマテラスさんの髪、ダイスケさんがやつたと聞きました!」

「で?」

「私にもしてください!」

「コリカにはカチューシャがあるからいいんじゃないかな~?」

「でもっ!」

「わかつたよ。ティターニアに教えておくから」

「ありが……って、ちがいます!」

「ダイスケ、私に振らないで!」

「2人とも呼ばないで」

「ふふん、コリカにはまだ早いのだ。ダイスケ、明日も頼むのだ」

「ああ、先ほどアメノトリフネに髪型を記憶してもらつたから大丈夫」

夫

「ちがうのだつ!」

「こつちもか。天下の往来なんだからあまり騒がしいのはどうかと思つんだけど。そこは「他の男に頼んじやうから」と氣を引くもんじゃないかな」

「他の人に頼んでしまいますからね」

「他の男に頼むのだ」

「もう遅いつ。ざんねんつ」

誰かがブツと噴出した後は笑い声に包まれ、からかい、からかわ  
れながら港への道を進み、船に乗った。

「出港だー！錨をあげるー！」

「さあて、ウイルスにつくまでなにをしようかなー？」  
『ダイスケ様、まずはウイルスについてこちうでわかったことを説  
明させてください』

「ああ、ノルン。……いやこの声の感じはウルズかな？」

『はい、ウルズです。皆様と情報のすり合わせをしたいと思いまし  
たので、話ができる場所へお願いたします』

「わかった。みんなを連れていくね」

「さて、第一回ウイルス対策会議を行いますーまずはサンカイさん  
たちからウイルスについて聞きたいんです。そしてウルズの情報と  
食い違いがないか調べようと思います」

「なるほど。といつてもわし等はウィルスに来ること自体こんな行事でなくてはないのでな。身分を隠してウィルスを旅をしたのもすでに先代ウィルス王の時だ。ではまずは一般的なことから話そうか」

体の外見的な違いはない。ミカドに生まれた人と違うのは、魔力を持たない人が生まれてくることがあることとほぼ金髪だと言うことだ。そして魔力の高い者ほど高い身分になる。魔力を持たない者は兵士となり、魔術師を守る盾となるか、魔物を足止めし、その魔物とともに魔法で焼き扱われる運命だ。それは王族も例外ではなく、王家と4つの町を統べる貴族の仕事とは魔力の多い子孫を残し教育を施すことだ。そしてその王家と貴族に差はなく、その世代で一番魔力を持つ者が王となる。ある意味で癒着のできにくい制度ではある。民はもれなく幼少時に学校に入り、魔力のある者はその使い方と、さらに兵士の指揮の為の勉学を。魔力の少ない者は商人など。魔力のない者は兵士として極力生き延びる為の体作りと技を。所々ウルズの説明もはさみ、ウィルスの説明がなされた。

「効率的ではあると思うんですけど……。感情がそれを認めてくれないというか。うまく言えないんですが。ま、難しいところはサンカイさんにお任せして、俺はユリカの呪がどうにかなればいいです。魔族、ミカドよりの俺にはあんまりウィルスにのめり込む理由もありませんし」

「うむ、ユリカの件は最優先だがそれを王は知っているのだろうか

……

「王は知らない方がいいと思います。というより、いろいろ言わず、内密に処理してしまえば王としても貴族の独断だつたと対外的にいえるでしようから」

「そうだな。頼めるか?」

「アマテラスとアメノトリフネ、ノルンたちの手助けがあるなら大丈夫でしょう。魔力的ならアマテラスとアメノトリフネ。科学的ならノルンたち以上に頼りになる人はいませんよ。問題は……」

「問題は？」

「俺が役に立てるかどうかでしょうか」

「ふふ。頼りにしてあるよ」

「頑張ります。そういうえばサンカイさん、なぜこちらが向こうに行く方が多いんです？」

「ミナトの町を見たか？だんだんウィルスよりもになる人がいるようだ。わしがお人好しなせいもあるが、ウィルス王にくみ易しと思わせておいて心の内をつかもうと思つておる。ウィルス王の思惑を少しでも引きだそうとな。悪いやつではないんだがつかみにくい所があるので。加えてウィルス王が高齢だ。ワシ等と違い、長くても80年ほどで寿命がくる。他の者の入れ知恵か、そうでないかがわからないとミカドへのちょっとかいもどうなるかわからん。慎重すぎるかもしれないがそう考えて動いている。それに、ウィルスでは赤い月に惹かれた者は数日中にはなるのだ。そして少數だがなぜか赤い月を克服して戻つてくる者がいるそうだ。その者たちに直に話を聞くためにもウィルスに行つた方がいいと思つている。原因はさっぱりわからんのだが」

「ではウィルスでは赤い月の脅威はあまり知られていないんですか？」

「もともと少しこずるい人たちが多いからな。ミカドと違つて赤い月の影響が最初のうちはあまり出ないらしい。そして大事を起こす前に姿を消すと」

「それをウイルス王には？」

「魔物による人さらいは赤い目をしたものに限らん。だからこつちも聞くことはしないでいる。ユリカのことがなくても今回はアマテラス殿について来てもらうつもりでおつた。ま、ダイスケを何とか丸め込めばアマテラス殿もついてくるだろうと思つていたが、こん

「アマテラス殿、なに簡単に行くとは思つても見なかつたがな。  
とぞお願いいいたします」

「お願いします」

実際に会ってみなし

「ようじくおねがいいたします」

100

「錨をおろせー！」

夜だ。ウィルスの国は案外近く、航海も1日満たない程であつた。港の近くに城があり、城の近くに貴賓館がある。そこへ向かう。白虎やケルベロスは人気の少ない夜に来て交歓会が終わるまでそこにいることなる。町の人々に余計な感情を与えないためだ。

「さて、リリード一晩過ぐし、明日朝に王に会うことになる。他国であるし、いつもの朝のようなドタバタは控えてほしい」

「サンカイさん、俺が悪いみたいな言い方しないでいただきたいん

ですが……

「ダイスケに言つておけば一番効果的かと思つてな」「やうですか……」

「そりだつてよ、アマテラス」

「ボクはだいじょうぶなのだ」

「お前が一番心配だがな。そういうえばアマテラスは王に膝を付けるのか？」

「ボクだつて生まれたときから一番上だつたわけじゃないのだ。作法くらいや常識くらいわきまえているのだ」

「ホントか？まあ何か言われてもスルーしてくれよ」

「何かすごくバカにされている気がするのだ」

「気のせい氣のせい。……おや？」

最初はただの布切れの「ミミ」と思つたものがピクリと動いた。魔力体になりだいぶ上昇した視力で気がついた。

「なんだ？」

「どうしたんですか、ダイスケさん？」

「いやなにかが動いたんだ。ちょっと氣になる」

聞いてきたユリカと傍にいたアマテラスを伴いその「ミミ」のようなものに近づく。と、それは人だった。まだ子供のようであつたが、結構な怪我があり、男女の区別もつかないほどに汚れきつっていた。

「ユリカ、回復魔法を」

夜中であり、あまり大声を出すわけにもいかず、ダイスケはその

人を支え、コリカに回復を頼む。ついでにノルンにも接続、状態を見てもうひとつ、結構な勢いで殴られたり叩かれたりといったものと極度の栄養失調のようだった。

「サンカイさん、こういった人はウィルスでは普通なんですか？」  
「いや聞いたことがないな。ウィルスの国民はよくも悪くも管理されており。人材は特に能力に関わらず貴重なものであるといった考えが國王及び国民に深く存在するからな」

「じゃあ、非常事態って訳ですか。ユリカ、どう?」

「ええ、傷は大丈夫だと思います。頭には傷がありませんでしたし。絶対とは言い切れませんが」

「しあうがないな、落ち着くまで連れて行くしかないのかな。サンカイさん、ツバキさん、どうしましょう?」

「ダイスケがそう判断したならないですよ。わたくし達に対応できる暇があるかわかりませんので完全にお任せしてしまおうになりますが」

「うむ、王家はどうしても明日の準備と明日の会のために暇がないからな」

「わかりました。こちらで対応します。じゃ、ケルベロス、乗せてつてくれ」

「我がか?」

「どうせ危険がなかつたら数日貴賓館で食つちや寝するだけだろ?」

「むう……

「よひしく

「……是」

多少のイベントがあつたが後は特に町の人見られたりといふこともなく貴賓館に着いた。助けた人は正直風呂にでも叩き込みたい程であつたがそれもできない。寝つきりや意識のない人を清潔にす

る魔法でも考へようと思つた。そういうた道具というか機械はあるにはあるのだが、いかんせんマジックの有効範囲以上のスペースを使つために取り出せなかつた。

貴賓館ではウイルス産の酒などを頂戴しながら遅い夕食をとり、明日に備え眠ることにする。朝のドタバタの原因にもなつてゐる魔法障壁の訓練はやめておいた。

⋮⋮⋮

2日連続のさわやかな目覚め。どうもアマテラスは枕が替わるとあまり寝られない性格らしい。少々どんよりとした表情で食堂に入つてきた。

「⋮⋮⋮」  
「どうしたの、アマテラス？」  
「枕を持つてくれば良かつた……」  
「……そつか……まあ、朝ごはんにしよう。今日は大事な日だからね」  
「わかったのだ……」

とてもない大きさの城門が控えている。これを見ると//カドのものは申し訳程度と思えてくる。

「でかいですね~」

「国が大きくなるまでは魔物の脅威から守つてきた城門だからな」「なるほど」

衛兵に案内され、謁見の場に着く。サンカイさんとツバキさんは軽く会釈ですむが、こちらはそうもいかない。作法はいまいち分からなかつたが、ユリカやシンをまねして膝をつき頭を下げるようにした。隣ではアマテラスもそうしてくれていた。ありがたい。

「よく来た、サンカイ殿。ツバキ殿もいつも増してお美しい。ユリカ殿も、シン殿も元気そうでなにより」

「ウィルス王もお元気そうでなによりです」

「そつかしこまつた言い方はやめにしてくれんか?おぬしに言わるといそばゆい。短い付き合いでもないだろ?」

「...それなら。王も相変わらずで安心したぞ」

「うむ、.....で、後ろの者は?忘れておつたのならすまぬが「新しく親しい配下が増えたのでな。披露も兼ねてと思つてな」

「どうか、そなたら、名は?」

「ダイスケと申します、ウィルス王」

「……妻のアマテラスと申します」

ビシリツ

前方で膝をつくコリカさんから直視しがたいオーラが感じ取れる。俺は何とか声を出さずにすんだが、こういう場でそれはあんまりだと思う。

「……なにかとても面白いことが起こりそうだが、今は後回しにしてよ。サンカイ殿、今回は以前手紙にも書いたが後継者のことだな。わしももう長くないだろ。争いにしないためにも今のうちに後継者を決めておこうと思つてはいるのだ」

「なにか問題でも? 魔力の高いものが王になるのではなかつたのか?」

うむ、ノーラの姫が一番の魔力を持っているのは変わっていない。

だがな、今までウェストの王子と恋仲で、2人で国を盛り立てて欲しいと思って当人たちもそのつもりのようだったのだが、突然姫がマリンの王子と一緒になると言い出してな」

「それは困りましたな」

「うむ、姫の急な心変わりも気になるし、ウエストの王子もかなり落ち込んでしまつていてな……」

「おー、分かりやす過ぎないか? ノリカのことを考えても、原因はマリンの王子とかいつやつだらう?」

「やうとしか考えられないのだ。なんとかそいつと会つ方法がないものかな？」

「まだにどす黒いオーラを出し続けるコリカをできるだけ視界に入れないうちにしてアマテラスと小声で話す。と、そこへ天の声ともにつべき提案が降り注いだ。

「こつまでもこじり合ひして話をしてもいいかんだろ？  
わしらは別室にて少し話をしよう。コリカ殿とシン殿、配下の2名  
も今後とも付き合ひ機会のあるであろう、姫や王子と会つてみてく  
れんか。同世代なら言いやすいこともあるだろ？」

「ありがとうござります、ウイルス王。では私たちには選出させてい  
ただきます」

「つむ、ま、今はその問題のせいで皆城にある。衛兵にでも聞けば、  
場所も分かるだろ？」

「はい、それでは……」

こまだにこじりて顔を向けよつとしないコリカにどう声を掛けた  
らいいかわからず、重い雰囲気のまま侍女の案内を受ける。心なし  
か侍女もつらそうだ。

アマテラスに小声で謝つたらどうだと提案してみるがどこ吹く風  
だ。

⋮ ⋮ ⋮

そんなんうちにノース姫とマリンの王子と思わしき2人がいる場所に着いた。城の者の中でも特に限られた者しか入れない庭園のベンチに2人はいた。

「王子様、『機嫌麗しゅう』

不機嫌オーラをぴたりと隠し、といつより恐怖のオーラに取つて代わられたというべきか。100パーセント以上の確率でユリカを陥れたのはこいつだらう。

かなりのドレスに身を包んだおしとやかそうな姫がいた。隣には愛を語り合つにはぴったりな雰囲気をかもし出している王子と呼ばれた男があり、その男はこじれを向くと姫とともに立ち上がり、優雅な礼をとった。

「ユリカ姫、少し見ない間にまた一段とお美しくなられましたね。このマリン、心よりうれしく思います」

なんでテメーがうれしく思つんだ?つかとなりに女がいて言つていいセリフか?むかつくわ。

「で、そちらの美しい女性はどうぞよろしくなさいましょ?」

俺とシンはガン無視かよ!

「ボクはアマテラス。これから国を切り盛りしていく立場として色々指導を頼むのだ」

アマテラスでさえ、すでにかしこまったく言い方ができなくなるほど氣分が悪そうだ。俺やシンは言わずもがな。

「アマテラス殿、ソルジャーをよろしくお願いいたします。それから、おはぎのじるじここれを

差し出してきたのはペンダントだ。どこかで見たことがある。ヤバイと思ったが、アマテラスに注意する前にアマテラスはそれを受け取ってしまった。

「……」

無言でそれを見つめるアマテラス。マリンの手元に向かふと一瞬かすかにニヤリとした表情をした。

せられた！

ヒ、

グシャツ  
ボウツ

華奢な少女にしか見えないアマテラスが驚くべきほど腕力でペンダントをつぶしたかと思つたらつぶれたペンダントが派手に燃え上り、灰も残さずなくなつた……。

マリンの王子は呆然としている。俺はハツとしてアマテラスに尋

ねる。

「大丈夫か、アマテラス！？」

「大丈夫なのだ。これは呪術なのだ。色々な宝石と自らの血を魔力によつて融合させ、宝石の種類によりさまざまな効果を出すものだ。この宝石との融合の効果は相手の自分への想いを強くさせるものなのだ」

「よく知ってるな」

「ボクの元の世界にも力を持たない人のような種族がいた。彼らは恐怖心をなくしたり、種族の団結心を高めるため、敵を籠絡、もしくはスパイさせるためなどに呪術を開発したのだ。ボクの知っているものと少し違うけど根本は変わらないと分かったのだ」「で、どうすれば解ける？」

「それは……」

「つと、テメーは少し眠つてろ！」

アマテラスの行動に顔を青くしたマリンの王子だったが、アマテラスの解説で今度は徐々に顔が赤くなり、しまいには腰の剣を抜きはなつ所だった。とつさの魔法だったのでつい姫とコリカ、シンにもかかってしまったが、まあだれかが怪我をするよりいいだろうと思うことにした。

「で、どうすれば解ける？」

「ペンダントを壊せばそれで終わりなのだ」

「何でユリカのはすぐ分からなかつたの？」

「ティターニアの魔力保護のせいかも知れないのだ。いまいち呪術の力の流れがつかめなかつたのだ。ペンダントに触れなかつたし」

「ユリカたちも何とかなりそう？ ユリカは前にペンダントが外れなつて言つてたけど」

「眠らせたのは都合がよかつた。たぶん起きていたらペンダントを

壊そつとすると暴れたと思うのだ。深層心理にペンダントを外したり壊したら死ぬとあつたとしたら、ダイスケはペンダントを外せると思つか?』

『無意識に外したり壊したりを拒絶するだらうね』  
『やうこいつことなのだ。ではやるのだ』

アマテラスはそう言つとあつと言つ間にノースの姫とゴリカのペンダントを壊してしまつた。そしてマリンの王子に近づくとノルンを介して体のどこかに他の人と違つたといひはないかと調べはじめた。

『人の脾臓にあたる部分に水晶のような硬質な物質が存在します』  
『破壊できぬか?』

『マジックで特定周波をだすモノをお送りしますのでそれをお腹に当て、スイッチを押してください』

「じゃあ、俺がやる」

指輪のマジックから小さなスピーカーのようなものを出し、スイッチを入れる。ピシリ、どこかで聞こえた。

『完了です』

そのノルンの声を受けスピーカーをしまつ。そして一応何があるかもと身構えながら首を起し、

「おはよ〜」

「おはよ〜」

これはコリカとシンだ。

「こ〜は……?」

ノースの姫はどうしてもこいついるかも分かつていないらしき。そ

して……

「ハハハ」

「やあ、マリーン、調子はどうだい？」

「お前は……」

「あら？ キザな王子モードじゃなくなつたのか？ 僕はダイスケ……」

「あたしの夫です！」

「……」

さつきのお返しとばかり即座にコリカ。俺は声も出ない。空氣読んで欲しいなーと思つたり。

「コリカ、それは後でボクとじつかり話しえとじて調子はどうだ」

「調子？」

「ペンドントは外したのだが」

「あつ。外れてる……。ふえ……」

涙を流しているコリカをやわらかく抱きとめる。たまつたものが  
あふれ出るのか大泣きになつてしまつた。

「それらの姫はどうなのだ？」

「はつ！ あたしは何をしてたんだ？ 先日マリンからペンドントを受け取つてからの記憶があやふやだ……。－ むいー・マリンー・なにかしゃがつたな！ オラッ！ キリキリ吐けつ－」

何だこの外見と180度違つ言葉遣いは……。まるで戦士じゃないか。ドレス姿の一見おしとやかな姫が罵声と拳骨を振り回すギャップに呆然としているとすでにマリンの王子はボロボロになつてい

た。いい気味だと思つても今回ばかりは仕方ないだろう。シンも心なしかニヤついている。コリカも泣く事を忘れたように呆然としていた。

惨事になりそうだったので姫を何とかなだめ、まだだつた自己紹介をしあう。そしてぼろぼろの王子と向き合い話を聞くことにする。

「で、王子様、何が起きたか聞かせてくれないか？特に誰かに捕まつた記憶とかないか？」

「……僕は王になりたかった。戦闘でも魔法使いは後ろからの攻撃が主だが、僕は先頭を行き自分の力を見せたかった。だが魔力の使い方がどんなに上手くなろうとも魔力の総量で王を決めるこの国では王になることはできない」

「それは聞いたが、どこから洗脳につながるんだ？」

「昔の大攻勢時にも先頭で突き進みとある強力な魔物を倒した。そのときにその死体は消えてしまつたが、なにかの珠が残つたのだ。それに少なくない魔力があることを感じ、僕はそれを飲み込んだ」「飲み込んだ？それって確かに魔物化した人や魔族の落とす珠のことだよね？コオとかいう」

「うん、シユウとインプが倒れた時にもあつた気がする」

あの時その場にいたシンが肯定する。さらにアマテラスも付け加える。

「コオというものは一種の魔力増幅器官の元なのだ。倒した魔物が強大であればあるほど大きなものを落とす。人や魔族が魔物化した者が持つものなのだ。ただ、倒した直後はその魔物の意志も少なからず残つてるので、すぐ攝取すると魔物化するらしいのだ。浄化魔法や聖域と呼ばれる所、もしくは心というか魂の清い者の近くにあることで魔物化してしまつた者の魂を救い、本来の魔力生成器官

の宝珠になるのだ。それを取り込むことで魔力が増大するのだ  
「では浄化前の珠を取り込んだためにこうなったのか。うーん、仕  
方ないっちゃあ仕方ないが……。そういうえば魔力の上昇は感じたの  
か？」

「大きく上がったという感じではなかつた」

「元からそれなりの魔力があるから当然なのだ。コオの大きさは元  
の魔族の力に比例するのだ。例えばコオの効果で魔力が100上が  
るとして、それを摂取した者の魔力がもともと10ならば本人は1  
0倍程になつたと感じるだろうし、元魔力が10000あれば10  
0上がつたところでほとんどかわらないと感じるのだ。そして我ら  
の中でも特に強い魔族が魔物化したという報告はない。だから膨大  
な力を持つコオはほぼ存在しないと言つていいのだ」

「なるほどね。で、残念ながら王子の体の中のコオは破壊させても  
らつたからね」

「そうですか……。僕はこれからどうしたらいいんでしょ?」

すっかりおとなしくなつてしまつた王子は頭を垂れながらぼそり  
とつぶやく。

「コオがなくなつたのだ。操られていた者たちも正気に戻つただろ  
う。どのくらいまで覚えているか分からぬが、何か言つてくるもの  
がいたらおとなしく謝るしかないのではないか?まあ、魔物に操ら  
れていたと皆には言つておけばいいと思うのだ。だから姫も許して  
やつて欲しいのだ」

「……仕方ねえな。許してやらあ。とちよつと気になつたことがあ  
るんだが、お嬢ちゃんは魔族なのか?」

「うむ、そうなのだ」

「ミカド国にいる魔族の王だよ」

「なんと?！」

「今はダイスケの妻なのだ」

「あたしのです!」

「さやいさやい……

「……！」  
「……！」

「ダイスケ殿と言つたか？放つておいていいのか？」

「俺が何か言つた所でだめだろ？きっと。ことの発端はアマテラスがウィルス王の前で俺の妻だと言つたせいだけね」

「面白い魔族だな」

「ミカドの魔族はみんな面白いよ。面白いといつのは失礼かもしけないけど」

「魔族が……。ノースの北にある魔物たちと混同してはいけないのだな……」

「まあね。会話も普通にできるしね。ミカドの人々もほとんどが魔族と人との混血だよ」

「そちららしいな。こちらの魔物たちは会話すら出来ないからな前に試した人がいるとか？」

「いや、それはたぶんあたししか知らないことだと思つが、言葉の系統が違うらしく全く会話が出来ないんだ」

「ちょっと待つて、文化的な話のできそうな連中がいるつてこと？」

「ああ、誰にも言つていながら、一度魔物の大群から逃げている間に魔物の城に着いてしまい、施しを受けた。やつらも言葉を持つていることが分かつたのはそのときだ。言葉は通じなかつたが、一緒に貰つた食料の傍につたない文字で食べ物と書かれていた。たぶんさらつた人間から得た情報だと思つが」

「俺が聞いてもよかつたのかい？」

「どちらにしても昔の大戦の影響で今は大きな戦を仕掛けられる戦力も指揮官もいない。が、君たちならこれだけの情報でも何か気づ

いてくれるかと思つてな」

「過大評価だと思うけど……」

「ふん、ミカドの魔族の王のことは人づてに聞いている。普通の人間が気安く接することの出来ない存在であることも。ダイスケ殿はもう少し自分の影響力を考えるべきだな」

「うーん。俺もこちらに来てまだ日が浅いからねえ」

「日が浅いとは？」

「信じてくれるか分からぬけど俺はこの世界の人間じゃない。厳密に言えば5000年ほど前のこの地の人間さ。今は魔族と同じ魔力体になつてているけどね」

「そうか。将来あたしがこの国を継げばミカドの上の立場の人々とも上手くやつていかないといけないだろ。いまいち話がぶつ飛びすぎているとは思うが、これからもよろしく頼む」

「いやいや」

ゴリカとアマテラスを見ると何とか折り合い?がついたのかもう言い争いは止んでいた。どういつ結果になつたのかとも心配だが、それよりもやるべきことがある。

「じゃ、王に報告に行くか?」

……

「……と、まあそんな所です」

ノースの姫から聞いた北の魔物のことだけは今は言つていない。

姫自身が半信半疑な所もあるせいだが。

「なるほど。サンカイ殿、お主の配下の者は凄腕だな。どうだ、少しばかりウイルスで遊んでいかんか？」

ウイルス王の言葉にコリカが少し戸惑いの表情をしている。

「そうですねえ。俺が魔族と分かつても皆が普通に接してくれるんでしたら考えてもいいんですけど

「そうか、それは難しいかもしね。まあ今日は盛大に宴をする予定だ。心ゆくまで楽しんでいいて欲しい」

「ありがとうございます」

宴までとあてがわれた部屋で、ノルンの報告が届いた。前日保護した人が田を覚ましたと。風呂を済ませ、今は消化のよい食事を与えたら、少し落ち着いたらしい。ちなみに少女だ。

急いで貴賓館に向かう。

「具合はどう?」

「はっ……いやあっ！」

いきなり暴れだした。やばいな、男に犯されそうになつたのか?ついてきたアマテラスに後を頼み、部屋から出る。ノルンを通して報告を受けるが、アマテラスから念話を受けるかしかないだろ

う。

アマテラスからの念話とノルンの報告で大体の原因が分かつた。名前はコトワリ。女性にしては珍しい名だと思つた。一瞬見ただけだが、髪はウイルスでは珍しくミカドではそれなりに見ることの出来る赤い系統だ。どことなく紫に見えるところもあるが。親は大戦時に剣聖と呼ばれるほどになつた男。大戦の活躍で剣聖の称号を得たが、その大戦後から徐々に魔物による拉致が増えたため、住む先々で結構ないじめがあつたようだ。人とは違う髪の色も原因のひとつかもしれないが。少し前にその剣聖が倒れて寝たきりになり、母親がその分の過労で亡くなつてしまふとコトワリが食べ物を探す稼ぐしかない。それなりに強大な魔力のおかげで戦で多少は稼ぐことが出来ていたのだが、いじめなどにより転居が増えるとその分新しい場所では魔法使いとしての仕事も減り、ほとんど物乞いのような状態になつていていたようだ。ぎりぎりで貞操は守つていたようだが、いくら魔法使いとはいえ、まだ少女である彼女は屈強な男たちに囲まれて恐怖を覚えないわけがないだろう。

仕事を求めセントラルまで来たが、コトワリの顔を覚えていた者たちの憂さ晴らしの相手になつてしまつたらしい。自分に非がないのに不幸をこうむる人がいないわけではないが、さすがに命や貞操に関わるとあっては黙つていられない。何とかしたいと思った。まずは男を見ても平気なくらいまでは回復してもらわないとどうしようもないんだが。

ちょっと情報収集に外を回つてみるか。貴賓館を出るとノースの姫とちょうど会つた。隣に見知らぬ男がいたが、彼がウェストの王子なのだろうか？

「こんにちは」

「やあ、ダイスケ殿。こつちはあたしの婚約者のウエスト」

「どうぞよろしく」

「いらっしゃる。いきなり聞いていいとか分からんだけじゃつ

聞きたいんだ」

「かまわんよ」

「王子や姫の名は？」

「一般的の者と違い、ウイルスの貴族5家の継承者に名はない。単に地名が名となる。現統治者は地名に様付け、息子や娘は地名に王子、姫と付く。ま、親しいなら土地名呼び捨てになるがね。だから継承の折には名が変わることになるな」

「めんどくさくない？」

「それが伝統では仕方ない」

「そう、本人がいいなら」

「あまりよくないのでな。あたしが王になつたら変えるつもりだ。王や貴族だつて道具ではないのだから」

「確かに。頑張つてね。ちなみにこれからどういく？」

「お茶だ。久しぶりにウェストに逢つた気がするのでな」

この地の者でない俺がいきなりコトワリのことを聞いてまわつてもあまりよろしくないだろう。王子と姫には悪いが、事情を明かし手伝つてもらうこととする。

「……やつこつわけで、コトワリとこつ子のことをすこしここりで調べたいんだ。お2人には申し訳ないんだけど、他国の者がそつそつ首を突つ込めないし」

「コトワリ」というと剣聖の娘だろう。結構な魔力を持つ者と聞いている。よし、いいだろ？ ウェストもいいな

「ああ」

.....

⋮  
⋮

とある喫茶店のようなお店にて。

「なんだ、結局八つ当たりに近いではないか……」

「くそー！もう一発殴つておくんだつた！」

「ノース、それくらいにしておけ」

「結局ここの人たちの感情としてはどうなんでしょう？」

「そんなかしこまつた話し方はこっちが疲れるからやめてくれ。あたしと秘密を共有した仲だろ？？」

「何だつて！？」

「魔物は会話が出来るかも知れないって」と俺が魔族だつてことですよ」

「なんだ、それなら俺も知つていて。あんなことがあつたばかりなんだ。びっくりさせるんじゃない。」

「ウーハー……悪い……」

「仲のいい所、申し訳ないけど、結局どうなの？」にじにじや

「あ、ああ」

「そ、それはだな、結局魔力も戦闘能力もないものはこの地では少し低く見られてしまうんだ。それに加えて頭も悪い人間は救いようがない場合が多い。コトワリが空腹で疲れていたところに不意をついて憂さ晴らしをしたのさ」

「とんでもないな」

「しかし、いつもあたしらの日が届く所に置いておけるわけではないしじうしたものか……」

「彼女の家は？」

「わからん」

『現在はノースとウーハーの境にあるよつです』

「なんだ、今の声は？」

「俺の仲間だよ。俺は多少一般の人よりも出来たり知っていることがあるけど、それ以上に色々な方面に特化した仲間がいるからね。ユリカの例のペンドントの件もあったからウイルスに多少目が行くようにしたんだ。ウイルスの人々の生活をどうするつもりはなから安心して」

「そうか、そういうことなら仕方ないな。出来ればウイルスのためになる行動をとってくれるとありがたい」

「将来はウイルスとミカドくらい離れていてもその場にいるかのように話ができるかもしれないね」

「そんなことができるのか

「たぶん」

「楽しみにしておいろ」

「さて、「トワリを一度は家に連れて行かなくてはいけないのではないか？」

「そうですね。ついでに魔物の王に会つて」ようかな

「危険だ！」

「しかし拉致のことを考へても、やつらが少しでも文化的なところがあるならそれに賭けてもいいかと思つんだ。魔物を抜けて行き来するだけなら俺とアマテラス、アメノトリフネがいれば大丈夫だろうし」

「アマテラスとアメノトリフネ……。御伽噺に出てくるいい魔族の王とその妻の名だが……？」

「ウーストはまだ知らないが、ダイスケ殿と一緒に来ている。アマテラス様はかわいらしい女性だ」

「ほう？ 鬼のような苛烈な方だと思つていたが……」

「年をとれば丸くなるんじゃないの？」

「おいくつだ？」

「さあ？ 最低！」せこ

「いたつ。つて、アマテラス、どうしたの？」  
「女性の年のことを言うのはほん法度なのだ」「そんな事いつたつてもうそんなこと気にする歳でもないだろ?」「なにお~！」

ダイスケとアマテラスの漫才?の傍ら、ウムスト王子とノース姫は「ごせんとか聞こえたぞ?もしかして5000か?」

「あたしもだ」

「うそじやないのか?少女だぞ?」

「しかし魔力量は半端ではないぞ?納得してしまう何かがある」「見かけで判断してはいけないということか」「などとこそ言っていた。アマテラスに聞こえていなかつたのがせめてもの救いだらう。

「で、コトワリは?」

「白虎とケルベロスに任せてきたのだ」

「彼らは今回損な役ばかりだな」

「暇よりはいいと思うのだ」

「まあね」

「で、彼女の件、どうする?」

「ノースとウエストの境に家があるらしい。親もいるようだし、そこへ一度連れて行き、出来たらミカドへ移住させたい

「ダイスケ殿、いいのか?」

「ここいらでこじめにあって、食べる事さえきちんと出来ないよつマシだ」

「いじめ?」

アマテラスに経緯を説明する。やはりひどく憤慨してつゝ隠して

あつた後光のようなオーラを出してしまつた。

「アマテラス！抑えて！やつらは姫が懲らしめたから！」

「……そうか。礼を言うのだ」

「見る、王子と姫、完全に畏怖で硬直しているじゃないか」「申し訳なかつたのだ」

「え、あ、いいえ、大丈夫です」

「こちらこそ外見ばかり見てアマテラス様を軽く見てしまつていたようで申し訳ありません」

「アマテラスとアメノトリフネは御伽噺の存在なんだとさ。実在すると分かればそりやびびるわな」

「ふむ、仕方ないのだ。ボクたちの力はそろそろ解放していいものではないのだ」

「外見や言動は小娘なんだけどね〜」

「うるさいのだ」

「はいはい」

その後は和氣藹々とお茶を飲みながら会話を楽しんだのだった。

帰りしな、王子と姫に2人きりの時間をつぶしてしまつたことをわびる。また後でとその場は別れた。城の方向に向かっていくアマテラスとダイスケを見送りながら、ふと王子が言った。

「すごいな、ダイスケ殿は」

「ああ、あのアマテラス様と対等に話している」

「抑えているとはい、あのアマテラス様の力を前にして全く動じていない」

「本人は鈍いだけだと黙っていたが、なかなか」

「コリカ姫の召喚の儀、実はアマテラス様とこの地と重なっているところアメノトリフネ様の願いだつたのかもしけんな」

「 それでもなければ対等に話ができる者などいやしないだろう。ア  
マテラス様ほどになれば」

「今は全てがいい方向に動

「今は全てがいい方向に動いているということか」

「将来は将来であたしたちも力になれるさ。いや、力になれるだけの国にしてみせるさ」

「そ、うだな。俺も手伝ひよー

「当たり前だ。あたしの夫になるのだから」

10

夜の宴はそれは盛大なもので。ウィルス王とサンカイさんには俺とアマテラスがもう少しウィルスに滞在し、北の魔物の城に行つて見る事を提案した。

「危険ではないか？」

「ダイスケとアマテラス様ならば大丈夫だろう」

「アマテラス様？ひよつとして御伽噺に伝わるアマテラス神のことではないだろうな？アメノトリフネ神と並ぶ」

「本人た、ちなみにアマテラス様の髪の後ろにこしてしる髪留めか  
アメノトリフネ様だ」

とたん、ウイルス王がアマテラスに向かい膝をつく。宴が終わつてからにすればいいのにと心の片隅で思いつつも、アマテラスとう存在はかなりのものであるのだろう、彼らにとつて。

「アマテラス神には今までの『無礼重ねてお詫び申し上げます』  
「なんなのだ？急に。そんな程度のことでボクは怒ったりしないの  
だ。それにこの地にどんな風にボクのことが伝わっているか知らな  
いけど、ボクはアマの町と魔族、広げてもミカドの国の人々にしか  
色々してあげていないので。だから気を使わなくともいいのだ。力  
の強さの関係なしに、ウイルス、ミカド、魔族の町アマ、各々のト  
ップというだけの考えでいてくれたほうが気が楽なのだ」

「いえ、伝承にあります。我らの祖先がミカドから出るとき、饑別  
として守り神をつけていたいたと。ただの石のように見えてそれ  
は旅の、そしてこの城の城壁で己の身を守るために役に立つたと」

「……」

「アマテラス、もしかして忘れてんのか？」

「そそそ、そんなことはないのだ」

「アマテラスの力の1000分の1でもそりや当時の人にとっては  
神のごとき力だろうね。その守り神ってどこにあるんですか？」  
「この城の地下の一室に祭られている。現在はその力のほとんどを  
失っているようだが、その力をわしらのために使つてもうつしたこと  
をウイルスの民は忘れてはいけないと思つてある」

「王子たちはこの話は知つてました？」

「初耳です」

「王にのみ伝わるものだ。軽々しく放てる情報ではない。ただ、こ  
の地に父なるアマテラス様が参られた時にはそこへお連れするよう  
にと長年伝わっている」

「ならば行つてみなければならないでしょう、アマテラス、忘れて  
いたことはもういいから行つてみよ。といふか俺も行つてもい  
いんでしょうか？」

「アマテラス様の夫君であるならわざうに止めることは出来ません  
な」

ウイルス王はにやりとして言つ。

「勘弁してください、アマテラスもコリカも悪乗りしただけなんですか？」

「なんと、コリカ姫もか。サンカイ殿、これはおもしろくなりそうだと思わんか？」

「ウィルス王は他人事だからそういうて笑つていられるのだ。当事者にしてみればたまたものではないだろうよ、なあダイスケ？」「これだけの美人2人では俺が捨てられる確率の方が高い気もしますが」

「それはどうかな？ ウィルス王よ、国政はとつとノースの姫に任せミカドに遊びに来い。毎日なかなか楽しいぞ」

「うーむ。それはひどく魅力的だ。アマテラス様に友人として接する機会はあるだらうか」

「ミカドに住むものはみな友人さ。これからはウィルスもそうなるだらうよ」

「そうか。楽しくもない国政にこの身を費やしてきたが、人生の最後にこんなに楽しみなことが起ころうとは。長生きするものだな」「きちんと王位を継承してからだぞ」

「分かつていてる。ではアマテラス様には祭壇の間へ」

「分かったのだ。それから言つておくが、ボクの事はアマテラスと呼び捨てでもかまわないのだ。ここにいる者たち、ミカドの者は言わずもがな、ウィルスも今後長い友人となると思うのだ。些細な相談なども出来る友人として付き合つて行きたいのだ。今後ともよろしくなのだ」

「結局アマテラスが一番えらそつじゃないか。なあシン？」

「ダイスケ兄ちゃん、ぼくに言わないでよ。アマテラス姉ちゃんの目が怖いよ！」

あたりは将来に不安をもつものではなく、明るい未来があると確信できるような明るい笑いに包まれた。

「リヒが祭壇の間だ。埃っぽくて申し訳ないが」

何年も開けたことのないであろう扉を押し開け中に入る。中には小さな石がちょこんと置いてあるだけだ。アマテラスはそれに近づき、柔らかな後光を出しつつ石に光を当てる。

「……父様……」

石というか城全体が鳴動し発音しているかのように声が聞こえた。

「思い出したのだ。スダマだな」

「はい。今は城全体の石や無機物に我が魂が通っています。父様が来られたときに挨拶すべきでしたがそれだけの力も残っていない状態でした。申し訳ありません」

「よくぞウイルスの民を守ってくれた。礼を言つのだ、ありがとうございます」「もつたいないお言葉です。我はたいした魂も持たない低級魔族。たいしたことも出来ず申し訳ありません」

「この地を抜けると言つていた当時の者たちを守るには普通の者は見えない者をつけるしかなかつたのだ。北の魔物のこととも多少分かつた今となつてはもつと力を与えてやればよかつたと感じてあるのだ」

「しかし魔族と袂を別れた当時の民にこれ以上の餞別も出来なかつたのも事実。父様の決断は最良でした」

「そいつてくれるるにありがたいのだ。これからもよろしくなのだ」

「また力を注いでいただいた今、安心しておまかせを」

「うむ」

「スダマ殿と言つたが、わしはウイルスの王。今までの守護、礼を言わせて貰う。それから今後力のない民を守るためにお力添えを願いたい」

「ウイルスの王よ、あなたが国のために尽力しているのはいつも見てきた。我にできることは少ないが出来るだけのことをさせでもらうと約束しよう」「う」

「ありがとうございます」

⋮⋮⋮⋮⋮

「なんか全てアマテラスの手のひらの上みたいだなあ」

「スダマのことに関して言わせて貰えば、彼はあんなに力のある魔族ではなかつたのだ。これはひとえに彼を直接的でないにしろ信じてきた者達の力なのだ。当時ミカドと袂を分かれた人々は、世界の重なりによってできてしまつた神話に当たる魔族を感じることが出来なかつたのだ。当然だとも思うが、ボクはあまり神話を感じさせないよう、それでいて少しでも心のよりどころとなればいいと、当時石に宿っていたスダマを贈つたのだ。あまり関わつてこなかつたことは心苦しいが、うまくいつてよかつたのだ」

「終わりよければすべてよしか」

「そうなのだ

「そういうわけでウイルス王、後に後悔しないためにも、コトワリの家の訪問と北の魔物への突撃の許可をいただきたいのですが」「仕方あるまい。わしらにも近況や安否が分かるようにしておいていただけるなら許可しよう。そして剣聖の子、コトワリについては

まったくこちらの落ち度であるづ、うまくはからつてほしい」「分かりました。で、サンカイさんたちは国に戻るって事でいいですかね?」「

「われらは残るぞ?」

サンカイさんが言い、ツバキさん、ユリカ、シンも頷いている。「は? 王家の人々には行程が終われば戻つてもうつもりだつたんですけど」

「ケイには緊急時には通信できるだろう? ならば我らはめつたにない一般人としてこの国を楽しもうと思つてな」

「ふむ。北の魔物の地についてこないのであればなんでもいいです。最低でもサンカイさんクラスの人でないと安心できませんので」

「ぼくは行きたかったな~」

シンが言つ。

「この国の熟練者でも危険な土地だ。はつきり言つて国の将来を支える人は連れて行けない。なんとか納得して欲しい」

「……分かつた……」

なんとかシンをなだめる。

その後は歓談が続いた。魔法にて回復したマリンの王子が平伏して許しを請う場面などもあつたが、アマテラスの魔物に魅入られたので仕方ないという説明に一同納得したようだ。サウスの王子、現王の子のセントラル王子の顔合わせも行い、ミカド及び、アマテラスの紹介により色々納得し、今後ウィルスを盛り立てていくことになつたのはご愛嬌か。アマテラスの威光が大きかつたのは否定できない。ウィルスに来る前は心配が絶えなかつたが、蓋を開けてみれば結構友好的な関係が築けそうだ。将来は分からぬが今はこれでいい。未来は未来を担うものが各々責任を持てばいい。

ウィルスの美酒に酔いながらそんなことを思った。

そしてこの日、もつとも苦労していたのはコトワリの世話役を預かつた友魔たちであった。結局白虎とケルベロスだけでは足りず、オベロンとティタニアも宴に出ることなく世話を焼いていた。白虎とケルベロスのインパクトと恐怖が大きかったのか、獣姿の彼らに慣れて笑顔まで見せることが出来るようになつた彼女は男性への恐怖心もさらりと流されてしまつっていたのだつた。

宴の後、心配で貴賓館を訪れたアマテラスとダイスケは白虎の大きな体躯の中ですやすと眠る少女に笑みをこぼした。

朝だ。ほぼ同じ時刻に起き出したミカド王家4人とともに朝食を取る。だがウイルスの貴賓館にはちゃんとした厨房が存在しない。お湯を沸かす程度の小規模な物だけだ。従つて各食事は城からのデリバリーか外に出でますことになる。試しにデリバリーを頼んでみたらパンとスープ、少しの副菜が届けられた。当時の日本の若者として少し特殊かもしれないが、朝はしっかり食べたい。昼も夜もしっかり食べるせいでのんな腹になつたのだが、それはそれとする。パンも当然おいしくいただいたが、少し物足りなく感じ、マジックにて即席だがご飯と味噌汁を出し、海苔と生卵、少々の漬け物でいただく。女性陣はともかくサンカイさんとシンも物足りないということだったので、同じものを出す。冷凍や冷蔵の輸送手段がないミカドにおいて、卵を生で食べられるのは養鶏をしているイクサの町だけだ。サンカイさんは久しぶりだと喜び、食べたことのないシンはちよつと遠慮したようだ。

と、コトワリが起きてきた。

「お……おはようございます……」

「あ、おはよう。よく眠れた?」

「は、はい。それからありがと」

「どうかした?」

「怪我を治していただきだけでなく寝所まで……」

「怪我をおなしたのは俺じゃなく姫だし、よく眠れたのは白虎たちのおかげさ。寝所は王。」

「しかし最初に私に気が付いたのはダイスケ様と聞きました。それがなければ今頃どうしていたか……」「そんなに気にしなくていいよ」

ぐ

顔を真っ赤にしてうつむくコトワリ。聞けばもう2日も水のみだそうだ。ただいきなり重い食事もどうかと思い、マジックで粥を出す。マジックは驚いていたが、魔法などではなく、俺しかできないといふことで納得し、ウィルスの人あまり言わないようにと軽く釘を差しておいた。返事よりも先におなかの虫が鳴ったのでせりて赤くなつて撃沈していたが。

「おいしいっ！」

「それはなにより。おや、白虎、おはよっ」

のそりと巨体を揺らしながら部屋に入つてくる白虎。眠そうな雰囲気はみじんも感じ取れないが一応聞いてみる。

「よく眠れた？」

「ふん、我ら魔族は人のいう睡眠を必要としない。その日に得た経験を、記録として整理するしばしの時間がいるのみなのだ。肉体の限界と、その知識、情報の整理が必要になつたときに眠りにつく」

「アマテラスは寝てるみたいだけど……」

「父は人と重なつたことが原因なのだろう、日々の睡眠で情報の整理を行つてゐるようだ。そのおかげか今までこの地で5000年眠

りにはついていない

「そ、うなんだ。じゃあコトワリにつきあつてくれてありがとう」

「あ、ありがと、いや、ま、す、」

すかわざコトワリも礼を言つ。

「気にするな。人の温もりも悪くない。それよりも、コトワリとやら、お主には我らに近いにおいがする。もしかすれば我ら魔族の血に連なる者がおつたのかも知れんな」

「私に魔族の血が流れていると……？」

「髪の色を見てもその紫の系統はカドでは王家にしか出ないものだ。女性というのは珍しいが、ま、決まつたわけではないがな。そんな感じがするだけだ」

「ま、今日から魔王に会いに旅立つからお父さんこでも聞いてみたらどうだい？」

「魔王に！？無茶です！」

「それは試してみないとわからんや。といつか魔王の情報があるの？」

「噂ですが、耳をつんざくよくな声と一切の攻撃を寄せ付ける壁を持つていてるようです」

「攻撃手段は？」

「魔王の攻撃を受けて生きて帰ってきた者がいないので……」

「なるほど。じゃあそれなりの対策を練つておかないとね」

正直対策なんてなく、行き当たりばつたりのつもりだった。魔王が文化を持つ種族であることもわかつてはいるし、アマテラスも同行してもらつたから特に危険はないのではないかと思つている。

食事を終え、自分たちはお茶を、シンやコリカ、コトワリにはオレンジジュースなど出しながらアマテラスたちが起きてくるのを待

つ。オレンジジュースなど、この世界でも珍しいものではないが、3人とも今までのものよりもかなりおいしいと言っていた。少し寒いウィルスの地であるが、大昔に研究されたであろう、植物の改良の成果は十分に發揮しており、養分などの関係上、味はともかく、季節を問わずにできる果物なども豊富だ。ただし、その植物の管理などはウィルスは特にきっちりされており簡単に無料で口にできるものはないらしい。そして今の世界では大昔の、自分の感覚では現代の農業、特に果物等食べやすい味や糖度のものにする研究、さらにはより『売れる』ジュースの研究開発。ジュースというよりもただの絞り汁に比べたらかなりの差だろ？

⋮⋮⋮⋮⋮

「おはよ～なのだ……」

アマテラスが起きてきた。相変わらず眠そうだ。いつもなら髪留めと化しているアメノトリフネが髪の端っこで落ちそうになつていいのだが、今日はお姫さんもいるためか眠そうな顔以外はきちんと整っている状態だ。

「朝ごはんあるよ。冷めてるけど」

「昨日飲み過ぎたのだ。お茶漬けが欲しいのだ」

「どうすんだよこれ。あ、そうだ。マジックで向こうに送つて研究してもらおう。他の素材や調味料も送れば栄養価や味の改良ができる

るかも「ホルザンティ、 よりじゅね」

『かしこまりました』

マジックでお茶漬けを出す。基本すでにお椀によそった状態でお盆にのつて出でくる。レトルトなどもそうしてもらっている。ビールやペットボトルから出してさらにびっくりさせるのが後々説明に面倒だと思つただけなのが。

「飲み物はお茶でいいか?」

「野菜ジュースがいいのだ」

「色々講釈多いな。ま、今日から少し大変になるかもしれないからいいか。あ、皆も飲みます?」

「ダイスケよ、野菜など搾つても搾り汁などとつまむものにはならんぞ?」

サンカイさんが疑問を言つてくれる。

「じゃあ皆の分も出しましょ!」

そして俺とアマテラス以外の人は恐る恐る口をつけた。

「…………うまい……」

「おいしいです!」

「うーん……これほんとに野菜だけなの?」

「味を整えるのにリンゴやオレンジなども使つてるけどね。搾るといつよりは飲み物になつてしまつほど細かく切り刻んでいる感じなんか、よく知らないけどそんな感じ」

自分で出したはいいが自分で作ったわけではないのであいまいな答えになってしまふ。だが野菜ジュース自体は好評でまた頼むと言われた。それよりも魔法の効かない、もしくは魔法が当たつても壊れない丈夫な鍋に大量に野菜や果物を入れ、『風刃』とかの魔法をたくさんかけたりすりつぶしたりして飲み物状にする研究をしたほうがいいのではないかとも言つておいた。そつすれば後はいつでも自分たちが飲めるのだから、と。

サンカイさんは面白そうだと、早速ケイさんに連絡していた。

食事も終わつたので出発の挨拶もかねて城に向かう。コトワリは王に間近で会うのは初めてだつたらしく、とても緊張していた。

「そなたがコトワリか。そなたの父には世話になつた。母も美しくとても頭のいい女性だつた。そなたもだいぶ母に似てきたな。将来が楽しみだ。他の民の手前、特にかばつてやることができず、ひどい仕打ちを受けておつたことを知らずにいたことは王の責務としても憂慮すべきことであるが」

「とんでもありません。父も母も幸せだと言つておりました。王のおかげでございます。それに母が生前言つておりました。王とは将来へできうる限り多くの子孫を残すのが仕事だと。10人より100人。しかし男性100人より男女5人ずつ。目先のことしか見ない一般の民には理解のできぬ悩みをたくさん抱えられているのだと。それをして私は自身のことや家族のことで私の力が足りなかつたのでしよう」

「そういうてくれるとありがたい。とにかく今は父の元へ行き、一度顔を見せてくるがよい。そして父共々ミカドに移り住むことも考えて欲しい」

「ミカドにですか？」

「つむ。剣聖の名は高いのだが、結局兵士となるしかなく、中庸な能力の者はたいがい戦死してしまつ。だから剣聖といつ名は魔物は目に見えない所や時では目障りになるのだろう。剣聖もそなたも心休まる時すら作れずに何が王だとも思つが、今はそれが一番いい」「わかりました。父とも相談してみます」

「つむ。そしてワシや王子たちがウイルスを同じ間違いを起こさない国にして見せよつ」「ひよせよつ」

「父も母も王の気苦労をいつも気にしておつりました。お体にはお気をつけあそばしてください」

「ふふ。今生の別れでもあるまい。その内ミカドに行つた際には道案内を頼もうかの」

「はいっ！ ありがとうございます」

「つむ。ではアマテラス殿、わが民をよろしくお願ひする

「まかせておくのだ。では行つてくるのだ」

「ではサンカイさん、出発いたします」

「氣をつけてな」

「はい。何かあれば必ず連絡を入れますので」

「ダイスケさん、氣をつけてね」

「ありがとうございます、コリカ、行つてきます」

「いってらっしゃい」

……  
……  
……  
……

「……で、なんでノースの姫とウェストの王子がおられるんです？」「自分の領地に帰るのに何でも何もなかろうー。」

ノースの姫はがはと笑いながら話す。いたずらがうまくいつたときの子供のようだ。全く外見にそぐわないこと甚だしい。ウェストの王子は笑いをかみ殺しながら説明した。

「本来は護衛です。正直あなた方に護衛はいらないと思いますが、コトワリさんには護衛が必要かと思いましてね。アマテラス様方は道案内とも思ってください。」

「ウイルス王が謁見の最後にやりとしたのはこれが理由だったのかな?」

「でしょうな。常々『王の責務で溜めた疲れを癒すのは部下をからかうことだ』と言っていますから」

「受けるほうの身になるととんでもないな……」

「ええ……否定できません……」

「がんばってな……」

⋮  
⋮  
⋮

「毎度、旦那、今日は5人だ。俺とウェストは1部屋でいいとして1日歩くと到達する地点にこの地で生きていく人にそれほど違はない。当然そういうたポイントに宿場が多いのは当然である。地理に疎い俺やアマテラスはノースの姫のひいきな宿に行くことになつた。

「毎度、旦那、今日は5人だ。俺とウェストは1部屋でいいとして

後3部屋頼む」

「おお、ノース様じゃないですか」

「様はやめりと言つたはずだ。それにオレはまだノースの王を継いではない」

類をひくりと動かしながら宿の主は答える。ノースの姫の機嫌を害した時、それを戻すにはウィルス王かノース王、もしくは最高級の酒がいる。樽単位で。

「すみません姫。ほらあんたも謝りなー」

一緒にいた女将にぽかりとやられた旦那は土下座すらしそうな勢いで謝つていた。

「では姫、お部屋はいつもどおりでお願いします」

王子や姫とあらうものがいつも泊まる宿ではやはり特別な部屋を作っているところが多い。ノースの姫は今回だけはアマテラスに部屋を譲りうとしたのだが、最初に同行する時点で周りには従者という立場でお願いするといい含めてある。小声でどうするかと聞いてきた姫だったが、従者用の部屋でかまわんとアマテラスに言われていた。が、一見清楚、中身は猛獸のような姫が小声で言つたところでそれは常人には普通の会話と変わらない。結局アマテラスはアマテラスであることがばれ、姫と王子を差し置いて最上級の部屋になつてしまつた。

「ちゃんと釘を刺しておくべきだつたね」

「うむ、ウイルスの普通というのも試してみたかったのだが……」

「コトワリの家に向かうにはもう1日ほどどこかへ泊まらないといけないらしいから明日は普通にしてもらえばいい」

「そうするのだ」

食事も姫や王子から見ても数ヶ月に一度のレベルのものが出来たらしく、ダイスケとアマテラスはそう話し合い、姫にそういうふうに伝えることにした。

……

2日目。危険はほぼない。王子と姫が単身歩けるのがその証拠だ。実際は赤い月の影響で魔物化したものたちは片っ端からさらわれているし、野生生物は食用に狩られてしまっているためだ。まれにマシンが出るようだが、そのために逃げる用の鉄の塊などは普通の旅人も持つているようでそれほど危険はない。ただその『まれ』に、さらには『極まれ』当たってしまったようで現在5人は3対のマシンと対峙していた。

「クソつたれ！鉄が足りない！3匹同時などここ何年も聞いていいな

いぞ！」

「どうするんだノース！」

「どうもこうもあるか！やるしかないだらフー・コトワリーお前は鉄を持つていなか？」

「すみません……」

「仕方ない……」

と、紙を破く音を何倍と比喩するのも愚かしいほど強くした音が響き渡る。同時にマシンは真っ黒になり煙を上げていた。

「天罰なのだ」

「かつこいいな、アマテラス。俺もそういう派手な使いたいな。教えてくれよ」

「ふふん。簡単に出来てはボクの立つ瀬がないのだ。よって教えないのだ」

その会話からアマテラスが何かしたこと。ダイスケが驚いていないうことを見ると2人にとってはマシンは脅威でないと理解でき、ホツと息をつく。その間にもダイスケはマシンの背中から何か黒い板を剥ぎ取り、黒い体液を吐き出す体内から白っぽい箱を引っ張り抜く。

「これで良し」

なにがこれで良しなのだらう。小首をかしげる。ダイスケは疑問に答えてやる。

「マシンは電気といつもので動いている。この世界になじみはないだらうけど雷が一番近い。あれよりももつと少ないが。よつてこいつらの体に通つていてる電気を乱せるほど、こいつらはその対策をしてあるだらうから先ほどのアマテラスの電撃程度のものが必要になつてしまつが、それをぶつけることでこいつらは動かなくなる。そして背中の黒い板は田の光を電気に変えるもの。この白い箱はそ

れを貯めおくもの。これさえ切り離してしまえばこいつらはただの置物と同じになる

「それは初耳だ。鉄を与えれば逃がしてくれるとは聞いていたが」「こいつらの体はほぼ鉄で出来てているからね。それが必要になつた時に手つ取り早く鉄を得られるように人を襲うんだろう。もう動かないから見てみるか?」

体をひっくり返し、体液に見えた、実際はオイルを流して中を覗かせる。基盤やモーターなどはこの世界の人を見せてもわからないだろうから、手足の構造などをだ。

姫は今後にも影響するのだろう、どの程度の電撃が必要なのかを聞いてくる。

「その前に魔法で雷は作り出せるのか?」

「そういう魔法がある。人を数分ほど麻痺させるための魔法だ。先ほどのアマテラス様ほどの威力は望めない」

「雷や電気は空気中をほぼ伝わらない。何もなしに倒すにはアマテラスほどの雷撃が必要になる」

ノルンたちの解析結果を得ながら説明する。ただ、魔法がどの程度威力があるか分からぬため、ノルンからセンサーといわれた箱を出し、マシンの残骸の中に設置、それに向かつて魔法を打つてもう一つにする。

「……いかずちよ敵をうがて。Thunder~!」

「こちらはこちらでウィルスの人の魔法を見るのは初だ。よく見ておくことにする。研究は後でもいい。ノルンにも記録を頼んでおいた。

「ふうむ、内部破壊までは行かないようですね」

「実際なんのセンサーかは知らないが、そういう結果がノルンから上がってきたので姫に伝える。」

「やはりか。ウェスト、お前も試すか？」

「いえ、私ではノースよりも大きいかずちは打てませんから」

「では次にいつてみましょうか」

「次？」

「ええ、ウィルスの魔法を俺は知らなかつたのでなんとも言えなかつただけで、今を見たらあることを思いつきました。剣をマシンの体にあてて、いかずちを剣に走らせ、マシンに当てるください」

「ふむ、よくはわからんがやつてみよつ」

「……いかずちよ、わがつるぎを伝い、敵をつがて。Thunder  
「！」

ピーッ

マシンの体内から警告音のよつな、これはダイスケが現代人であるから感じるだけだが、そんな音が響いた。

「何だ今の音は？」

ノルンからの説明を受け、姫に話す。

「内部が麻痺する程度の雷撃を与えたよつです」

「おおつ、やつた！……しかし実際に出来るのか？」

「えさ代わりの鉄に細い鉄によつたひも状のものをくつけておいて、それをマシンが持つた瞬間位しか出来ないでしょうね」

結局はそれなりに鉄の塊を持ち、逃がしてもりつのが一番危険が

ないと判断された。今まで鉄さえ持つていれば助かったのだから現状ではそれ以上のことは出来ない。命が助かる、さらに無傷なら特に周りを騒がせる「こと」もないだろうとこいつことだ。

……  
……  
……  
……

今日は普通に宿に泊まった。従者らしくないアマテラスに宿の者は何かを感じていたようだが、それを口にするようでは客商売は成り立たない。信用が一番だ。ただ何かを感じたのかそれとも今後のひこきをお願いするためか食事はいつもより豪勢だったようだ。

……  
……  
……  
……

3日目。やはりまわりの客よりも一切れ多い肉や、少しだけ色の濃いスープなどを見ながら食事を終える。身支度を整え宿の女将にはまた来るよ、などと社交辞令を加え扉を開ける。と、そこにはこれまでに見た一般民と少し毛並みの違う格好をしたじい様がいた。

「おお、姫、ご機嫌うるわしう

「じ……じこ……」

よほど怖いのかもしくは頭が上がらないのか。これまで「がはは」と笑うような姫だったのが別人のようになつていて。借りてきた猫のようだ。ただ、だんだんと口論のような感じに発展し、その薄いメックキはげつつ見える。

隣で笑いを抑えているような顔をしているウエストの王子に誰なのかと問う。どうも姫の教育係を勤めていた人物のようで、伝書鳥か何かで連絡が行き、何かしらの連絡、もしくは迎えに来たのではないかと言つていた。その間にもそのじい様と姫の会話はヒートアップしつつかは殴り合いの喧嘩にでもなりそうだ。するとそのじい様、懐から何か絵のようなものを取り出した。

「ほつほつほ。姫、これが何なのかお分かりかな？」  
「ふん、そんなものでオレを黙らせようつたつてそつはいかねえ！」  
「ほう、よく見るがいい」  
「なにつ……そ、それはつ！」  
「そう、姫がマリン王子と結婚すると騒いでおつた時のドレス姿だ」  
「よ、よこせこせつー」

姫から伸びてきた神速ともいえる手をかわし、にせりとして続ける。

「もうノースの民は皆持つてあるわ。複写士に複製を大量に作らせたからな」

「くそつ！だれの差し金だ！」

「姫がこの姿を広くノースに広めよと言つたと聞いているが？」

「姫がこの姿を広くノースに広めよと言つたと聞いているが？」

「やはりマリンは殺しておけばやだつたか！」

「物騒な……」

ウーストの王子が何とか姫をなだめる。

「で、なぜじいがこころにいる？」

「そんなことよりも同行者殿をまず紹介するのが先じゃないのか？」

「ぐつ……」

アマテラスの紹介時には全く年寄りに見えない優雅な動きで一礼し、お目にかかるてうれしいとやっぱり年寄りに見えない魅力的な笑みを作った。

「で、なぜここにいる？」

「今後の予定を聞こうと思いましてな。ウィルス王から魔王のところに行くと聞き、ノース王も困りましてな。玉碎覚悟で臨むのか？生きて帰る気がどこまであるのか？同行者様の実力は？色々確認したかったので。それから姫には是非ノース城まで来てもらつてウースト王子と付き合つておつたのを別れ、マリン王子と婚約、破棄してウースト王子とよりを戻した理由をその口から耳に伝えていただかなくてはならなんのですよ」

「めんどくせえ」

「いくら浄化前の『オニマリン王子』が汚染された、それが原因だとしても、元気な姿を民に見せて欲しい」

「考えておく、その内な」

「……、ワシを怒らせるつもりか……？」

「ふん、いつまでもじいの庇護の下、ひな鳥のような感覚でおつてもらつてはこまるな」

「止めなくていいの？」

「いつものことなのです」

ため息をつきながらウエスト王子が言ひ。王がいて王子や姫がいる。王とて暇ではないから教育係をつける。ただしその教育係は教育に関してのみ王と対等に話すことができ、王子や姫が戴冠したとき、初めて王子や姫の臣下となる。これはウィルス内ではどこも同じで、そのような大役は結局、王にですら友人感覚で話ができるほど心身ともに強い人物に限られる。そしてすでに喧嘩は場所を移し広場でどこからかじい様の出した木剣と盾による大立ち回りと化していた。

ウエスト王子も安心しているようだ、広場に向かうすがら、話は魔法のこと気に移つていった。

「昨日初めて魔法を見せてもらつたけど、基本としてどんな感じ？」「最初の数語にて魔法がどのように発動されるかしつかりと想像します。そして魔法言語を魔力を放出しながら発音します。想像も大切なのですが、一番は魔法言語の発音と言われています」

「それは魔族の魔法に近いな」

首をかしげるダイスケにアマテラスは説明する。

「ボクの雷撃やケルベロスの炎などなのだ」

「ああ、なるほど」

「膨大な魔力さえあれば想像のみで発動する。ミカドの魔法は違った方向からいかに簡単に出来るかを考えて発展したもの、ウィルスはボクたち魔族の方法を人なりに精錬させたものだと思うのだ。どちらが優れているとかではない。同じ魔法という結果をウィルスは精神力で、ミカドは知識で発現させているのだ。どちらにも長所も短所もある。ウィルスは移動型というべきかな、ミカドの設置型と比べてだが。のように1対1になってしまえば魔力をこめて想像して発音する、もしくは魔力の文字を書くなど出来ぬから1対1は双方の弱点なのだ」

多少の野次馬に観戦されながらまだ大立ち回りをしている2人をみながらアマテラスはそう言った。

えらく晴れやかな顔の姫と落ち込んだ風なじい様。聞けば負けなかつたのが初めてだつたらしい。老化とか言つたらぶつ飛ばされそ  
うだとダイスケは内心思つた。

ウェスト王子はノースとウェストにほど近いここでの大立ち回りはうわさとなりノースの姫への評価も元に戻るだらうと考えていた。

「うむ。気をつけてな」

८४

アマテラス様、夕

「任せたおへのだ」と、外洋のスケート場で、よしぐお願いする。

1000

ハースの町に入った。一応町と言っているが、ダイスケの知っている町はミカドとミナト、ウィルスではセントラルとマリンだ。村のイメージの方が強い。それでも遠くに城壁のようなものが見え、あれがノースの城だと判断できる程度だ。そして時々見かけるあがら家を見て姫に聞いてみる。

「これ、人が住んでんの？」

「そんなわけなかろう。ノースを何だと思つている？魔物との戦闘でなくなつた人の家だろう。子供はウイルス城下の学校に例外なく行くから子供が被害にあいにくいのが幸いだが。その内取り壊され

新しい家が建つだらう。ま、血縁者や友人が思い出の品などを取りに来るまではこのままかもしれんが」「なるほど」

遠くで畠仕事だらうか、働いている者たちですら全速で寄つて来て姫に挨拶する。姫がこのような性格だからか、はたまたウイルス国はどこでもここのうなのが、姫と一般民というよりも友人的な挨拶を交わしている。姫への挨拶が終わつたのか、断りを入れて仕事に戻るうとした1人をひきとめ、剣聖といつ人物について聞いてみた。

「セントラルに近いやつらや魔物に身内をやられた連中が色々言つているみたいですがね、ワシらにとつては大事な家族や畠を守つてくれた恩人でさ」

とたんにコトワリが泣きそうな顔になる。

「お？お嬢ちゃんすまねえ、なんかひどい」と言つたか？」「い、いえ、気にしないでください……」

「そつは言つてもよ~」

「……父を、そう言つてもらつてうれしかつたんですね」

「え？お嬢ちゃん「トちゃんかい？えらく大きくなつて。……お~い、みんな、コトちゃんがけえつてきたぞ！」

「本当かい？」

「まあ美人になつて……」

「でもこんなにやせちゃつているじゃないか、ちゃんと食べていたのかい？」

「剣聖様は一時期ちょっと体調崩してたようだけど」「何日かはすじぐ元気だよ！」

ワイワイと囲まれているのを眺めながら姉に聞いてみる。

「戦士が畠仕事とかしてはいけないのか？」

「どうしてだ？ 番仕事はその道のものがやるのが普通だらう？」

「いや、コトワリもいじめられながら戦士で稼がないで畠でもやればよかつたこと思つてね」

「大怪我をおつたりしても、戦士は戦士の教育者になつたり、決め

「アーニー、お前はアーニーだ。アーニーはアーニーだ。

「なんだ？」

「ミカドでのウイルスの民の評価なんだけど、ずるがしー」とか聞いていたんでね。なんか拍子抜けというか……」

「エノーラ、ソラリソバード、谷端、ヒロコ、安室、」

セントラルやマリンなど、裕福で比較的安全な所にいる人にはうつ者もいる。あと商人の中にも。ノースやウェストでのよう

な！」となじっていたらせじを丑むかへしもつ

「へえ。やつぱんは聞こ当てこじない方がいいな」

「へむ」

「だといいが……」

100

「ここが私の家です……」

「何を困った顔をしておるのだ？」

「い、いえ、アマテラス様や姫様や王子様をお呼びできるような家ではないので……」

「気にするな。オレやウエストだって城から出ればこうこう所に住んでいいるしな」

「ボクたち魔族だっていつもお城のよつなところに住んでいいわけではないのだ。アマの町のボクの住処だってここと変わらないのだ」

「そ、そうですか……？では、ただいま帰りました」

『剣聖』。剣に限らないが近接戦闘における類まれな能力を持ち、敵を倒し生き抜いてきた者。どんな大男が現れるかと思ったダイスケだったが、中に入つた時にいた人物は比較的小柄で臂力というよりは敏捷なイメージを持つ人だった。多少疑問に思ったことは結構歳がいつているように見えたことだ。60歳くらいに見えた。10代のコトワリの親にしては少々歳がいつているように感じたのだ。

「ようこそおいでくださいました。姫もさうにお美しくおなりになられて。強さも一段と高みに上られたようですね。王子も姫に並ばれるほどお強くなつたのを感じます」

「久しぶりだな、剣聖。それにしてもオレとウエストが並んだだと？」

「ええ、そのように感じますが……」

「ウエスト、今までの訓練は手を抜いていたのか？」

「え? いやだな、本気だよ、本気

「本当か……？」

また喧嘩になりそうな雰囲気を感じた。剣聖もそう思つたのか、「姫の美しさに目もくらみましたな、すみませぬ」などと言つてい

た。そして、

「そちらのお一方は？妻と同じ感覚を受けますな、ひょっとして魔族の方ですか？」

「アマテラスなのだ。」ヒトちはダイスケといつ

「アマテラス様」というとあのアマテラス様ですか？」

「どのアマテラスかは知らないが、ボクはアマテラスなのだ」

「そうですか。さあ、中にお入りください。何か最近予感がありましてな。今日はいに酒があるのでですよ」

「いただきます！」

「こりやつ、ダイスケ！」

「あ、すみません」

「かまいませんよ。どうぞ中へ」

見た目、思つたより元気そうだと感じたが、アマテラスはそもそもないようで、燃え尽きる寸前のろうそくのようだと言つていた。事実、酒を出した後の剣聖はこいつ言つた。

「私はもう数日、早ければ明日あたりでこの命が終わると感じています。そのときにコトワリがいてくれたのがせめてもの救いです。ダイスケ殿ありがとうございます。そして我妻の研究結果をお伝えしようと思います」

「研究結果？」

「ええ、コトワリにも言つていないものです。ある意味これは私たち夫婦の遺言となるでしょう。コトワリも良く聞いておいてくれ」「……お父様の具合が悪いことは、感じること、が、できま、しました」

すでに泣きながら答えている。

「うむ、私の能力も多少は受け継いでいるようだな。アマテラス様のためにも少し込み入ったお話をいたします。姫様方には多少理解

できぬこともあるかと思いますが、のちにアマテラス様から噛み砕いていただきたいと思います

「わかったのだ」

「では、妻の研究から私たちウイルスの人間の構造を聞きました。妻は同属婚姻のため、血が濃くなりすぎ、体の欠損や精神異常で生まれてくる子供の体や精神を補うため、魔力というモノが使われていると言つておりました。そして運よく欠損のないものはそれなりの魔力を持つて生まれてくるのだと。その中で私は心臓に欠損があり、それを魔力で補つているのだそうです。そのおかげで一般の人よりも速く行動が出来るのだと。体感時間の差がありすぎるそうです。そしてそのわずかな余剰魔力にて敵を含め相手の力を推し量る能力を持つたのだと。私の年齢はいくつに見えるでしょうか、実は今年で40なのです。体感時間が早いことは返つて成長や老化も早いことになるそうです。そして妻ですが、魔物化の影響でつれてこられた者だったようです。魔物化からの回復の折、ほとんどの記憶をなくしてしまったようで、名前すら覚えていない状態でした。魔王の城に近づいた大戦の折、つたない字で浄化はすんだからつれて帰つて欲しいと書いた紙を持つて所在なげにたたずんでいたのをつれて帰つたのです。名前もわからず家もわからない、そんな彼女を支えるうち、結婚と相成ったわけです。妻は記憶をなくしていくも聰明な人でした。その頭脳から魔物化の研究をしていました。たくさんの本や日記を持って魔王の城から出た妻は研究がひと段落し、出産のあとで結果を報告しようとした時に病に倒れました。瞬く間に悪化し、セントラルからの医者が来た時にはすでに手遅れの状態だったのです。その後の瞬間、記憶が多少戻ったのか、研究の成果はアマテラス様に直接渡して欲しいと。それまでなんとしても他人に渡らぬようにと

「名は、名を何と言つていたのだ?」「すみませぬ、そこまでは……」

「さうか、それが死ではなく眠りならいざれボクも会えるだらう

「お母様に会えるのですか？！」

「魔族は厳密には死ないのだ」

「そうなんですか？」

「うむ、すまない、続けてほしいのだ」

「魔物化の原因は魔王にあること、決して悪いわけではない」と。  
2つ目の意味がさっぱりわからず困惑いたしましたが、それが理解  
できない者に研究成果を見せてもらえないだろうからア  
マテラス様に渡して欲しいと。実際私は一切手をつけておりません。  
それは厳重に保管してあります。まだ体の動くうちにアマテラス様  
にお渡ししておきます。……………これです」

「ダイスケ、ノルンに送ってくれ

「わかった」

「剣聖殿、この研究結果は魔王も持つておるのか？」

「よし、魔王の方が詳しいだらうと言つておりました。妻のものは  
仮説でしかないと」

「わかった、ありがたく頂戴するのだ」

「ちょっと待つて、ノルンから一冊だけ私的な日記があつたからお  
返しするぞうだ」

「あ、ありがとうございます。今日一日だけ私がお借りし、明日コ  
トワリに渡します。恥ずかしいことが書いてあるかもしれませんし  
ね」

「青春を埋めるには足りないかもしれないのだが、いい思い出を持  
つていくのだ」

「ありがとうございます、アマテラス様

「うむ」

そしてこいつそろそろダイスケと会話をする。

「ダイスケ？」

「何？」

「コトワリの腕輪に通信をつかいやつてくれ」

「いいのか？」

「今日明日が晴だ。ボクたちは宿にこどるから通信でさの  
よみに」

「わかった」

「ではコトワリ、ゆうべじしてへるのだ」

「はい、ありがとうござります」

「うむ。ダイスケ、行くぞ」

「はいよ」

305

「あれ、オレたちは？」

「城に報告に行けばいいのだ」

「行きたくねーよ」

「だが、姫の務めだと想つのだ。民の田の前で王子と熱く抱擁すれば万事解決なのだ」

「できるかーそんなもん!……とつ、すみません」

「ボクには言葉遣いを気にしなくてもいいのだ。まあそれで解決するなら安いものだと思つのだ」

「くつ……やうじものになるしかないのかつ……?」

「あきらめるのだ。ウェスト王子、頼んだぞ。関わってしまった以上結末までハッピーエンドで行きたいのだ」

「はっぴいえんどですか……?」

「いい結末という意味だ。もう他の男に取られるよつない」とがない  
よつにしてくるのだ」

「そうですね。わかりましたーさあノース、行くよー」

「ちょっと待てー引つ張るなーあああああ…………！」

「意外に強いな。剣聖の言葉も頷けるかも…………」

⋮⋮⋮

4日目早朝……。脳内へのローンといつ響とともに腕輪から口ト  
ワリの声が流れる。

「ダイスケさん。お父様が……」

「すぐ行く」

初めてアマテラスを起こしに行つたがその時の惨状は割愛する。  
コトワリの件がなければ色々危なかつた。割愛と言つたら割愛ですー。

「コトワリー！」  
「はい、今朝方……」「そうか。たくさん話はできたか？」  
「日記を2人で読みました。その時の情景をお父様が加えてくれた  
りして……。今まで知らなかつたお父様とお母様の姿が見えまし  
た。私は2人の娘でよかったです」  
「そうか、間に合つてよかつたな」「はい」  
「持つていくものは？俺が持つて行つてあげるよ  
ではこれを」  
「そういうて箱を出す。  
「うーん、微妙に大きいな、マジックで通るかな？中身をバラで送  
つていいか？箱に愛着は？」  
「箱はその辺の箱だつたので問題ないです。中身は少し恥ずかしい  
のですが……」「下着とか？」  
「そんなはずがありません！」  
「失礼」  
「いえ、お母様の遺品の中にドレスがあります……」「それが恥ずかしいの？」  
「結婚式に使つたものらしく……、日記で私にも使つてくれたらと  
かかれています……」「ふむ、年頃の女の子にはそれも恥ずかしいのか。勉強になつたな  
あ」「言わないでください！」

「申し訳ない。ところでミカド行きには何か行っていたかい？」

「いえ。お母様にまた会えるかも知れないと伝えた時に是非行けど。

剣聖の娘としてではなく、ただのコトワリという人として生きて欲しいと」

「そうか。で、剣聖は？」

「こちらです。私もいくつかの戦争を体験しました。ですがこれほど穏やかな顔を見たことがありません」

「……よかつた、のかな」

「はい！」

そういうて手を合わせる。次に生まれてくるときは戦争のない国でありますように、と願いながら。

ウィルスの巨星が落ちた日であつた……。

「アマテラス殿、ダイスケ殿！聞いてくれっー・ウエストが城に着くなり何をしたと思う？ー・民の田の前でくじけなどしようつたー・あわてて逃げてきたー・もう城にはもどらんー・」

「おお～ウエスト王子、よくやつた！」

「これでほとんどの問題は解決なのだー・」

「あはは、しかし姫の『機嫌が……』

「それは恋人間の問題だろ？」「…

「そうなのだ」

「わかつてはいるんですけど……」

「ふむ、ボクに任せることだ

「は……？」

「ノースの姫よ、将来はウエストの王子と結婚しないのか？」「

「するやー……ござれな」

「ではおぬしやはり恋仲だときちんと証明できるのか？」「..

「出来るわ」

「どうやるのだ？」

「うぐう……」

「単純なのだ。ウエスト王子、ノースの姫は恥ずかしがっているだけなのだ。気にしなくていいのだ。お主の愛できちんと包んであげるのだ」

「ありがとうございます、アマテラス様ー！」

「けつー！」

「まあまあ

……

「いいのか？家ごと燃やしてしまって……？」

「はい。すでに私の生家はありません。お父様とお母様の気持ちも全て持つていくために、ここはこうするべきだと思いました」

「そうか……、アマテラス、火葬頼んでいいか？」

「わかったのだ」

パチリとアマテラスが指を鳴らす。とたんに家ごと業火に包まれた。その炎が天をも焦がさんとする様子にコトワリたちは剣聖と、その妻の魂の安寧を願うのであった……。

「え？ ハトワリもついてくるの？」

「おねがいしますっ！」

「とは言つてもなあ……」

「キミはどうやって自分の体を守るつもりなのだ？ 姫と王子は一応案内役として城の入り口までは許可した。それに2人の連携は1+1が3になる連携なのだ。ハトワリはついてこられるのか？」

「そ、それは……。しかし母のことが知りたいのです！」

「ふ～む……。では……」

そう言つてアマテラスは髪留めのアメノトリフネを外し、ハトワリに手渡した。編んでいた髪が手櫛だけできれいなストレートになるのはなんと見とれてしまう。アマテラスの「どうした？」という念話に「なんでもない」と返しておく。若干赤面してしまったが。

「これは？」

「アメノトリフネ。今はこの世界とひとつになってしまっているのであまり大きな力はないのだが、ハトワリを守ってくれるだろう」「うう

「後はアマテラスの言うことだけきちんと聞いてくれれば助かるね

「分かりました、ダイスケさん。アメノトリフネ様、よろしくおねがいします！」

「ヨロシク……」

「わ～、しゃべった！」

「アメノトリフネを何だと思ったのだ？」

「いえ、何かのお守りかと」

「その姿はアメノトリフネの残滓なのだが、壊れはしないし、コトワリを守ってくれるのだ。安心するのだ」

「はい」

「よし、行くのだ」

.....

■ ■ ■

「……が城です……」「ふむ、なかなか簡単だったのだ」「だねえ」

17

「さて、……ん? どうしたのだ?」

変な顔をして固まつている姫、王子、コトワリ。と、姫が再起動をはたし、まくし立てる。

「どうしたじやねえ！なんなんだ、あんたらの力？！魔物が敵にす

らならんなんて聞いてない！」

「魔物と言つても野生動物からのものならあんなものだと思つのだ」「だよねえ」

その通りと相槌を打つが、やはりウィルス勢は納得いかないようだ。

「普通は熊や猪でも2人がかり、猿やゴリラなど、向こうが群れを成していたらこつちは最低倍は人数がいないと相手にならないんだぞ？！」「だぞ？」

「そうなのか？」

「ボクに聞いたって知らないのだ。ウィルスの兵の実力も知らないのだし」

「そうなのか？」

「オレたちの常識としてそうだ！」

「ふーん、まあそうするところで姫と王子を帰すより一緒にいかな。ウィルス王にも説明しやすいだらうから。アマテラスはどう思う？」

「野生生物の魔物じゃないものが出てきた場合にどうなるか分からないのだ。帰り道も同じくわからないのだ。出来るだけ3人で固まつて移動してもらうのが一番かもしれないのだ。アメノトリフネが守ってくれると思うのだ」

「それが一番かな」

「では行くのだ。3人はあまりコトワリから離れぬようにお願ひするのだ」「わかりました」

城門に近づく。入るにはびびったものかと悩むまもなく、城門が開く、音も無く。開いた先には2人の人物がいた。

「どなた？」

特に危機感も持つてなかつた自分が聞いてみる。男性に見える方が、口を開く。

「きゅわああふゅうううううーーいーいーいん！」

「痛い！耳が痛い！」

「な、なんだこれ！」

「わわわわ……」

「アマテラス、大丈夫かつ？！」

「ノルン、解析せよ！」

こちらの世界には機械音など自然音でないものはあまりない。俺やアマテラスはそんなでも無かつたが、ウイルス勢の3人にはきつかったようだ。スピーカーのハウリングに近い感じか。

まわりも落ち着いてきたのでさつきの声？を出した男性に目を向けてみる。姫など抜刀しそうな勢いだったので、それは制しておく。なんとなく申し訳なさそうな顔をしたようにも見えた男性は隣の女性に合図する。その女性は横に持っていたらしい、小型のホワイトボードのようなものを掲げる。するとそこに文字が浮いてきた。

“おどろかせてもうしわけない”

「それで意思疎通するわけですか？この辺の言葉はわかるんですか？」

“われらのじえはすこしきつこようだ。ことばはわかる”

？

「“ひつじのじに”に、城門を開けたのはあなたですか?」

“おやぐのねうをむかえに。わたしはまおつとよばれているも。いぬうめいしょうはない”

「だそりだ、アマテラス、ちよつと代わってくれ」

何か念話でノルンと念話していたんだが、アマテラスは少し待てと手振りで示す。

「すみません、ちよつと込み入っていて

“かまわない”

「私の母のことを聞いていいですか?」

「いいよ」

「母を知っていますか?」

“ははとはいでんしてこきようじゅとこうこみが”

「いでんしていきようじゅ?」

「血をもらつた人つてことだから、合ひていろんじゃないかな?」

「そうです、その人のことです」

“あなたのいでんしじょうほうからさつするにけんたいばん”  
“せんにひやぐじゅうばんのものだひづ”

「けんたいばんせんにひやぐじゅうばん?」

「検体番号1250番か、で、分かりますか?魔物の研究をしていったよなんですが」

“あのものはほかのけんたいともあいしようがよく、やくにたつた。  
もんだいはひとだんらくしたし、そろそろもとのせかいにかえすつ  
もりであつた。ぶかのはんらんによつおいくつとビサることができな  
かつたが、ひとがつれていつたよつだ”

「それがコトワコの父さんだね。しかしこれは読みづらい

「待たせたのだ。ダイスケ、マジックで受け取つてくれ」

念話でどうこうやり取りをしていたかなんとなく分かったのでお

となし、マジックから道具を出し魔王に近づく。正直にきなり襲われたらどうじょうかと思ったが杞憂だったようだ。2つのわっかを渡す。

“これは？”

「その金具を外して広げ、首に巻くよつけののだ」

魔王とその傍らの女性も困ったような、危険を冒したくないような顔をしていたが、アマテラスの危険では無いのだ。魔族の父として保障する「危険では無いのだ。魔族の父として保障する」という一言でそれをつけた。

「人にとって耳障りでない周波数で、思ったことを発音してみるのだ。いつものようにたくさん情報を探さなくていいのだ。ボクたちの会話の速さと文字情報程度でいいのだ」

「オ、オオ？ オオ。コレハスバラシイデスネ  
「ア、エエ、コトバガデテイマスネ」

抑揚の無いマシンボイスが響く。

「もう少し、言葉の単語に音程の上下をつけるのだ。それなりにこちらの言葉も聞いているだろう？ それから女性の方は少し全体の音程も上げるといい。女性は男性よりも声が高い方が違和感が少ない」

魔王をそのとなりの女性はじょりく何か考え込むよじじた後、口を開けた。

「このような感じでどうでしょう？  
「私も少し調整してみました」

「いいと思つのだ。ではまずはコトワリの話の続きを話すが良いの

だ

「そうでしたね。コトワリさん、でいいですか？先ほど書いたとおり、その後のこととは分かりません。それに魔物化してここに来た時には会話すらできる状態ではありませんでした。彼女は己の記憶を代償として魔物化から抜けたのです。というより、正常化の際、記憶が消えてしまったという方が正しいでしょう」

「そりなんですか？」

「申し訳ないですね、コトワリさん」

「いいえ……」

「写真みたいなものは無いんですね？」

「ああ、そういうればまだ情報が残っているかもしれません。ただナンバー4525が暴れた際に情報室も被害を受けましたから確実とは言えませんが」

「ナンバー4525とは？それからあなた方が敵対し、今すぐにでも攻撃しようとしたことにも疑問を覚えますが？」

「それは私たちの成り立ちからお話しないといけないでしょ。そして現在攻撃しない理由としては4525がいないからです。半変化していくようですし。ただいきなり信用してくれというのも虫が良すぎるとは分かっていますが……」

「ボクは信用してもいいと思うのだ」

「アマテラス？」

「ただ、本当に信用するかどうかは話をきちんと聞いてからなのだ」

「じゃあ、お話を伺いましょうか」

「大丈夫なのか……？」

「アマテラスが大丈夫といえば大丈夫だ。それにやる気なうむつやられているだろうし」

「そうですか？」

「私はお母様のことが聞けるならかまいません」

「じゃあいじからへどうだ。実用のためのものしかないのあまり潤いはありませんが」

通された部屋は小規模の会議室のようだ。10名位の会議にはもつてこいの広さだった。

「では、まずは私たちの成り立ちからお話しないといけませんね…」

地球外生命体。端的に言えばこれに尽きる。そして彼らの一族は肉体や頭脳をより高度に人為的に発展させてきた一族だ。彼らに特に名は無く、ナンバーで管理されている。魔王と名乗った彼はナンバー7210。隣の彼女はナンバー7211。彼らの星の寿命により、乗せられるだけの命とデータ、もうもろの機器を月型宇宙船に乗せてきた。そして大昔、この地球からの救助要請電波を受信、近づいたところ、捕縛電磁場により身動きができなくなってしまったらしい。

「ちょっと待つた！君らの宇宙船は赤い方の月の事？」

「いいえ、普通に見えるほうですね。赤い月の方はもともとこの地の月です。ここに来た時に調査した段階では、1つの月の大きさに倍以上の密度を持つていたようです。捕縛された我らは何とか脱出したようと試みていた時です。ぎりぎり単体用宇宙船が航行可能だと分かり、赤い月の調査を行いましたから、間違いはありません。そして内部に施設があつたのも確認しています。人用の住居スペースと人口知能でしょうか。ただ生きた人はおりませんでした。その

人工知能のデータを何とか閲覧保存して解析した折、中の人々、すでに大部分機械化で人といえるかは分かりませんが、その中の数人の反乱にて全滅したと思われます。ここから月が赤く見えるのは彼らを生かしていた装置などの鉄の破片が酸化、赤く見えているだけでしょう。そして人工知能を破壊しても捕縛電磁場は1000年ほどは消えないことが分かりました。我らは月にこれだけの施設、技術があるのなら月に戻るのは難しくないと考えました、それに正直、食物用などの植物も遺伝子操作をしそうのか徐々に変質しており、このままでは自分たちの命も危ういと思いこの地に降り立つたのです

「では赤い月がもともとこっちの月なのか……」

「密度が上がったことで酸化現象が出るほどの大気をもてる重力が発生したようですね」

「では赤い月に惹かれるというのは……」

「赤い目に変化する現象のことでしょうか。あれは私たちのシステムです。私たちの遺伝子研究の成果ですが、犯罪者、特に殺人を犯す者を判別するためのシステムです」

「なぜそんなものが……」

「罪のないものが死んでからでは遅いのです。特に宇宙空間で単体で生きていけないような人類にとって、宇宙船内の事故や殺人はそれこそ全員の生死に関わるのです。赤い月にいた人々がいなくなつたように。ですが、その特定遺伝子を持ちながら発動しない人も当然いるのです。理性の強い人といいますか。遺伝子が発動したら目が赤くなりだすのです。けつして月からのシステムが犯罪者の発生を促しているわけではありません」

「自業自得というわけか?」

「その人が犯罪を犯さなければ、そのシステムを作った私たちが完全に悪でしょう。ただ、システムが発見した人の犯罪率が100パーセントでそれが出ない人は0だという結果を見れば間違いではないでしょう」

「人を殺そうと思ったわけではない犯罪はどうなるんです?」

「例えば機械操作を間違えそうな人、そういうあいまいなことをするものは私たちの同族にはおりません。そういう遺伝子を持つて生まれてきていますから」

「なぜ、ウイルスの民や魔族などをさらつてているのだ?」

「もともと犯罪発動の遺伝子は人に個人差や人として生きしていく上で必要な遺伝子で無くてはならないものです。感情を持つために必要なです。ナンバー4525はそれに目をつけたのでしょうか」

「なぜ目をつけたのだ?」

「私たちが月へ帰るためにです」

「月へ帰る?」

「あと100年ほどで捕縛電磁場がなくなる計算です。我々は月に帰るために色々な策を講じてきました。ですが圧倒的に資源が足りません。ここから宇宙船を射出するための推進力すらまだ構築できていません。あなた方がマシンと呼ぶ存在も金属を集めるためのプログラムがなされています。私はその方向で資材を集め帰る用意をする予定でした。ただ4525は変化したこの地の人々を使い、より多くの人々を従え準備をしようと考えたのだと思われます。そのためにはこの地の人が変化したらどうなるのかと研究していました。しかし彼も変化しはじめました。結局彼はこの地を自分で治め生きたいように生きると考えてしまったようです」

「それをマリンの王子が斃したわけか」

「そうです。そしてその研究を引き継いだ、というか尻拭いをした私は人によつて、特定の教育を施すことでシステムの呪縛から復帰することを発見しました。わずかな確率ではありますが」

「コトワリの母はその数少ない復帰者というわけか?」

「そうです。まだ4525がいた時から唯一の復帰者だったようですが。記憶の変わりに復帰したようですが。検体1250番の残したデータはかなり役に立ちました。彼女の倫理の教えで復帰した子供たちもいます。復帰した人々はそれぞれさらつた場所と同じ所へ帰

すようにしたのです。そして4525が斃れたときについでに元の生活に戻ることができるようにはからいました。彼女の研究により、新たな復帰システムが構築されたためでもありました。4525の作った変化者をつれてくるシステムはまだ解除できておりませんが、それなりの数の者がそろそろ戻してもいいレベルまで復帰しております

「ウイルス王に連絡をしなかつた原因は？」

「戻ったものが王に説明できるほどの知識が無かつたのが一般的でしちゃうか」

「コトワリの母は？」

「この地の者ではないと判断いたしましたし、今までの記憶がないのなら無理だと。海を隔てたミカドの大陸の極少ないところまでは変化者を連れてくるためのシステムが伸びておりましたが、その地の者は皆異形というべき者たちで、アマテラス様と同族であるとは今までアマテラス様を見るまでは理解できませんでした

「そうなのか」

「一応月からのリンクでその遠い地がミカドと呼ばれており、魔族という者たちがいることも分かつておりましたし、変化を起こすものが同様にいたのも分かつています。ミカドの王に近い者が変化していく近いうちに王自身が血族のものが害されるのではないかとも懸念していた所でした」

「そんなことまでわかつていたのか」

「失礼いたします」

先ほどの彼女だ、ナンバー7211と呼ばれていた。彼女は紙と角のようなものをトレイに入れて持ってきていた。

「7210、言われたものを持つてきました」

「ありがとうございます。アマテラス様、コトワリ殿、これが検体1250、コトワリ殿の母上のデータだ」

コトワリには母の記憶がない。しかしこじと無く自分に似たその姿に涙が溢れそうになつた。

「この角は？」

とアマテラスが角を持つてみると

「ハトル……」

「知つてゐるのか？」

「ああ、魔族の中に研究だけに命をさげる連中がいるのだ。ほとんど外界と接触しないので今まで魔物化していたなど知らなかつたのだ。彼女はハトル。かなりの力を持つた魔族なのだ。彼女が魔物化したとなれば魔族の者への対応も少し変えなければならないと思うのだ。コトワリよ、お主の母はハトルという。これを見て分かるように、角が生えており、それが弱点なのだ。魔族の者の角は存在意義まで持つたものもあるから角をとられたなら記憶がなくなつたのも頷けるのだ」

「お母様……」

手渡された角を胸に抱きながら涙を流すコトワリ。

「ハトルならばおぬしにコトワリと名付けたのも理解できるな。彼女はこの世のあらゆる真理を研究しておつた。故に娘にコトワリ、理と書く名前をつけたのだろう。ウィルスでは珍しい名前と思つていたのだが」

「で、いまいちあんたらの話が理解できないんだけど、あたしたちはどうなるんだい？」

少し忘れ去られた感のあるノースの姫がそう呟つ。

「目が赤くなつて、さらわれた者は、将来の犯罪者になる可能性があるから魔王に更生をさせてもらつていてると伝えたらどうなのだ？ かばつてもかまわんが、かばうなら自分の一番大切な人が殺されてもかばい続けるよつにと」

「ふーむ」

「魔王つて言い方も完全に悪く聞こえるから困るよね。7210…」

…ナニ…ナフジ…ナフト。そう、ナフト王とかにすれば「

「ナフト…。今まで個体を名称で区別することはありますんでした。しかし番号ではなく固有名称ができるのはなんとなくうれしいですね」

「適当で『めん、』これ語呂合せだから」

「語呂合せとは？」

「7は『なな』、2は『に』、や『ふたつ』。10は『じゅう』や『とう』。頭文字をとつてナフト。7211さんはナフィイとか。他にもいろんな語呂合せがあるんだけどね」

「面白いですね」

「まあ簡単にはウィルスとの友好が回復するとは思えないけど、直に危害を『えるわけではないと理解していつてもらわないとな。そ

うそつ、ウィルスとの戦争つて、どうやつてたの、こつちは？」

「調べた所に寄ると、変化した野生動物のある特殊周波の音で操つていたようですね」

「それであたしらの国を襲つていたのか？！」

「変化したものをさらつてしまつていていた以外はこちから攻めたことはありません。ただ変化した自然動物がよらない様にしていましたから自然とそちらに向かつたものと。単体や少しの集団がそちらの町を襲つようにとけしかけたわけではないのです。攻められた場合のみ対応していただけです」

「そつなのかそれだけ聞いてもそれが本当だとした場合、ただの行き違いになつてしまふ」

「喧嘩や戦争なんて突き詰めればそんなものだとボクは思つのだ」

しばらく雑談が続いた。ナフトさんといつちのつなぎはコトワリしかないわけだから自然とそういう話が多くなる。アマテラスはコトワリの母、ハトルルの残したデータとのすり合わせもしたようだ。

ふと疑問になつたことを聞いてみる。

「最初に会つたときのあの声は何なんでしょう？今でこそ戦闘の意思がなかつたと分かりますが、あればびっくりしました」

答えたのはアマテラスだった。

「あれはなんというか分かりやすく言えば、コンピュータ言語なんだ。音の振幅や倍音、一つ一つに意味を持たせ、一瞬で多くの情報を伝えることのできるものなのだ。あの一瞬で今まで話をしてきたことの数倍の意味を持つているのだ。その中には彼らの言語の根幹ともいえる情報もあつたのであるような道具を作ることができたのだ」

「その通りです。宇宙を旅するに当たり、できるだけ一瞬に多くの意味をこめた指示などを伝えるために必要なのです。その一瞬に自分たちの生死が関わるならなおさらです」

「へえ、なるほど」

「ですが、この地の文明レベルでこのよつた翻訳機を作ることができるとは思つてもいませんでした。アマテラス様、あなたは他にも何か技術を持つていると感じます。違いますか？」

「どの技術があぬしらに有用かも分からぬのだ。なんとも言えないのだ。だが、月にいた連中。彼らはボクと重なつた折にいたある意味反逆者たちだろ？ 危機が一つなくなつたなら多少手助けしてもいいかと思つてゐるのだ。というわけで、ダイスケ、マジックで出すのだ」

なにを？とも聞けず、マジックで最初に触つたものを出してみる。メディアプレイヤーのようなものだ。再生を押してみる。

「わわわわ……！」

「痛い！耳が痛い！」  
「な、なんだこれ！」  
「わわわわ……！」

ノース姫、ウエスト王子、コトワツメモウセヒ全員が心だ。オレはそつなんじやないかなと思つてこたのでなんとか叫ばずにすんだ。

「せつこつわけなのだ、ナフト殿

「いやうとこでも逆にお願いしたくへりこですね」

「アマテラス、説明してくれ」

「ちょうどこの地の地下にあつたコンピュータをここに接続、プラスしてノルンたちとも接続することにより、ボクたちは魔物化のシステムと、魔族及び魔法にて手助けできるであろう情報を。ナフト殿からは魔物化に関する情報を。まだまだウイルスとは友好を結べないかもしれないが、ミカドと言つかノルンとのリンクを持たせる。これによりお互に有益な情報が得られるというわけなのだ」

「ふうん、よくわからんけど、仲良くなれるならいいや」

「ダイスケ様にはお礼の言ひようもありません」

「どうして? ナフトさんにお礼を言われるようなことははじてないと思つけど」

「ダイスケ様がこの地にこられなければ今回のように話しあつことはならなかつたでしょ」

「そうなのかな」

「ええ。アマテラス様も地下にこもりきりで答える出ない問題にさらりに落ち込んでいたと言つていきましたよ」

「そんなものなのかな?」

「ええ、この星、太陽系第3惑星にも私たちの前世代の者が接触しましたはずです。あなた方が宇宙人と呼ぶ存在。当時の地球の科学といふものはまだ太陽系から出るか出ないかというレベルのものだつたと聞いています。私たちの先祖はそんな大きな技術の差にもめげず、研究を重ねていた当時の人々にはある種の感動を覚えたと言つておりました。超高寿命、そして高性能な体や知能を持つ私たちは命をかけるほどの熱意という物を持たないことが多いのです。祖先のさうに祖先、まだ私たちの一族が星から出られなかつた昔話に似た世界。そして彼らの熱意。とてもすばらしいものだと思いますよ」

「そなんんだ。でも過ぎた技術の提供だけはかんべんしてほしい」

「分かっています。徐々に荒廃していく世界は見ていてもおもしろくありません」

「やつ、よかつた。なんにしてもお互に助け合っていきましょうか」「いりがいそよびしくお願ひしますよ」

だいぶ時間がたつていたこともあり、食事をいただいてここで、泊していくことになった。だが、無駄を省きに省いたナフトさん一族は食べるということに喜びやおいしさといったものを見出す一族ではなく、その食事は味気ないものだった。ついでだからとマジックでレトルトではあつたが豪華な食事を出し、食という芸術を説き、アルコールの利点、欠点も説き。惑星単位で考える、自分の未来のことばよく知らないが、自分にとつて初の隣人をもてなした。

武芸に秀でたノース姫は宇宙人、このナフトさんの一族をそう表現するが、と酔った勢いで演舞など始めてしまい、さらに宇宙人の肉体的な技能の高さを感じることができた。

生きていく上で全てを合理化した彼ら。宇宙を生きるとはこういうことか。

最終的には離れていくてしまうだろうが、いろいろ宇宙に関して話しが聞けたらなあと想い、ナフトさんを質問攻めにしてみる。と言つても自分の宇宙の知識などナフトさんたちにしてみれば常識以下のことなんだろうけど。

事実、説明されたことの半分も理解できなかつた。しかし知的欲求というかそういうものはずいぶんと満たされたようで。アルコールもあいまつてあてがわれたベッドで気持ちよく眠りに落ちていつた。

翌日。「魔王の城に突入して五体満足で帰つてくるなんて輝かしい武勇伝だな!」「ノースは将来王になるんだからナフト王と友好を築くのが第一だろ?」「しかし今まで一人としてなしえなかつたことだぞ?」「それはアマテラス様のおかげだろ?」「でもなあ……」

などといつづウイルス勢の言葉を聞き流しながらナフトさんと向き合つ。

「有意義な時間でした、ありがとうございます」

「こちらこそだ、ダイスケ殿。昨日の食事のあと、いかに栄養価を変えずにおいしいものを食べるかといった研究を始めた者もいる。このたびの会見は私たちにとってもとても有意義なものであつたんですよ」

「そういうていただけるとうれしいです」

「あ、あの!」

「どうかされたか、コトワリ殿?」

「ナフト様、色々母のこと教えていただきて、ありがとうございます」

ました!」

「検体……失礼、ハトル殿の研究は我々にも多大な恩恵を与えている。こちらでお礼を言いたいほどだ」

「そ、そんな」

「詳しく調べてみたのだが、ハトル殿は変化してももしかしたら人を殺したりしなかつた稀有な例であるかもしないということだ。4525やその部下たちの拷問にも等しいやり取りにも『父のため

なら『』と全て耐えたと記録されていた。今なら分かるが父とはアマテラス様のことだろう。あれほど力を持った魔族が変化したということはアマテラス様はおどろくべきことだと言っていたが、変化してもなおあれほどの意思を持つたものはその後はいなかつたらしい。結局それをくじくために角を折つたらしいのだが、それで元に戻つたということは父、アマテラス様への強すぎる忠誠がそういう結果をもたらしたのかもしれない。アマテラス様にはそれは伝えてあるので今後は大丈夫であろうが。そのものの血を半分継いでいるコトワリ殿はもしかしたら気をつけねばならんのかもしれないな

「私も魔物化するということでしょうか……」

「ハトル殿の変化はその後も同じ例のないある意味特別なものだ。あまり気にする必要も無いのかもしれない。少しでも気になるのならアマテラス様に相談するのがよいであろうな

「分かりました。ありがとうございます」

「うむ、健勝であられよ」

「はい」

「さて、ウイルス王への報告はノース姫をウェスト王子にお願いするのだ」「はあ？」「必要ならちやんと補足するから大丈夫なのだ」「それなら……」「では先に城に向かうのだ」「わかりました」

「で、どうするんだ、オレたち？」

「つむ、「コトワリ」、母の墓所へ案内するのだ」

「……？わかりました」

「いいです」

「どうやって葬ったか聞いてもいいか？」

「そのまま埋めたと父に聞きました」

「ならば好都合なのだ。コトワリ、角を貸すのだ」

大事に布に包んであつた角を出すコトワリ。少し躊躇したようだがアマテラスに渡す。

「魔族は厳密には死ないのだ。その肉体は眠りをもつて再生し、また復活するのだ。ハトルルの力ならばどの程度か分からぬも無いが、角を失っていた間の記憶のことも考えれば、体の近くの方がいいと思うのだ。ここに角の力を解放し、土に返す。融合した体と角の記憶は上手くいけば混ざり合い魔族の町の社にて復活するのだ。いつになるかは分からないのだが」

「お母様がよみがえるのですか？！」

「コトワリとの記憶を持っているとは限らないのだ。それにコトワリが生きている間に眠りから覚めるとも言い切れないのだ」

「でも、お母様がよみがえるのですね？」

「ああ、それは魔族の理なのだ」

「ではおねがいします」

「わかつたのだ」

アマテラスの手の上で角は光の粒となり地面に降り注ぐ。埋められたであろう体の部分がそれに反応してか地面も薄く発光する。しばらくするとその発光も収まる。もとのただの地面へと戻る。

「これでたぶんいいのだ。詳しく述べアマの町の社にて調べなくてはならないのだが、それはまたミカドに戻らないと分からぬのだ」「なんにせよ、あとはコトワリがミカドについてからだね。じゃあ行こうか」

「……はい……」

ノルンたちの力を借りつつ来た道を戻り、無事城へ着いた。アマテラスが威厳を持つて説明するよりも、身内であるノース姫やウェスト王子の説明の方が理解できることもあったのだろう、アマテラスの説明は最低限で済んだ。サンカイさんやツバキたちの無事でよかつたとの言葉と、泣きそうな顔をしながら無言で胸元へ飛び込んできたコリカさんを受け止めやつと一つ片付いたと大きな息をつくダイスケであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6632p/>

---

魔と生きる国

2011年7月7日07時19分発行